
道の先には.....

神山 備

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道の先には……

【Nコード】

N1006R

【作者名】

神山 備

【あらすじ】

何を思ったのか、異世界ファンタジーです。魔が差したとは思えません。異世界にもし行けたらやってみたいことを、思う存分やる予定。

僕、宮本美久と会社の先輩鮎川幸太郎は仕事で郊外に出掛ける途中迷子になって、運転している先輩と地図の読めない僕のどっちが悪いかで喧嘩を始めた。その時、車がものすごい光に包まれたかと思うと、すーんと落下。？ 何で？？ 前に道あったと思うんだけど

ど……次に気がついた時、僕らがいたのはモンスターと魔法のある世界だった。

そんな僕と先輩とあつちの世界の住人マシューとのデコボコ珍道中。

何気に、主人公チートかも。

4 / 25、完結を一旦はずして幸太郎スピノフ始めました。

9 / 1 原稿をこことサイトの二箇所にしました。

11 / 4 ファンタジー抜きの小ネタはじめました。

序

「だあーっ、もう！ やっぱりお前と来ると禄な事がねえ、この疫病神！！」

そう言つて車のダッシュボードを叩くのは、僕の会社の先輩鮎川幸太郎。

「そんなあ、道に迷つたのは僕のせいじゃないですよ」
遠慮がちにそういう僕を先輩はぐつと睨んだ。

「宮本、お前のせいじゃないって！？ この状態のどこが都内で頻繁に迷子になる地図の読めないお前のせいじゃないって言うんだ。だから、ナビ付きの俺の車で行くって言つたんだ」

「でも、こんな山道で先輩の真つ赤なセリカちゃんなんて走らせたら、それはそれで何と言われるか……」

それで遠慮がちにそう言つた僕に先輩は間髪入れずに、

「黙れ、ヘタレ宮本のくせに。確かにこんな道で俺のかわいいセリカWXに傷でもついた日にゃ、泣くにも泣けない。でも、こんな訳の解らないところで迷うよりは何ぼかましだろ」と、返した。

「けど、今回は地図見てないし、僕のせいじゃないですって！」

「うるさいっ！ 自分が地図見れないのを自慢するな！！」

そう言いながら不毛な言い合いをしているそのとき、ものすごい光に包まれたかと思うと、僕たち（正確に言えば僕たちの乗った車）はいきなり落ちたのだった。

何でだろ、たしかに前に道はあつたはずなのに……

迷子 1

僕たちはしばらくそのまま気を失っていたらしい、次に気がついた時、森の中にいた。落ちる前も山道を走っていたのはそうなんだけど、木の種類が全く違っていた。落ちる前に走っていた周りの木はいかにも日本らしい杉木立だったけれども、今日の前にあるのは広葉樹。しかも、青々としている。それに、心なしか気温も高い気がする。

それに、落ちてきたはずの切り立った崖とか斜面なんてものはなくて、緩やかな丘みたいなものが遙か向こうまで広がっている。アスファルトで舗装された道は石畳になっているし、なにより確かにかなりな高さを降りたはずなのに、僕たちはもちろん、会社の車（先輩に言わせれば廃車寸前のポンコツ）にもぜんぜん傷なんか一つも付いていなかった。

「おい、宮本、乗れっ」

それを確認した先輩は、そう言っで車に戻る。慌てて僕も車に乗るとエンジンをかけ発進させた。

「ちゃんと走るみたいですね」

「ああ、ポンコツの割には上等じゃねえか」

先輩はそう言っでさらに車を走らせた。

しばらく行くと道ばたに大きなリンゴの木が見えてきた。真っ赤な実が所狭しとひしめき合っている。

「そう言えばお腹空きましたね。あのリンゴ食べましょーうよ」

「宮本、お前の頭には食うことと寝ることしかないのか？」

「そんなこと言っただって、お腹空いたんですから。それに、こんな道ばたにぼつりと植わってるんだから絶対に野生ですよ。採ったって誰にも怒られないと思います」

呆れる先輩に僕は胸を張ってそう答えた。どう言っただって先輩は僕をバカにするだろうし、それなら開き直って空腹を満たす方が建設

的だと思わない？

「じゃあ、お前勝手に行って採って来い！俺は知らん」

先輩はそう言うと、僕をリンゴの木の端まで戻って降ろしてくれた。僕は僕の背でも届くところになっている実を三つ四つ採り、その内の一つにかぶりついた。

「うー、おいひい」

間違いなく完全無農薬のそれは、僕が今まで食べたリンゴの中で一番美味しかった。

しかし次の瞬間、僕は

「ぎゃっ！！」

という、悲鳴を上げた。

「宮本、どうした？ やっぱり毒リンゴだったのか、それ」

その悲鳴を聞きつけて先輩は後から考えるとあんまりな台詞を吐きながらそれでも降りてきてくれた。

「違いますよ、ほ、ほらアレ……うわぁ！！」

そのとき、震える僕に向かって、そのゲル状の物体が突進してきたのだった。

迷子 2

先輩はとっさにその辺にあった木の棒を持って構える。某ド○クの初期アイテム『ひのきのぼう』っていつのがあるけど、さしずめこれは『りんごのぼう』ってところだろうか。何にしても再弱アイテムには違いない。確か剣道2段の先輩は格好に反して意外と素早いゲル状を、それでバンバンぶっ叩いている。何をしても様になる人だと思う。

そのとき、先輩がぶっ叩いているのは別のゲル状が僕の足にまとわりついてきた。ひえゝっ、キモチワルイ！！僕は全身総毛立ちながら、そのゲル状に自分の食べていたリンゴをぶつけた。そして自分の手でもげる範囲のリンゴを次々ともぎとって、ガンガンゲル状に投げつける。

「宮本、もういい。これ以上やったら、リンゴがもつたない」

しばらくして、そう言いながら先輩が僕の腕を抑えた。

「僕がどうなってもいいっていうんですか」

「どうなるって、どうもならんだろ。もうこいつとつくにノビてるし」

だって、こんなアンデットっぽい奴、またすぐ復活して動き出しそうな気がするんだもの。そう言おうとした僕に先輩は、

「でも、お前思ったよりもなかなかやるな。さしずめ技名は『リンゴ乱舞』ってところか。ガキ大将に泣きながらめちやくちやな攻撃加えるチビガキみたいで、なかなか良かったぞ」

と言った。一応褒められているみたいだけど、そんな褒め方ってなんかウレシクナイ。

とにかく、投げたリンゴを回収して（だって、そのまま放置したって腐っていただけだし、それなら洗って食べた方が……）車に乗せると、先輩はそれを見て鼻で笑った。その時、ちょっと離れたところから

「Help help me!」

と、ちよつと訛つた英語で助けを呼ぶ声が聞こえた。僕はその声を聞くと、自分のスキルなんてものは一切無視して、そこに走り出していた。

「おいこら、宮本！ 待てよ!!」

それを見た先輩がやれやれと首を振りながら、今度はトランクを開けて車から修理用のスパナを取り出し、僕の後を追いかけた。

変な第一村人？ 発見

僕たちが駆けつけると、声の主は茶髪で碧眼の男。大きな荷物を今度は犬？　みたいな（そう言うにはかわい気のない）奴らに取られようとしていた。その男自身結構がたいもデカくて一匹ぐらいなら振り切れるんだろうが、相手は4匹もいて、その中の一匹が指揮して集団的に動いているという、なかなか獣とはいえ賢そうな連中だった。

僕はそのときになってやっと、自分がリングを車の中に全部置いてきたことを思い出した。

「宮本、お前は下がってる！」

僕がそのことに気づいてあたふたしていると、先輩はそう言って、スパナで犬もどきをボカボカと殴ってあつと言う間に退散させた。

【助けてくださって、本当にありがとうございました。この中には王都にもって行かなきゃならんでえじな手紙が入っていたもんで、焦ったですじゃ】

その男の人は何度も頭を下げながらで早口にそう言った。

【オウト？　オウトって何？】

【王都と言えば、王都グランディーナに決まってっででしょ？　おかしいことを聞かんでくだっせ】

「先輩、この人変です」

「さっきから出てきている変な化けもんと言い、この外人と言い、確かに妙だがな、俺に言わせりやお前も変だ。大体俺には何を言ってるのかさっぱりわからん。そんな男とちゃんと会話できているお前っていったい何だ？」

「えっ、先輩わからないんですか。この人王様に届ける手紙を守ってくれたってお礼言ってるんですけど」

「お前こいつがしゃべってることわかるのか？」

ものすごく驚いてそう言う先輩に、僕は逆にビックリしながら頷いた。確かに早口だったし、ものすごく訛ってるけど、この人のしゃべっているのは基本英語だ。それがわかれば、時々くるう文法を少し修正すれば内容はつかめる。

「だって、この人のしゃべってるの英語ですよ」

「英語？」

「ええ、かなり訛ってますけど」

「宮本、お前帰国子女か？」

「いいえ。大学英文科でしたけど、外国なんて一度も行ったことないですよ、僕」

「じゃあ、何で解るんだ？」

「僕授業ちゃんと出てましたもん」

外国に行ったことがないと言った僕に信じられないと目を瞞った先輩に僕は胸を張って答えた。

「……とにかくだな、この男が変なのかお前が変なのかもう少し行ってみれば判るだろ。おいそこの、お前も乗れ！…… Ride in this car」

先輩はひとしきり頭を抱えてから、そう言っただけで男に車に乗るように強要した。

【この車に乗ってくださいと言ってます】

だけど、先輩に車に乗るように言われてもきょんとしている男に僕が通訳する。

【コレに？ 馬のない馬車に……ですかい？ 勇者様方も、モンスタ―に襲われて馬を盗られたんですねえ。それでおいらを助けて下さったんかあ。ここでまず一休みしてから出発ってことですね。んじゃま、Lady】

男はそう言っただけで、先に僕が乗り込もうとしていた助手席のドアを開けると、僕の手を取った。そして、僕が乗り込むとおもむろにドアを閉め、自分は後部座席のドアを開けて荷物をドンと放り込むと自

分も乗り込んだ。僕は勇者様とLadyという単語にすごく嫌な予感がした。その部分だけは先輩も理解したらしく、僕の顔を見てぶつと吹きながら車に乗り込む。

【で、これからどうするんですかい】

それから身を乗り出しながら聞いた男に、先輩は答える代わりにエンジンをかけ、思いっきりアクセルを踏んだ。

【ば、馬車が……馬もないのに走って……ぎゃあゝお助けを！！】

続いて車の中には、僕たちが駆けつける時に聞いたよりさらにひきつった悲鳴が響きわたったのだった。

異世界トリップ決定

車の中には晴れやかに笑う先輩と、恐怖でゆがんだ顔の男。
やがて僕らの行く先に、見慣れないヨーロッパ風の田舎町が見えてきた。

【リルムの町だ！】

それを見て男はひきつったままでちよつと綻んだ。逆にそれを聞いた先輩の方が苦虫を噛みつぶした顔になって、車を停めた。

「やっぱり、さっきの光で僕たちの方がとばされたみたいですね。異世界トリップってやつですかね」

思案顔で僕がそう言っていると、先輩は僕の頭を叩いて、

「何、冷静に分析してやんだ。ったく、やっぱりお前と一緒にいると禄なことがない」

とハンドルに突っ伏した。

「だからあ、先輩が運転してたんだし、僕の所為じゃないですって！」

「うるさい、黙れ！！　なら俺の所為だとも言いたいか」

「別にそんなこと、言ってないでしょ！」

だけど、僕たちがいつものように言い合いを始めた時、はじめは呆気にとられていた男がクスクスと笑い出した。

【おい、何笑ってんだ。それと、お前名前は？】

【マシユー、マシユー・カールっす】

すると先輩はむっとした顔のまま男に聞いた。

「先輩もこの人の言葉判るんですか？」

「お前がさっきこいつのしゃべってるのは英語だって言っただろ。お前にできることが、俺にできない訳あるか！」

僕が驚いて聞き返すと、先輩はそう言った。でも、よくよく考えてみると、名前聞いたただけなんだよね。それだったら誰でもできる…

…なんてことは口が裂けてもいえないけど。

【で、勇者様方のお名前は】

【俺？ 俺は鮎川幸太郎。あ、コータロー・アユカワ、わかるか？】

「O-O h、コータル、コータル」

「コータロー」

「コータル」

「ま、これが限界か。OK」

マシユーは頷くと今度は僕を指さしたので、

【僕は宮本美久。ヨシヒサ・ミヤモト】

「ヨッシャ？」

「ヨシヒサー！」

「ヨッシャ？」

「よっしゃ、よっしゃそれでいい」

ヨッシャと言ったマシユーに、先輩はうなづきながらOKを出す。

「勝手に決めないでください。よっしゃよっしゃって、何十年か前の政治家じゃあるまいし、良い訳ないでしょ！」

名前を聞かれてるのは僕なんですから。

「お前も古いな。じゃあ、音読みでビクとでも呼ばせるか」

「音読み？ ヨシでもヒサでもあるでしょ？」

まあ、ヨッシャよりはまし……そう言いかけた僕に、マシユーはビクというワードに反応し、

「O h、ヴィク！ ヴィクトリアー！！ OK、OK」

と満面の笑みで理解？ を示した。

だけど、ヴィクトリアって……

【ダメです、やっぱりダメー！！ ヴィクトリアって言ったら女性の名前じゃないですか。ダメ、Not Victria! I'm not female!!】

「Not female!？」

慌てて訂正した僕に、マシユーは目をまん丸にしてそう聞き返した。

ああ、こんなに美味しいものが……だなんて

【男お！！】

【そんなにびつくりすることないでしょ！？　僕ちゃんとスカートなんか穿いてないじゃないですか！】

【そりゃ、勇者様の連れなんだから、お忍びの姫様なのかなあとか……】

女性に間違われていたことに激怒する僕に、マシューが遠慮がちにそう言った。その目はどことなく傷ついた風。そして、

【バカ、こいつがそんな品のいい顔してるか？】

【確かに上品とは言えないかもしれないけど、かわいいじゃないですか。コータロと並ぶとお似合いです】

先輩がいつものように僕をこき下ろすのに同調して、何気に酷いことをさらつと云つてのける。うつつ、確かに165cmの僕は、183cmの先輩やほぼ変わらないだろうマシューからすれば小柄だけれどね、

【げっ、こいつとお似合いだなんて言うな！】

すかさず先輩が言う。でも、それはこっちの台詞です。

【そうか、妙な光に包まれてこっちに運ばれてきたねえ。あんたたちこれからどうするね】

それから、僕たちはマシューにここに運ばれてきた経緯を掻い摘んで話した。マシューは僕たちが別に高貴な出自でもなく、歳もさして変わらないことが判ると幾分砕けた口調になっていた。だけど、元々敬語が曖昧（日本語が厳密すぎるのか）な英語では大して変化はないのだけれど。それに、マシューが僕たちを高貴な出自だと勘違いしたのも、その口語というより、ブリティッシュイングリッシュな日本の英語教育が原因なのだろうし。

大体、僕だって私だって、こっちじゃ全部I my meだ。そ

れが間違いの根元だって気がする……って、英語に八つ当たりしても仕方ないのだけだね。

【とにかく、腹が減っていてはなんもいい考えは浮かばんで、リルムの町で腹ごしらえといくか】

マシューに促されて僕たちは町外れで車を降りると（馬のない馬車なんかに乗っていたら、絶対にドン引きされるとマシューが言うので）リルムの町に入った。

【お、良いぞ。今日は市が立ってる】
見ると町のショボいメインストリートにはいくつかの屋台が出ていた。

「プリンだあ！」

その中に僕は『Mon Pudding』という看板を見つけて色めきたった。車のないこの世界には当然プラ容器なんてものはないらしく、極小のブリキっぽいバケツに黄色いプルプルが収まっていた。

【それ三つ】

すると、その声を聞いたマシューがプリンを買って僕たちに手渡ししてくれた。

【助けてくれた礼だ、食え】

【うわあ、ありがとう】

僕はそれを受け取ると、添え付けの木の棒で掬い取って口に入れる。予想通りと言うか、予想以上の美味しさ。

「んまい！ 幸せだあ〜」

思わず日本語でうなってしまう。

「相変わらず、おまえの幸せはお手軽だなあ。ま、なかなかいけるかな」

先輩もまんざらではない様子。

【旨いか】

【はい、とっても】

味を聞いてきたマシユーに僕はぶんぶんと首を縦に振ってそう答えた。でも、僕の頷きにニコニコしながらマシユーが言った

【そうだろ、そうだろ。ここいらは本当に良いスライムがいっぱいとれるからな】

の一言で、僕と先輩は互いの顔を見合わせて固まってしまった。

「す、スライム!!?」

「お、おえ〜っ!」

僕が素っ頓狂な声を上げると同時に先輩が吐いた。あんなに美味しかったプリンの原料がほんのついさっき戦ったあのゲル状だったなんて……

「シヨックだ……こんなに美味しいものがスライムでできているなんて……」

「つていいながら、お前まだ食ってんじゃねえか。一体どんな神経してんだ」

シヨックだと言いながらどんどんと食べ続ける僕に、先輩は蒼い顔をしながらそう言った。

「だけど、こんなに美味しいんですよ。それに、途中で捨てるなんてもったいないです、そんなこと僕にはできません」

そのあと僕は、

『何でこんなに美味しいものがスライムからできてるんだ』と繰り返しつつばきながら、先輩の分のプリンも平らげたのだった。

食堂にて

それから気を取り直して、僕たちは町で唯一の居酒屋兼食堂らしきところに入った。さすがにちゃんとした店構えならそんなに妙なものは出てこないと……信じてマシューに注文してもらおう。ただ、先輩は料理と一緒にちやっかりビールを注文していた。

「先輩、これからまだ車に乗るんだったら、飲酒運転はダメですよ」と僕が窘めると、

「うるさい、これが飲まずにやってられるか。それに、車の存在していない社会で飲酒運転もクソもあるか」

と逆ギレした。言われてみればそうかも。たくさんあるからルールができてくるのであって、僕たちが乗っている車一台しかなければ、そんなものできる訳がない。

やがてやってきた料理を僕たちは一切聞かずに食べた。もし聞いて、その材料にさっきマシューが襲われていた『犬もどき』やその他の妙なモンスターなんかが使われていることが判ってしまったら僕たちは餓死しかねない。僕はともかく、先輩はその可能性大だ。その証拠に、先輩はさっきからベジタリアンに宗旨替えしたのかと思っほど野菜しかつついていない。

それでも何とか食事らしいものを終えると、先輩は徐にタバコを取り出して、ライターで火をつけた。それを見てマシューが驚く。

【コータロ、あんた剣の腕もあるのに、魔法も使えるのか？】

【は？ ああ、これね。まあちょっとな】

先輩はマシューがまじまじと見ている、今度の新商品につける予定だったロイヤリティーのライター（つまりタダもらいの品物）を手のひらで転がして不敵な笑みを浮かべた。

「先輩っ！」

「何だ、宮本。お前何か言いたそうだな」

「先輩、コレって要するにおまけじゃないですか。そんなんで魔法

使いごっこなんかしてると後でイタい目に遭いますよ」

「堅いこと言うなって。あっちが勝手に勘違いしてんだから」

やがて、先輩が一服し終わり、僕たちは席を立った。

【あのお、お代は】

【はい、75ガルドになります】

そして料金を尋ねた僕に、店のおかみさんは愛想の良い笑みを浮かべてそう答えた。そうか、75。ずいぶん安いな。えっ？ 75…
…75ガルドお！！

「先輩、通貨単位が違う……」

「そりゃそうだろ。言葉が通じない世界で、金と一緒にわけないだろ」

持っているお金が使えないことに気づいて慌てる僕に、先輩は平然とそう返す。

「じゃあ、どうして払うんですか！ マシューにはっかり払わせられないでしょ？」

「何なら、お前が身体で払う？ お前なら高く買ってもらえそうだぞ。何せビクだもんな」

続く僕の言葉に、先輩はそう言って高笑いした。

……やっぱりこの人、鬼だ……

敏腕営業マンの錬金術？

【旦那、お困りですかい？】

その時、店の奥から、ひとりの男が僕たちに近づいてきた。こぎれいな身なりをしていて、隙がない。旅人なのかそれとも王都あたりの商人で、この町に来ているのか、何にしてもこの田舎町には似つかわしくないガラガラとした目つきをしていた。

【良けりや、あつしがお出ししやすよ】

と、続ける目線の先には先輩が握っているライターが……えっ、それがお目当てなの？

【ふっ、あんたもこれが目当てか。安くはないぞ】

一応、先輩の名誉のためにライターとか言っただけど、実はアウトドアグッズの販促品であるそのチッカマンを握り直して、先輩はそう言っただけでニヤリと笑った。そうやって見てみると、あの形はマジッククロッドみたいに見えないこともないし、『キャンプのお供に……ファイアメイト』のロゴは、日本語なんて知らない彼らには何かの詠唱呪文を刻んでいるようにしか見えないかも。けど、安くはないって……元々タダでしょうが！先輩、どれだけふっかける気なんだろう。

【数は用意できないでしょうかね。そしたらそれ相応の物はこちらも用意させてもらいます】

【わかった、じゃあ5つ6つ用意しよう。ただ、貴重品だからな、しかるべき所に隠してある】

車の中に問題のマジッククロッドもどきは100個以上あるって言うのに、先輩はそう言って、一人先に店を出た。僕に日本語で、「つけられないように、お前はここにいてあいつを見張ってる」と言い残して。

魔女様降臨……！！ 1

先輩が戻って来て、僕たちはリルムの町の旅館の男が泊まっている部屋に行った。そこは回復系の木の実やら、石化防止のペンダントやらがいっぱい。僕が興奮しっぱなしで、一つ一つ眺めているのを先輩は些か冷めた眼で、マシューは幾分呆れた顔で見ている。だって、これってリアルRPGのオンパレードじゃない！これが興奮せずにいられますかって！！

僕はその中に古ぼけた本が一冊あるのを見つけた。何が書いてあるのか見ようと開いた僕に男は言った。

【止めときな、そいつは持ち主を選ぶんだ。大抵の奴は読めもしねえよ】

先輩にはへつらっているクセに、随分と僕にはタメ口なんじゃない？なんて思いつつ、

【へえ、そうなの】

と返しながら、僕はパラパラとページをめくって、

「火に関する呪文かあ…… fire ball<火の玉>って、笑えるう」

と声を出しながらその本を読む。それを聞いて男はおるか先輩やマシューまでもがギョツとして僕を見た。そして僕はその本の冒頭部分にあった『注意書き』を参考に『こめかみに意識を集中』して、もう一度、

<火の玉> fire ball！

と詠唱した。胸の前に広げた手にぼあつと赤い玉が生まれる。だけど、起こったことにビックリして気がそげちゃったのか、それはすぐに消えちゃったけど。

「うわっ、これってますますリアルRPG！」

と一人はしゃぐ僕に、後の3人の大の男は完全にフリーズしてしまっていた。

【お前、魔女なのか……】

しばらくしてから、やっと気を取り直して男がそう言った。僕は『魔女』というワードにちよつと『またか』と思いつつも、

【そうみたいですな、僕、超ド級の初心者ですけど】
と男に返した。

で、目立たないようにこつち仕様の服とか、ちよつとした武器などをチ ッカマン計10本で購入。その中にはちゃんとさっきの『魔道書』（チ ッカマン3本相当）も含まれている。

僕はホクホクでその本を読みながら宿屋を出た。先輩はマシユーに先に小声で耳打ちしてから僕に、

「こら、読みながら歩くな。転ぶぞ。それにな……」

とそこからぐつと声のトーンを落として、

「町のはずれまで来たら、一気に車まで走るぞ。その本を俺に渡すか、小脇に抱えてろ」

と言った。別に声のボリウムを下げなくたって日本語なんだから、ここの人は誰も解りやしません、とか思いながら僕は小脇に本を抱えた。

そして、町外れに来た僕たちは、一瞬3人で顔を見合わせると、車に向かって一気に駆けだした。

* - * - - *

僕たちが走り出した途端、慌てて追いかけてきた一団があった。総勢10名ほどか、さっきの商人が差し向けた者だろう。目的はたぶんあのチ ッカマンだ。先輩が一人で取りに行ったのを見て、まだ隠し持っていると思ったに違いない。確かに希少価値と言えばそうかもしれないけど、なんだかなあ。

そんなに足は遅い方じゃないはずだけど、彼らは普段車なんか乗らずに生活してるんだろ？から、かなり早くて少しずつ間合いを詰められている気がする。このままじゃ、車に乗って発進するためのタイムロスで追いつかれてしまう。何か彼らの足を止める方法は？

その時僕が小脇に抱えている本がきらりと光った気がした。『君、持ち主を選ぶんだよね。僕を持ち主だと思ってくれているなら、助けてくれない？』と僕は本に囁きかけると、走るのを止め、追っ手の方に向き直ると『魔道書』をばつと開いて、そのページを見る。

やった！ 停止魔法だ！！ 僕は、

<汝の影よ、その大地に貼り付け！ STOP！>と唱えて、彼らをじつと見据えた。追っ手はまるで『だるまさんがころんだ』で鬼に見られた時のようにぴたりとその場で動きを止めた。

「宮本何をしている。早くこっちに来い！」

その様子に、先輩が慌ててそう叫ぶ。

「だ、ダメです。僕の今の集中力では、一瞬でも眼を離したらそこで術は切れます。だから、先輩が車を取ってきてここまで回してください」

「お、おう分かった。待ってる」

先輩は僕のその言葉にそう言って、マシューに車に向かうように促した。そして車に乗り込むと、先輩は旋回しながら僕の前にピタリと車をつけた。その間約20秒。僕が眼を離すとすぐ、金縛りが解けた追っ手が慌ててまた走ってきたけど、僕が乗り込むのがわずかに早かった。先輩は僕が乗ったのを確認するとドアを閉める前にアクセルを全開で踏み込んで……一気にリルムの町を後にした。

魔女様降臨……！！ 2

【ここまでくりやもう大丈夫だろう、ふええ、助かった】

しばらく走ったところでマシューがそう言ったので、先輩は車を停めた。

【それにしてもビク、お前すごいな。いきなり魔法を使いこなすか？】

【えへへ、あれは何でもいいから相手の動きを止められたらって思っ
てページを開いたら、たまたま停止魔法のページだったってだけ
です。偶然ですよ】

ビクと呼ばれるのは幾分不満だけど、褒められるのはなんだか悪い
気はしない。そしたら、隣に座っていた先輩が
僕の髪をわしつと掴んで

「いい気になるんじゃねえ」

と言ったので、僕はふくれっ面で先輩をにらんだ。

「大体、俺に命令するなんざ、100年早いんだ。ヘタレ宮本のク
セに」

「でも、あの時には敵の動きを止めなきゃ……」

「だからって、できるかどうかとも判らない魔法で乗り切りろうと思
う奴があるか。まったく、寿命が縮まるかと思っただぞ」

先輩はそう言いながら、髪を掴んだままあらっぽく僕の頭をなで続
ける。ああそうか、先輩心配してくれてんだ。

「先輩、ありがと」

「ま……解ればいいんだ、解れば」

その時、マシューがうん、と一つ大きな咳払いをして、

【俺に判る言葉でしゃべってもらええかな。どうもさっきから自分
が邪魔者みたいな気がして、しょうがない】
と憮然とした表情でそう言った。

【邪魔者って……ただ、いきなり魔法を使ったのを叱られているだ

けです】

【コータロが怒ってる？ 言葉が解らない俺からすれば、見つめあって愛を語り合っている様にしか見えなかったぞ】

【マシュー、気色悪いこというな！ 何が悲しくて男に愛を語らなきゃならん】

それは、こっちの台詞！

【いや、愛があれば性別だって乗り越えられるのかなと……】

【マシュー！】

ぼそつと小声でそう言ったマシューを僕はキツと睨んで、パラパラと『魔道書』のページをめくる。

【さあ、どれにしようかな】

その言葉に、マシューはもちろん先輩まで蒼くなる。

「おい、止める宮本。こんなところで魔法なんか発動したら、このポソコツが爆発しちまう！」

【えっ、それがどうしたの？ どうせポソコツでしょ？】

それに対して僕は笑顔でそう返しながら手を胸の前に繰り出す。その仕草を見て、先輩とマシューは同時に叫んだ。

【ひえーっ、魔女様お助けを！！】

……だから、魔女じゃないってば！！

魔女様降臨……！！ 3

僕は指をこきこき鳴らしながら笑みを浮かべていた。でも、魔法を使おうとした僕は急にめまいがして目の前が真っ白になった。

次に目覚めた時、僕はちゃんと宿屋のベッドに寝かされていた。

「目、覚めたか。急に目を回すから心配したぞ。マシューが言うには、魔力の使い過ぎだそうだ。初心者が時空系の停止魔法なんつー上級魔法をいきなり複数にかけるなんぞ、今まで聞いたことがないつてよ」

そうか、MP切れって訳か。元々ほとんどMP自体が少ないのだから、うし、

「あ、ありがとうございます。ちゃんと運んでくれたんですね」

「感謝してくれよ、マシューはあんな図体してるのに、実はちつとも力がないしで、結局俺が一人でここまで運んだんだからな。それにしても、おまえ重いぞ。抱き上げた時、腰が折れるかと思った」

「すいません、重くつて。でも、僕は先輩がいつも抱いているような、女の人みたいに軽くはないですよ。なんせ男ですから」

『男』というワードに力を込めて僕が言う。

「うそうそ、重かかったよ。ははは、魔女発言をまだ根に持つてんのかお前」

「当たり前でしょ？ それよりマシューは？」

そう言えばマシューがいない。マシューが居たら、『また俺の分からない言葉で二人こそこそしゃべってる』と拗ねられかねないほど、日本語で会話している。

「あ、さっきなんかぼそぼそと訳の分からないことをつぶやきながら出かけるって言って出てったが」

そんなことを話していると、マシューが戻ってきた。

【ビク、気が付いたか】

【うん、たった今】

【ほい、コレ】

マシューはそう言つと、真っ赤な実を僕の手の上に乗せた。

【何なのコレ？】

【これは、ガザの実だ。魔力の回復に効果がある。食え】

【買ったの？】

【いや、その森で取ってきた】

【わざわざ取ってきてくれたの？ うわぁ、ありがとう】

【あ、いや、礼なんかいい】

僕が、お礼を言つと、マシューは赤い顔をしてもしもじしている。

【何？ 僕何か変なこと言つた？】

「おい宮本、お前がそんな殺傷能力のある笑顔なんかしてやるからだ。しまいに押し倒されるぞ」

それを見ていた先輩が、ぶつと吹き出しながらそう言つた。うー、何考えてんだか、この先輩は。

でも、真っ赤な顔をしているマシューのこと、ちょっとかわいいとか思つたりして……

僕、ちょっとヤバいかもしれない。

僕、視力検査が必要ですか？

自分のそんな感情を振り払うかのように、僕はガゼの実をがりつと大きな口で齧った。酸っぱい！それも梅干しなんて目じやないくらい目から星が出てきそうなくらいの酸っぱさで、思わず口が歪んだまま固まる。

「ふ、ふっはい！」

真っ赤な色からは想像できなかったその味に驚いて、僕は思わず嘔まずに飲み込んでしまった。

【あ、ごめん。不味かったか？俺、味は知らなかったもんで】
その様子に、マシユーが慌ててそう言う。そうだよな、見るからに体育会系の（その割には非力らしいけど）マシユーが魔法系の回復アイテムを食べることなんてないんだろう。よく、こんな実の事を知っていたなと思った。まあ、こっちの方では食べなくても基本のアイテムなのかもしれないけどね。

【うっん、ちょっと（実はかなりなんだけど）酸っぱかっただけ。心配なくて、えっ？……！！】

それに対して心配しないでと言おうとした僕は驚いた。目の前にいたマシユーがいきなりかわいい女の子になっていたのだ。歳はたぶん、10歳前後。同じ茶髪で碧眼なんだけど、髪は長くて緩やかにウェーブがかかっている。

【ど、どうした？ そんなに穴のあくぐらい見つめられると、いくら俺でも照れるぞ】

だけど、そう見えたのは一瞬で、そう言った彼は相変わらずいかついおっさんだった。

【ぼ、僕疲れてるのかな。一瞬マシユーが女の子に見えた……】

【は？ どこをどう見たらこいつが女の子に見えるって！？ おっさん丸出しだろうが】

それに対して、先輩は息も絶え絶えに笑っている。マシユーも

【昨日の仕返し、俺のどこが女だ。しかも女の子？】

と、怒ってはいるが、どこことなく焦っているような気もする。

「使ったことのない魔法を使って、頭いかれたんじゃないかねえか？ もうこのまま飯食わないで寝ろ」

「えーっ、ご飯は食べますよ。僕MP切れで倒れたんですよ。食べなきゃ回復しませんよ」

先輩のご飯抜き発言に、僕は猛抗議した。でも、日本語のわからないマシューは心配そうに僕たちを見つめる。それに気づいた先輩は、【心配すんな、大丈夫だよ。この食い気バカが簡単にくたばるか。飯抜いて寝ろってたら、怒ってんだよ】

と説明している。その説明も説明だけど、それに対して大きく頷いて納得するマシューもマシューだ。

うー、僕病人なのに……みんな大っきライだ！！

文系のガソリン捻出大作戦 1

すっかり食べてぐっすり眠った僕は、翌日すっかり元気になった。魔力が完全に回復したかどうかは全然判ないけど、何だか今朝はどんとどんと力が湧いてくる気がする。あのガザの実って、実は強壮剤？ マシューがいきなりかわいい女の子に見えちゃったりするしね。

朝食を食べ終えた僕は、先輩から“悲しいお知らせ”を聞く。どうやらあの通称ポンコツ（正式には社用車だけど）のガソリンがもう残り少ないと言う。

【たぶん、次の町までは保たないだろう。だから、ここに置いていく】

自家用車は、ガソリンなければただの鉄くず……よりまだ性質が悪い。中途半端なところでエンストしてしまえば道を塞ぐし、車を知らないこの世界の人の好奇の目にさらされる。悪くいけば山賊あたりにバラバラに解体されてしまうかもしれない。先輩の言うことはもっともだけど、気楽に着替えなんかの荷物は載せておけるし、何より僕らは営業と言ったって普段は電車や車を利用しての間つなぎの徒歩だ。そんなに長い距離を歩いている訳じゃない。あまり急な山道なんかはないみたいだけど、次の町まで歩き切れるのか？

【仕方ないかあ……】

僕はそう相槌を打ちながら、ふと道端の屋台に目が行った。その屋台は、軽く干した魚をフリッターにして売っている。

「宮本、お前朝あんなに食ったのに、まだ食うつもりか？」

屋台の揚げ用の大鍋を凝視している僕に、先輩は呆れ顔でそう言っただけど、僕はそれに返事をせず、逆に店のおばさんに

【この揚げた後の油ってどうされるんですか？】
と聞いた。するとおばさんは、

【えっ、コレ？ 捨てるだけだけど。カスは肥料にもなるけど、油

は使いようがなくっていつも困るのよ】

頭を抱えるようなポーズをしてそう答えた。

【じゃあ、僕がソレ、いただいていいですか？】

【持っていつてくれれば、こっちも助かるよ。その樽がそうだから、好きなだけ持ってきてな】

おばさんはそう言つて、路地の隅に置いてある樽を指差した。

【じゃあ、樽ごと頂いていきます】

【樽ごと！？ いったい何に使うんだい。言つとくけど、もうそんなのじゃ何も食えるもんは揚げられないよ】

【別に食べませんから、大丈夫です】

驚いてそう言うおばさんに、僕は笑顔でそう答えると、

【さあ、樽をひっくり返すのを手伝ってください。転がしていきますよ】

と、先輩とマシューに言った。先輩は慌てて

「お前、まさかこれをあのポンコツに入れるつもりじゃねえだろうな」

と言った。

「ええ、そのまさかです」

僕は、先輩にそう言つと、先輩は憮然とした表情で

「確かにそういう車が一時話題にはなつてたが、あれはソレ用に改造してるはずだ。お前、完全に壊す気か？」

と返す。それに対して僕はマシューに、

【マシュー、ここから王都グランディーナまではあと50マイル（80km）くらいって言つてましたっけ】

と聞くと、マシューは

【ああ、あと町3つだからそれくらいだろうな】
と言った。

「何もそのままで入れるつもりはないですよ、先輩。まあ見ててください」

僕はそう言つて、首をかしげながら樽を押している二人の男の前を

鼻歌交じりで先導していった。

文系のガソリン捻出大作戦 2

車の前まで樽を運んでもらった僕は、その樽を凝視し、中身だけに集中する。

「よし、ロックオンっと」

「何をやるつもりだ」

「先輩、石油っていうのは、太古の生物が化石になって液化化したものですよね。僕、文系だから詳しく知らないですけど」

「は？ 俺も文系だしよく分かんねえけど、そうだったかな」

「じゃあ、それ再現しちゃえば良いんですよ」

「再現って……」

どうやってたら再現できるってんだ？ と頭の中に疑問符を一杯蓄えているのが丸分かりの先輩と、日本語で会話しているので、意味が分からず（もともと英語で説明したってこの世界のマシユーには内容が理解できるとは思えないけど）僕の出方を見守っているマシユーを後目に、僕はもう一度樽の方に向き直って、

< 汝その営みを止め、石となれ。Stone！ >

と、中身を石化させ、

< Press >

と圧縮させる魔法を発動させる。それから、

< 時の流れよ、汝の中で光陰の如く駆け抜けよ。Still！ >
と、樽の中身の時間だけを一気に進ませた。

「さてつと、一億年ぐらい進んだかな」

「一億年……」

「先輩、中身が液化化してるか確かめてください」

僕は一億年という途方もない数字に驚いている先輩にそう指示した。先輩は、

「宮本の癖に、俺に命令なんかするな」

と言いつつ、素直に僕の指示に従う。樽の栓を抜くと、嗅いだこと

のある揮発性の香りがあたりに広がった。

「う、ウソだろ？ ホントにガソリンが出来てんのかよ」

「じゃあ、入れましよう」

僕はそう言つと、車のガソリントankの栓を開いて、高く手を挙げると、

<汝その重さを天使の羽の如くし、我の手の動きに従え。Move！>

と唱えると、樽は軽々と空中に浮き、自分からガソリントankにその中身を注ぎ入れた。こぼれてしまわない程度で僕は手を下におろす。樽はゆっくりと元の位置に戻った。

「はあ、終わった」

その途端、達成感と共に、急激な疲労が襲つてきて、僕はその場に膝をついて崩れた。

【ビ、ビク！】

そこでかかっていた魔法が解けたかのように、今まで固まっていたマシューがものすごい勢いで駆け寄ってきた。

【ねえ、大丈夫？ 頼むから無茶なんてしないで！】

と、涙目で叫ぶその声は、いつもの低い声ではなく、高く透き通ったかわいい声だ。

【マシュー、やっぱ、かわいい。でも、その顔で、オネエ、言葉は、ちよつと、キモチ悪い、かも】

それに対して僕は肩で息をしながらそう言つてグッジョブポーズで微笑んだ。目がかすんで体が傾ぐ。

その時、いきなり僕の唇に何かが触れた。強引に口に押し込まれる。えつ、まさかマシューが？ キス？？ と思った瞬間、目も覚めるような酸っぱさが広がる。

それは、

【誰がオネエだ。ごたごた言つてないで、コレを食え！！ 死んじまうぞ】

と言いながら、真っ赤になって怒っているマシューが手にしている
ガザの実だった。

文系のガソリン捻出大作戦 3

【まだ持ってたの？】

僕は酸っぱさで口を曲げながらそう聞いた。

【ああ、一つでもいくつでも手間は変わらんだろうが】

そりゃそうだろうけど、どうもこの強烈な酸っぱさは慣れない。『良薬口に苦し』とは聞くけど、『良薬口に酸っぱし』なんて反則技だ。まあ、一晩ですっかり回復してまた魔法が使えたんだから、かなりの妙薬だつてことは認める。でも、脳まで痺れる酸っぱさはどうにかしてほしい。

おかげで何とか倒れずに済んだんだけどね。

せっかくガソリンを満タンにしたんだから、一気にグランディーナまで行こうと言った僕に、マシューは、

【王都は都会だ。こんなもんどこにも隠しておく所がない。リルムの町でもそうだったんだ、欲に駆られた連中にまた狙われるぞ。一つ手前のガルダモで降りて歩こう】

と言った。僕はそれに対して、ため息を一つ落として、

【そして、マシューは一人で行くんですよね、違う？】

と返す。マシューの肩が図星という感じで揺れる。

【俺には……】

【大事な手紙を運ばなきゃいけないってことは解ってる……】

そして僕が言おうとしていることを聞きもしないで、

【解ってない、ビクは全然判ってない！ 俺の正体も知りもしないでこのこ付いて行こうなんてするな！！ それに、お前にはコータロがいるだろ。コータロはコータロの考えがあるだろうが】

と怒鳴り気味に先輩に尋ねる。それに対して先輩が、

【いや、俺は別にマシューとグランディーナに行くのには異論はないぞ。大体、この世界じゃ右も左も判りゃしないしな。ってことは、

俺たちはどこに行こうが何をしようが自由ってことだ。それに王都ならひよつとして俺たちが元の世界に戻る方法を知ってる奴もいるかもしれないしな。俺たちにとっても全くの無駄足じゃないと思ってるんだがな。それとも、お前の方が一緒に行ってまずい理由でもあるのか？」

と聞き返すと、

【い、いや……まずいことなんて……ない】

と、なんだかしどろもどろで答えた。

【じゃあ、問題ないだろ。『袖擦り合うも多生の縁』ともいうし、な、宮本】

【はい！】

ニヤリと笑いながらそういう先輩に、僕が元気に返事をする。それから、先輩が少し声をひそめて、

【それにな、こいつを敵に回したら怖いぞ。本気で怒らせてあの『一億年』の魔法なんかかけられてみる。一瞬で塵だぞ】

と付け加えた。それを聞いたマシューはぎょつとして僕を見る。そして、ぼそつと

【そうだよな、魔女様を怒らせると禄なことがないよな】
と、つぶやく。次の瞬間、

【誰が魔女様だって？】

と薄笑いする僕に、二人は完全に固まった。でも、

【冗談はそれくらいにして、早く行きましょー】

と、言って一歩足を出したところで僕は目の前が真っ暗になってその場に蹲る。結局、二人に支えられて車に乗り込む始末だ。

これじゃ、メガンテを連発するミニデーモンと変わらない……かも。

やがて、僕らの前にグランディーナの城郭が見えてきた。お城だけではなく、町自体も堀で囲まれていて、その端には警備の兵が常駐している。マシューが言うようにのにきに車で乗り付けられる雰囲気ではない。よくよく考えてみれば、城下町にそう易々と入れるようではそれこそ問題なのだ。

僕たちは街道筋の外れに車を置いて歩き始めた。車に乗っている間に僕はマシューから口にねじ込まれたガザの実を身震いしながら完食してはいたけど、たかだか2〜3時間のインターバルでは失ったダメージは回復しておらず、足下はおぼつかない。本当なら肩をかしてもらう所だけど、マシューも先輩も背が高すぎてそういう訳にもいかず、僕は蝉みたいにマシューにしがみついて歩いた。何故マシューかと言えば、先輩にそんなことをしたら、絶対になぐられると思うから。

だけど、町に入るための跳ね橋の手前の所で、僕らに突進してきた一団があつた。ちゃんとこの世界のトレンドに着替えてあるんだけどな、それでも『不審者』がバレた？

思わず三人で顔を見合わせる。そして、半ば引き気味の僕たちの前に息を切らせながらやってきた老人は、先輩の前で膝を折り、

【殿下、殿下、よくぞご無事で。フローリア姫様が到着されてもお歸りにならないので、心配しましたぞ】

と臣下の礼をとった。で、殿下！？ 電化じゃなくって？

（もっとも英語じゃ全く違う単語なんだけど）

老人はボカンとしてしている先輩にお構いなしに、今度は立ち上がった僕の手を取ると、

【セルディオ卿もお役目ご苦労様でございました。はて、その御仁は……】

握手を求めながらそう言う。えっ、僕も誰かと間違われてるの？

その中でマシューだけがそっくりさん？　がいないらしく、老人が胡乱な表情で彼を覗き込む。それに対して、マシューが

【わ、私はガツシユタルトのマシュー・カールと言う者です。フロリア姫に火急の文を届けに参りました】

つつかえながら老人に挨拶をした。

【なんと、ガツシユタルトのお使者であられるか。私め、このグランディール王国の家令を仰せつかつておりますクロヴィスと申します。さあ、殿下、陛下も心配されておられます。一刻も早くお城へと、先輩を促す。

「お、おいこは付いて行くべきなのか？」

それで慌てた先輩がこそつと僕に耳打ちをする。

「とにかく、マシューが手紙を渡すまでは、このまま付いて行った方が良いでしょう。ないんですか？　でないと、マシューまで疑われて手紙届けられなくなりそうです」

「分かった」

僕の答えに先輩は頷いてから、クロヴィスさんに続いて、城下町に入って行く。僕もそれに続いて歩きだしたけれど、まだ体に力が入らなくてマシューに寄りかかってゆっくりしか歩くことができない。それをクロヴィスさんに見とがめられた。

【やつ、これはセルディオ卿、いかがなされました。】

【あの、えっと、これはガス欠……いえ、ちよつと……】

ガソリン作ったから電池切れですなんて言えないしなあ。僕が答えられずにもじもじしていると、

【長旅で体調を崩されましたか。それは大変】

クロヴィスさんは勝手に体調不良と判断して（この人ホント自己完結型だよなあ）、一緒にいる騎士らしき人に目で合図を送る。

すると、見るからに屈強な男の人が、

【失礼します】

と頭を下げると、いきなり僕をお姫様だっこして歩き始めた。

王都へ 2

【あ、大丈夫です。僕、ちゃんと自分で歩けますから】

男が男にお姫様だっこされているというところでもなく恥ずかしい状況に僕は真っ赤になって抗議したが、だっこしている方の騎士は顔色一つ変えず、粛々と歩みを進めていく。

【ねえ、降ろしてって言ってるでしょ！】

そして、なおも抗議を続ける僕に、少し前を歩いていた先輩がいきなり僕の方に向き直ると、

【そんなに気を使うな、セルディオは私を守るためにちと力を使いすぎた。ここまで戻ってきたからにはもう案ずることはないではないか。陛下の御前までは楽をさせてもらえ】

と言った。げっ、いきなり王子なりきりですか、先輩。確かに、みんなのためにガソリン作って力使い果たしましたけどね。そんな迂闊な発言して、もし偽物だってバレたらどうするんですか！ 僕の顔が恐怖でひきつる。それを見た先輩はつかつかと僕の耳元まで戻ってくる、みんなに分からないように日本語で、

「こらっ、王子のフリしろってしたのはめえだろうが。とにかく今はなりきって、お前の体力が回復し次第何か理由付けてばっくれりゃ良いんだよ。今のお前の体力じゃ到底逃げきれないからな。がんばってそのなんたら卿になりきれ！」

と言ってから、

【本当に、私に忠誠を尽くすのは良いが、自分の身も労ってくれよとわざと大きな声でそう付け加えた。

【では、このように帰還が遅れたのはやはり殿下に……】
クロヴィスさんがそれを聞いて慌てて先輩に尋ねる。

【ああ、命も危うかったが、セルディオの力で何とかな】
調子に乗って先輩は王子の演技を続ける。それにしても、セルディオさんのキャラも知らないのに、そんなテキトーなこと言って良い

わけ？ でも、その発言に、みんながおおという感嘆の声が挙がり、クロヴィスさんがにこにこしながら、

【殿下の危急を救われたのですか。さすがは希代の魔術師と謳われたお方。私も見込んだ甲斐があったというもの】

と返した。良かった。そのセルディオさんって言う人もやっぱり魔法使いらしい。顔が似るとキャラもにるんだろっか。ホッとした途端、全身から汗が噴き出す。

【陛下との謁見が終わられたら、一旦城で休んで行かれると良ろしいでしょう】

あ、セルディオさんは一応お城の人じゃないんだ。

先輩さえ何とかできれば、僕は体調さえ回復したらここを出られる。僕は少しは希望を持てる展開に胸をちよつとなで下ろして、ふとマシューの方を見た。マシューの方も僕を見ていたらしく目があつたが、何とも複雑そうな顔をして目を逸らした。マシューは日本語が解らないから、先輩は本当は王子様で、騙されていたとも思っているのだろうか。

マシューに本当のことが説明できないまま、僕たちはグランディール城内へと入っていった。

謁見の間

城に入った僕たちにまるで卒業式みたいに両側に人の垣ができる。卒業式と違うのは彼らのほぼ全員が男性で、拍手の代わりに臣下の礼をとっている所だろう。

人の波を進んで、広い部屋（謁見の間）に入ると、僕はやっと床に降ろしてもらえた。そしたら、マシューがさりげなく、僕に脇（肩）じゃないのが本当に悲しいけど）貸してくれた。王様に謁見するのに座ったりはできないもんね。

すると、王様が謁見の間につく前に、一人の女性が入ってきた。彼女はまっすぐ先輩のところに来て、

【「コータル様ご無事で何よりです。本当にわたくし、心配いたしました。良かったです」

と言った。王子様の名前ってコータルなの？僕はびっくりする反面、マシューが幸太郎という名前をコータルと言ったことに納得した。こっちではコータルという名前が結構あるのかもしれないと。

だけど、その女性を見てまたびっくりする。

「か、薫！」

先輩が思わず素っ頓狂な声を上げた。だって、そこにいたのは総務の谷山先輩のそっくりさんだったからだ。

谷山先輩というのは、総務の女子社員で、先輩と売り上げの伝票のことなんかでつば迫り合い繰り返している、先輩とは犬猿の仲って感じの人だ。確か、谷山先輩のお祖母ちゃんがイギリス人で、どことなく日本人離れた顔（先輩はそれを『人間離れた顔』なんて茶化すけど）だから、この外人っぽい異世界集団にいても、僕らよりもっと違和感ないんだけども。

そのとき、谷山先輩もどきの体が傾いた。先輩がとっさに彼女の肩を抱いて支える。

【「フローリア姫様、大丈夫ですか」

それを見てお付きの侍女が慌てて彼女に近づいたが、先輩はそれをやんわりと制して、そのまま彼女を抱いたままだった。そうか、谷山先輩もどきが、ガツシユタルトからきたフローリア姫なんだ。状況から考えると彼女はコータル王子の婚約者みたいだから、ふらつく婚約者をさつさと侍女に預けちゃうのはまずいもんね。

【姫様は殿下が消息を絶たれてからほとんど眠っておられませんでしたから】

侍女がそう補足する。

【だって、わたくしコータル様ともう会えなくなってしまうのではないかと不安で……】

【もう心配しなくて良い。私はこうして無事だ】

それを聞いた先輩は、そう言っただけで彼女の頭を撫で始めた。そんな先輩の顔を横目で見ると、先輩はものすごく照れくさそうで嬉しそうな顔をしている。その顔はとても演技だとは思えない。もしかして先輩、本当は谷山先輩のこと好きだったの？ いつもケンカばかりしているけど、よくよく考えてみればじゃああったような……「そっかあ」

僕がぶつと吹き出してそう言っつと、

「宮本、何を変な妄想してる」

と、先輩は横目で僕をにらんだ。僕は、

「何にも。あ、お姫様の手前、あまり日本語でしゃべらない方が良いですよ」

と返した。

そのことで改めて僕の存在を思い出したみたいの（ホント、2人の世界だったもんねえ）お姫様、

【セルディオ卿も、今度は誠にご苦労さまでした。あら、そちらの方は……】

とマシユを覗き込む。手紙を届けなきゃならないご本人登場で、しかもかなりの美人だから緊張しているのかもしれないけど、マシユは目を泳がせて明後日の方向を見る。

【ほらマシュー、ガツシユタルトからの手紙渡さなきゃ。本人が出てきたからって固まってどうすんのさ】

貸して貰っている脇を突つつきながら、僕はそう言った。日本語が通じるんだったら、彼の名誉のために日本語で囁いてあげたい位だ。

【手紙ですか？ お父様かお母様に何か？】

僕の発言を聞いてフローリア姫がものすごく不安そうな顔になる。そりゃそうだろう、婚約者がやつと戻ってきたと思ったら、今度は親が……なんてことになれば、マジで倒れるかもしれない。でも、マシューは手紙を取り出すどころか、ますます明後日の方を向く。

それを見たお姫様は、何かを気づいた顔になり、

【まああなた、なんて格甲をしているの？ 正体をあらわしなさい！】

と、マシューに向かって一喝したのだった。

マシュー！ 君っては何？ 実はラスボスだったとか言わないでよね。

謁見の間 2

フローリア姫に一喝されたマシューは唇をかみしめて立ち尽くしていたが、姫様が

【エリーサ！ 分かっているのよ】

と言うと、マシューははあっと大きなため息を吐いた後、それこそしゅるしゅるという擬音が聞こえてきそうな勢いで、どんどんと縮んでいき、あつと言う間に子供の姿になった。それは、僕がガザの実を初めて食べたときに見たあの少女だった。ガザ実を食べることで、一時的に魔力が上がって、マシュー（エリーサちゃんと言うべきなのかな）にかけている魔法を見破っていたのだろう。でも、僕は経験値が限りなくゼロに近かったから、一瞬だったんだろうな。

それに、日本語と違って英語は言葉尻で性別を特定するのは難しいし、僕にとっては外国語だからマシューの体格で低音の声音で話されたら、僕の頭は無意識のうちにそれを男言葉として認識していた。だから、マシューのことを本当は女の子だったなんて微塵も思わなかったのだ。

【お姉ちゃま、なんで分かっちゃったの？】

エリーサちゃんは、フローリア姫にふくれっつらでそう尋ねた。

【分からない訳がないでしょ、あなたが家出したってことはとくにソルグが知らせてきてるし。あなたがお城を出て、向かうとしたら、私の所しかないだろうって、おじいさまもね】

【そう、バレてたの……それにしてもあのバカ鳥、速すぎるよ】

フローリア姫の答えに、エリーサちゃんが舌打ちをする。

【あら、あなたが遅すぎるのよ。大体、空を突っ切って飛んでくる鳥に、徒歩のあなたが勝てるわけじゃない。途中からは、コータル様たちの馬にでも乗せてもらえたの？ 先触れの者からは、あなたたちが歩いていたと聞いたけれど】

ソルグというのは、伝書鳩みたいなもんなんだろうか。鳥だと、

届けるのは不幸の手紙みたいな気はするけどね。

それはともかく、この世界の魔法使いが箒に乗って空が飛べるかどうか僕は知らないけれど、あの魔道書にも、空を飛ぶ項目はなかったし、飛ぶ魔法とかはないのかもしれない。

と言うことは、この幼い少女はなりを大人に変えていたとしても、たった一人で車で何時間もかかる道程を行こうとしていたってことだ。

パシンツ、次の瞬間、広い謁見の間に平手打ちをする音が響く。いや、正確に言えば響かせる。僕が、エリーサちゃんの頬を打ったのだ。

「なっ、宮本！」

【ビク!!!】

フローリア姫をお姉ちゃまと呼ぶのだから、エリーサちゃんは間違いないく隣国のお姫様。国際問題に発展しかねないその状況に、周りは一気に青ざめた。だけど、僕は怯まずに、

【エリーサ様、あなたは何という無茶をなさるんですか。魔法で大人のフリをしたからと言って、それはあくまでもフリでしかないんですよ。あのときもたまたま殿下と私が通りがかったからよかったものの、そうでなかったらどうなっていたことでしょう。そうなったときに、お悲しみになる陛下やお后様のことを考えなかったんですか!】

と言った。

【だって……】

【だってじゃないです。知り合って3日と経たないこの僕が、それを知ったらこんなに苦しいんですよ。何もなくて本当によかった】僕はそう言いながらエリーサちゃんの頬を撫でた。すると、エリーサちゃんは泣きながら僕にしがみついてくる。やっとこで立っている僕はちよつとよろけたけど、何とか踏ん張って、彼女を抱きしめた。その様子に、安堵のため息がそこかしこからもれてくる。

【お、おっほん、そろそろ陛下が参られます。お控えください】

その時、奥の方から出てきた人が僕たちをちらりと横目で見て
う言った。僕は慌ててエリーサちゃんの身体を離し、臣下の礼を
とって、王様を待った。

謁見の間 3

しばらくして奥の扉が全開になり、王様が徐に大臣やらお付きのものを大勢引き連れて現れて玉座に着いた。人々は概ね遅ればせながらの王子のご帰還に喜びと安堵の表情を浮かべている。でも、若干名そうじゃない者もいるようだ。特に大臣らしき小太りの中年のおっさんは、顔こそ笑ってはいるが、目が笑ってはおらず、なんとなく心の中で舌打ちしているのが聞こえてきそうな気がした。

【コータル、ようやく帰って参ったか。あまりに遅いので、無法者に襲われて命を落としたという者まで現れてな、心配したぞ。いくらこちらでの挙式がまだだからとは言え、セルディオとたった2人でなく、姫の馬車と同行する形で帰っても良かったのではないか？】王様は先輩にそう言った。やっぱりフローリア姫は王子の婚約者だったんだ。王様の言っていることを考えると、一応、ガッシュタルトでの結婚式は終わっているみたいだけど。

【いいえ、今度のことは私が不注意だっただけのこと。そのためにセルディオを大変な目に遭わせてしまいました】

王様の劳いの言葉に、先輩がさっきのクロヴィスさんへの発言とも辻褄を合わせるように報告する。

【そうだ、セルディオ、コータルの命を救ってくれたのだとな。このバルド、高い壇上からではあるが、心から礼を言うぞ】

【とんでもない。私は殿下に仕えるものとして、当然の責務を果たしたまでのこと。そのようなお言葉、もったいのうございます】

王様の感謝の言葉に、僕は低くしている姿勢をなお低くしてそう答えた。というより、一旦膝をついてしまったら、もう元に戻せなくなっているもある。ホントのところをいうと、僕の額にはうっすらと脂汗が浮かんでいる。

【して、その美しい少女は？】

続いて、王様は僕の横でそんな僕の様子を心配げに頭を下げているマシュー改めエリーサちゃんに眼を向けた。

【ガッシユタルト王女、エリーサ様にございます】

僕の紹介にエリーサちゃんは、王様にお辞儀をした。その仕草はとても優雅で美しい。こんなにちゃんとしつけられている彼女があの
大男マシューと同一人物だったなんて信じられない。

【ごめんなさい、お姉ちゃまのご成婚がどうしても見たくて、コータル様を追いかけて、強引に付いてきてしまいました】

ここにいる理由をそう言ったエリーサちゃんに、

【そうか、やはり小さくても女性は女性ということか。姫の婚儀をそれほどまでに見たかったか】

と、目を細める王様。でも、結婚式を見るために男になりすましてまで、たぶん、200km近い距離は歩かんでしょう、普通。本当は違う理由があるんだろうけど、そこは今聞けないし、これは乗った方が良い。

【謝るのは私の方です。遅れた分、一刻も早く城に戻ろうと、あなたを先にお送りせずに、連れ歩いてしまいました。その上、リルムの町では危ない目にも遭わせてしまいましたし、そんな私をあなたはわざわざガザの実を取りに行つてまで看病してくださったじゃないですか】

と、熱くエリーサちゃんを見る。

【殿下と姫様のご婚儀が終わり次第、ちゃんとガッシユタルトまで私がお送りしますからね】

【セルディオ様……】

エリーサちゃんがうるうるの眼で僕を見つめた。これで、僕はこの城を出られる。先輩は……このままグランディールの王子様になつてもらおう。

たぶん、僕の推測では王子様とセルディオさんはもうこの世にはいない。もしいたら、今頃きつとお城に帰って来れなくても何らかの連絡はしているはずだ。それが無いってことは……そう言うこと

なんだと思う。

【それでは、婚儀は明後日に執り行う。国中に触れを出せ】
一通り話を終えた後、王様は高らかに結婚式の日程を宣言した。しかし、その時、慌てて

【王よ、お待ちください。騙されてはなりませんぞ。こやつらは、殿下とセルディオ卿を騙る偽物でございます】
そう進言したのは、一人眼の笑っていなかった小太りのおっさんだった。

ラスボス登場……なのか？

【テオブロ、いい加減なことを言うでないぞ】

小太りのおっさん改めテオブロ（胡散臭いので、敬称略！）は眉にしわを寄せてそう言う王様に、胸を張ってこう言った。

【いい加減ではございません。よくご覧ください、殿下の髪や肌はもつと淡かったはず、セルディオはこれほど小さくはなかったと思いますぞ。

それに、こやつは殿下が襲われたのがリルムの町だと言っておりましたが、私がその報を聞いたのはトレントの森。話が違います】大臣クラスの自信満々の発言に、騎士たちがさつと身構える。

確かに先輩はちよつと染めていて真つ黒ではないけれど、それはあくまでも日本のビジネスライフにひつかからない程度の茶色だ。肌はこの色が生まれつきなんだから仕方ない。……にしても、どーせ僕はチビですよ！ 改めて言うことないじゃないですか！！ でも、これで僕はこのテオブロって奴が王子とセルディオさんを襲った真犯人だとわかった。

【ふうーん、テオブロさん、王子たちが襲われたのはトレントの森だった訳ね】

【そうだ、リルムの町ではないわ。トレントの森奥で殿下らしき者が魔物に切り裂かれていたと報告が……】

【なにっ、確かに、トレントの森と言えば街道沿いに行くよりは近道で、あの在のセルディオとならば行っても不思議はなかるうが、わしはその様な報告は聞いておらんぞ！】

テオブロの言葉に王様の声が裏返る。へえ、セルディオさんってお城に住んでないとは聞いていたけど、森に住んでるんだ。いかにも魔法使いっぽい。

【へえ、王様も知らないことを知ってるんだ、テオブロさんってば】
【何が言いたい！ わしは余計なことを耳に入れて王に心配をかけ

まいとだな……】

【ふふふ、確かに僕たちは本物の王子と魔法使いじゃない、日本つて国から飛ばされてきた、なんてことない異世界人ですよ】

ちよっぴり歯切れの悪いテオブロの答えに、僕は軽く笑いながらそう返す。

【び、ビク！】

「宮本、自分で言っでどうする！」

その答えに、エリーサちゃんも先輩も一瞬で青ざめた。

【ほほう、取り繕ってもボロが出ると解ってあっさり認めおったか。この偽王子たちをひっ捕らえよ！！】

テオブロはしてやったりという表情で騎士たちにそう命じた。だけど、それがウソだったら、とんでもない不敬罪だし、本物のセルデイオさんは『希代の魔法使い』と呼ばれるくらいの人だから、何か術を仕掛けてくるんじゃないかと思って騎士たちはゆっくりしか近づけない。

【何をしておる、早く捕らえぬか！】

【ちよっと待つてくださいいよ。確かに僕たちは本物ではないから、王子様たちが襲われた状況は全く知らないです。

でも、あなたは僕たちが偽物だって最初から判っていた。どうしてですか？ 本物の王子様はもうこの世にいないと知ってる、そういうことですよね】

【な、何が言いたい！】

【あなたが王子様がいないと断言できるのは、あなたが……いえ、あなたが直接手をくだしたのでは勿論ないでしょうが、あなたの手の者が王子様たちを闇に葬った、そういうことなんじゃないですか？】

そして僕は……

僕の爆弾発言に謁見の間の空気が一瞬固まる。

【えい、えい、何を言うかと思えば！ 王子になりすますことがかなわぬと知れば、今度はわしを犯人扱いにするなど、言語道断。わしを王弟テオブロと知っての狼藉か！！】

テオブロ一人が沸騰した薬缶みたいになってがなり散らすけど、騎士はぴくりとも動かない。そっか……テオブロは王様の弟な訳ね。じゃあ、王子がコータル様一人なら、それで次の王様は自分のものって訳だ。充分な動機あり過ぎで、僕と彼の言うことのどちらが真実か量りかねているのだろうし、騎士は基本的に王様に従うもの。テオブロは王様じゃないもんね。

【な、何をしておる。この大悪人を早く捕らえぬか！】

【テオブロよ……お前よもやコータルを手に掛けたとは言うまいな】

その時、王様が沈痛な面もちでテオブロにそう言った。

【王よ、王はこの血を分けた弟の言うことより、素性も分からぬ輩の言うことを信じるおつもりですか！】

【わしとて信じとうはないが、かねがねあまり良くない噂も聞いておるのだぞ】

【……】

王子様の暗殺計画は今回に始まったことじゃないらしい。テオブロは、王様にそう言われて、拳を握りしめ、唇をかで黙っていたけど、

【なぜじゃ、なぜわしの言うことを聞かん。もういい、ならばわしがこの大罪人を成敗してやる！！】

と、逆上し、先輩にいきなり切りかかった。ダメだ、王子様だけじゃなくって、先輩まで殺される！僕は、やっぱり自分のスキルなんて一切無視して、テオブロと先輩の間に割り込んで……

僕はテオブロに、あっさりばっさり切られた。スローモーションで視界が横に流れていく。その時に床に飛び散った血が見えて、意外と血ってよく飛ぶもんだなと思う。

切られたところは痛いと言うより熱かった。それに、心臓がふたつになつたみたいのに、切れたところから動悸を打つ。それくらい血が流れているんだろうか。一旦、床に転がってしまつと、頭を上げることもできなかった。

その後、なおも先輩を切ろうとするテオブロは、王様が騎士に取り押さえよう命じて、あつと言う間に取り押さえられた。テオブロが、

【なぜわしがこのような仕打ちをされねばならん。罪人はこやつらじゃ！ 離せ、離さぬか！！】

と、大声で叫びながら暴れるのを数人ががりで抑えて謁見の間の外に連れ出されていくのが見えた。

「宮本、しっかりしろ！」

騒動が収まつたあと、先輩が慌てて僕を抱き起こす。すると、僕の目に、超どアップのエリーサちゃんの泣き顔が飛び込んできた。

【エリーサちゃん、せっかくの、ドレス、汚れちゃうよ】

僕はそう言つて、彼女の頬の涙を掬つた。

【ビク！ ドレスなんてどうでも良いよ。ねえ、あたし お父様の言う通り、ビクのお嫁さんになる。だからお願い、死なないで！】
？ なんてお父様の言う通りにするとどうしてエリーサちゃんが僕と結婚しなきゃなんないのか、その辺が全く分からない。でも、切られてすぐはとっても熱かった身体は、ずいぶんと血が抜けてしまったのだろうか、今度は急激な寒さがやってきて、ふるえで口が上手く動かなくなつてきはじめた。

【なに？ お嫁さん】

というのがやつとで、それもものすごく小さい声しか出なかった。

【ヨシャツシャ、ヨシャツシャ……】

すると、エリーサちゃんは懸命に美久と発音しようとした。それを聞いて先輩が、

【一度に言おうとすると発音できないんなら、区切ればいい。ヨシ、ヒサ。さあ、言ってごらん】

と助け船を出す。

【ヨッシー、ヒッサ……ヨッシー、ヒッサ】

エリーサちゃんは一文字ずつ区切って僕の名を呼ぶ。でも、ヨッシーなんていったら長い舌で卵を飲み込まなきゃならなくなりそうなんだけどなんて、つつこみを脳内ではいれつつ、それでもかわいから許すと僕は思っていた。

【なに】

【好きだから、大好きだから！　しなないで、お願いずっとあたしのそばにいて！】

実は僕も君が好きだよ。君がいついおっさんのときから、たぶん。自分が同じ男に惹かれる意味が解らなくて戸惑ってしまったりもしたけれど、きっと僕はマシユーの中にちゃんと君を見つけていたんだと思うよ。

だけど、僕はその想いを彼女に伝えることはできなかった。『I love you』と言った言葉は、荒い自分の息にかき消されて、そして……僕の意識は深い闇の中へと沈んでいった。

い、生きてるっ！！

僕は、闇の中でセルディオさんに会った。闇の中なのに、セルディオさんだけが、ぽかっと浮かび上がっていた。

そして、確かによく似てはいたけれど、魔道士が着るようなローブを纏った彼は、僕より数段落ち着いて見えた。

「美久、巻き込んだ上に痛い思いまでさせてしまっで、どうもすいませんでした」

僕は彼が日本語で語りかけてきたので、驚いた。ああ、でも、ここは天国なんだろうから（いや、真っ暗だし、もしかしたら地獄？悪いことはしてないつもりなんだけど）そんなのもアリなのかなと思う。僕は、

「セルディオさん、あなた方の仇はとりましたよ」

と言った。そしたら、セルディオさんは、くつくくと笑うと、

「仇ですか、じゃあ、そう言うことにしておきましょうか。では、私はこの辺で」

と言ってボワーンと消えた。なんかどこまでも魔法使いっぽい人……

そして、僕はその途端、闇の中からいきなり光の中に放り出された。あまりの眩しさに、一旦目を開けたもののまた閉じなきゃならないほど。そして、次の瞬間お腹に強烈な痛みが襲ってきた。テオプロに切られたところだ。生きている、僕まだ生きているんだ！！

僕が再度目を開けると、そこは謁見の間ではなく、白い壁に囲まれた、小さな部屋だった。僕はベッドに寝かされていて、隣のベッドには先輩が。その手をフローリア姫が

心配気に握っている。テオプロはもう捕まったはずなのに、どうして先輩までベッドに寝かされているんだろう。

「せん……ぱい……せん」

僕が先輩を呼ぶと、フローリア姫は弾かれたように、僕の方を見て、「宮本君、気が付いたの！！」

と日本語で言った。あ、じゃあ、この人はフローリア姫じゃなくて、谷山先輩？ そう思つて、先輩の方をもう一度見ると、先輩には、あつちではお目にかかれそうもない管やら機械に囲まれている。ああ、ここは日本だ。僕たち、戻れたんだ。そう思つたら痛みは尚更現実化してきて、たまらずに、

「うつつ」

と僕は呻き声を漏らした。その声を聞いて、

「痛いのか？」

と尋ねる谷山先輩への返事の代わりに、僕は切られた所を庇うように身をすくめた。その様子を見て彼女があわててナースコールを押す。

程なく、病室に看護師がやってきて、僕の着ていた布団をひっぺがすと、

「大変だわ！」

と叫んでただだつとまた慌ただしく病室を飛び出していった。それからしばらくして、その看護師は他の看護師やら医師やらを引き連れてどやどやと戻って来た。

「大変だ、しかし、何で今更縫合部分が外れたのか。とにかく、緊急手術の用意！！」

僕を見た医師が、首を傾げながらそう言う。縫合部分？ 僕はこっちの世界でも怪我をしたのか。痛みでぼんやりとしてきた頭でそう思った僕は、こっちの世界に戻ってきたばかりだというのに、またすぐ麻酔で眠らされてしまった。

夢のあとさき 1

僕は眠らされても、さっきまでの世界に行くことはなかった。どうでも良いような取り留めのない、ホントに夢らしい夢を何個か続けて見てまた目覚めた。その時、

「お兄ちゃん、大丈夫？」

と僕の顔をのぞき込んだのは……なんとエリーサちゃんだった。彼女を見て、あ、僕はまた異世界に戻ってきてしまったんだと思って嬉しくなってしまうていた。現実逃避といわれても仕方ないかな。

「お兄ちゃん、本当にごめんね」

枕元で、エリーサちゃんが申し訳なさそうに頭を下げる。

「エリーサちゃんがどうして謝らなきゃならないの」

そうだ、エリーサちゃんが謝る必要なんてない。本当は大男に変身できる位の魔女だった訳だから、もしかして魔法を駆使して僕を強引に呼び戻してもしたとか？ でも、彼女から帰ってきた答えは僕の予想とは全く違っていた。

「英梨紗が道路に飛び出したから」

「道路に飛び出した？ エリーサちゃんか？」

グランディーナのどこの道路に飛び出したからって、どうして僕に叱られなきゃならないと思うんだろ。あ、隣国まで家出したことで、平手打ちにしちゃったんだっけ、僕。あれが、トラウマにでもなってる？

うつん、なんか違う。さっきから彼女はエリーサじゃなく、エリサって言うてるし、僕をビクじゃなくお兄ちゃんと呼んでいる。それに、よくよく考えれば（よくよく考えてみなくても）彼女がしゃべってるのは紛れもない日本語。僕や先輩や谷山先輩のそっくりさんがいたように、エリーサちゃんのそっくりさんもいたって訳か。もともと、僕の側から言えばエリサちゃんのそっくりさんがエリーサちゃんというのが、正しいのだろうけれど。

あの日僕たちは、アウトドアでの調理器具を展示するために、幕張に行く予定だった。先輩がセリ力ちゃんに乗らなかったのは、何のことはない、見知った道だったからで、そもそも迷子にもなっていない。

で、真相は、会社近くの道路に飛び出してしまったエリサちゃんを避けようとして先輩がハンドルを切り損ね、ガードレールに激突した、そういうこと。

しかも間の悪いことに、僕たちはあの時、ロイヤリティーのチツカマンを大量に乗せていた。事故後そのチツカマンに引火し車は大破。僕たちは瀕死の重傷だったという。

「エリサちゃんはどこも怪我してないの？」

「うん」

「なら、良かった。謝ることなんて何もないよ。僕は君が無事でいてくれればそれで充分だよ」

僕はそう言つて、エリサちゃんの柔らかくて細い髪を撫でた。エリサちゃんの頬がぼおつと薔薇色に染まる。

「でも、どうして、お兄ちゃんは英梨紗の名前を知ってるの？ 最初変なところ伸びてたけどさ」

そして、不思議そうにエリサちゃんはそう聞いた。

「うん？ 何でかな、エリサちゃんの夢を見てた。君が僕をここに連れて帰ってくれたんだよ」

「ひえ??」

当然だけど、エリサちゃんは意味が全く解らないだろう。でも、僕はこの展開に運命すら感じているんだけどね。夢の中で言えなかった『I love you』をきつと言えると確信したから。

「僕のことは、夢の中みたいにビクって呼んでくれる？」

そう言つた僕の言葉に、エリサちゃんは薔薇色を通り越して、茹で蛸になりながら、ブンブンと首を縦に振った。

僕の耳に、相変わらず眠ったままの先輩が夢の中で言った、『お前、しまいに押し倒されっぞ』の言葉が聞こえた気がした。

先輩、僕このままじゃ押し倒される前に、押し倒しそうですけど。
それって、犯罪……ですよね。

夢のあとさき 2

僕の傷は順調に回復していった。先輩も傷は大分良くなっていて、もう命の心配はないという。だけど、先輩は僕が目覚めても一向に目覚める気配がなかった。

とんでもない事故だったにも関わらず、僕にも先輩にも脳に損傷はないという。なのに目覚めることがない先輩……僕はあつちの思いにどんどん心が苛まれるようになっていった。

僕たちがいたあの世界はもしかしたら僕の夢の世界なのではないだろうか。そして、本来なら先に先輩がテオブロに切られてこちらの世界に戻り、それから僕が戻る。あるいは、僕が本当はもうこつちの世界には戻ることができなかったのかも。

だけど、僕は先輩を押し退けてテオブロに切られた。そのために先輩をあつちの世界に閉じこめてしまったんじゃないのかと。

長い間眠ったままの先輩の肌は抜けるように白くなり、少し痩せてしまっている。でも、まだちゃんと生きていることを主張するかのように髭が少しずつ伸びる。その髭をまるで壊れものを扱うように優しく丁寧に剃る谷山先輩を見ると、僕は胸が詰まりそうだった。先輩、こんな戦闘不能の状態から早く抜け出してきてくださいよ。マシュー曰く、先輩は勇者様なんですよ？

先輩の髭を剃り終わった後、谷山先輩がぼつりと、「宮本君、どうしたら鮎川は目を覚ますんだらうね」と言った。

僕はRPGの戦闘不能なら、死者蘇生の呪文を唱えればそれで良いのになと思った。実はあの魔道書を最初に見た時、ゲームの僕はそこを真つ先にチェックしていて、その詠唱文言もちゃんと覚えていた。だけど、現実世界でそれが効くとは思えないし、死者蘇生の魔法は、ランク的に最上級に属するはずだから、よしんば僕にまだ魔力が残っていたとしても、全然MP不足だろう。でも、あつち

の世界では超初心者の僕が結構ばんばんと上級魔法唱えていた。後で、ぶっ倒れるおまけ付きだけど。それでも、唱えてみるだけの価値はある？

もし効いたらガザの実のないこの世界では、僕の方が今度は寝たきりになってしまいかもしれない。ちよつとそんな考えが頭を過ぎって、僕はかすかに震えながら谷山先輩に、

「谷山先輩、僕ね、眠っている間ずっとチートな魔法使いだっただんですよ。案外死者蘇生の魔法を唱えたら、復活したりして」とわざとおどけてそう言った。

「ぶぶっ、なにそれ。チープなコミックスじゃあるまいし」
案の定先輩はそう言って笑った。

「でも、やってみる価値はありますよね。何もやらないよりは良い」
僕はそう言って、やっとくつついたばかりのテオプロに切られた傷を庇いながら立ち上がり、背筋をピンとのばすと、

<黄泉の世界を統べるものよ、我の声に応えてこの者の魂を現し世に呼び戻せ、Rise dead>
と高らかに詠唱した。

先輩の頬が上気したような気がした。でもそれだけで、先輩はやっぱり目を覚まさない。当然と言えば当然だけど、魔法なんてありはしないのだから。

「ヤダ、それもしかしてラテン語？ イヤに本格的じゃない」

谷山先輩が目丸くした後、バカ笑いする。ひとしきり笑った後、小声でありがとうと言って、

「じゃあ、お姫様がキスでもしたら、目覚めるのかしら。眠り姫ならぬ、眠り王子は」

と、言った。彼女は全くの冗談のつもりだったんだろうけど、僕が「それ、アリかもしれないよ。僕の夢の中では谷山先輩はお姫様で、先輩は王子様だったんです」

と、マジ顔で返すもんだから、ちよっぴり引き気味だったけど、
「じゃあ、やってみよっか。やらないよりはマシかもね」

と、笑うと、照れながら先輩に顔を近づける。そして、二人の口びるが重なったとき……

窓も扉も全く開いていない病室に一陣の風が吹いた。驚いて、窓を確認した僕の耳に、

【う……ん、フローリア愛してる】

と言う先輩の声が聞こえる。ギョツとして先輩の方を見ると、先輩はがしつと谷山先輩を腕の中に閉じこめて、キスをしている。谷山先輩が突然の事態にあたふたしていた。

唇が離れたあと、谷山先輩に、

「あ、鮎川っ！ いきなり舌を入れてくるなんて、どういう見？ ホントはいつから意識があつたの？ このエロ親父！！」
と言われてグーで殴られたことは言うまでもない。

夢のあとさき 3

「フローリア」

「はい？」

先輩がお姫様を呼ぶ声に、谷山先輩は疑問形で語尾を若干上げて応える。

【フローリアってんだぞ】

先輩は今度は英語でそう聞く。

「だから何だつてのよ」

谷山先輩はそれに対して若干ウザ気にそう返す。

「お前薰だろ、何返事してんだよっ！」

「鮎川こそ何言つてんのよ、フローリアは私の英名！ 薰は日本名！！」

「は？ 英名とか日本名とかセレブなこと言つてんじゃねえよ、薰のくせに。お前、ばーちゃんがイギリス人なだけだろ」

「イギリス人だからよ。私ね、教会で幼児洗礼受けてるの。フローリアはその洗礼名なの！ だけど鮎川がなんでその名前を知ってるの？」

「俺の夢の中に出てきたお前にそっくりな女がその名前だったんだよ」

谷山先輩の思わぬ発言に、先輩は舌打ちをしながらそう答えた。えっ、じゃあ……

「もしかして、先輩も僕と同じ夢を見てたんですか？」

「僕と同じ夢って……お前、王都グランディーナとか言うところに行つたか？」

やっぱり、先輩もグランディーナにいたの？

「はい、車ごとおっこちちゃいましたよね」

「スライム食ったか？ しかも俺の分まで」

「はい。でも、ちゃんとスライムプリンって言うてくださいよ。な

んかそれじゃ僕がスライムのおどり食いをしたみたいじゃないですか」

「似たようなもんだ。じゃあ、マシュー・カールは？」

「はいっ！エリーサちゃんですよ」

「やっぱり、僕たちは同じ異世界にいたんだ！」

「俺と同じ夢見てたつてののか？」

首を傾げながら先輩がそう言う。

「そうです。二人で同じ夢をみてたんですよ！」

「信じらんねえ。まあ、そこまで一緒なんなら、同じ夢だったのかもな」

そして、先輩は半信半疑ながらそのことを認めた。

「そうですよ。僕が目覚ましても先輩ずっと目を覚まさないし、もしかしたら同じ夢の中にいるのかもって、戦闘不能を治す呪文唱えたんですけど、それでも起きてこないし、途方に暮れてたんです。そしたら、谷山先輩が『王子ならお姫様のキスで目覚めるんじゃないか』って。いやあ、ホントにお姫様のキスが効くとは思いませんでした」

でも、先輩の生還劇を喜々として話す僕に先輩は、

「余計なことしやがって」

と言った。

「は？」

「お前が余計なことしなきゃ、今頃はその夢の世界で、お姫様と甘い新婚生活の真っ最中だったんだ。何が悲しくてこの凶暴女のキスで戻らなきゃなんねんだ」

「何ですって！！ 宮本君、あんたまだ魔法使える？ お姫様として命じるわ、こいつを瞬殺して」

先輩の凶暴女の発言に谷山先輩は思わず暗殺（あ、大っぴらに殺すのは暗殺とは言わないのか）命令を僕に下した。

「しゅ、瞬殺って、物騒な。でも、谷山先輩すごく心配してたんですよ。それなのに、そんな言い方するなんて。海より深く反省して

ください」

と、言いながら僕は手を前に繰り出す。

「お、おい何の呪文をかけるつもりだ。宮本？ まさか、あの『一億年』とか言わないでくれよ。ホント、ゴメンあやまるからさ」

その動作に、先輩は完全に怯えきっている。あれは夢の中のことで、僕が現実世界で魔法が使えるはずもないのに。でも、事故からの谷山先輩の気持ちを考えると、ちょっとお灸をすえないとねと僕も思ったし、かつこうだけしてみる。

だけど、手を振り上げた途端、僕にまたあの上級魔法を使った後のような激しいめまいがして、僕は

「なーんちゃってね」

と言いながら意識を失ったのだった。

道の先には……

意識を回復した先輩は、まるで怪我なんかしてなかったかのようにバカみたいに元気になった。一方、僕の方は意識を失った後原因不明の高熱が出て、点滴生活に逆戻り。

「急変するのはよくあることだが」

と言いながらも、どこか腑に落ちないという表情で担当の医師は僕をを見た。

結局、退院は先輩の方が先で、僕はその3日後。その週いっぱい自宅療養して（一人暮らしの僕というより、居なかった分ほこりのたまった部屋の掃除とか、たまった洗濯をすとか、事後処理に明け暮れていたのだけど）、週明けにお久しぶりの出社をした。正直入社して半年そこからで事故で長欠した僕の席がまだあるのか不安だった。

深呼吸して、営業部のドアを開く。

「おはようございまーす」

「お、宮本、やっと元気になったみたいだな」

声をかけてくれたのは、兵藤さん。

「はい、おかげさまで。本当に長い間ご迷惑おかけしました」

そう言いながら、僕がデスクにつこうとすると……

「宮本、そこもうお前の席じゃないぞ」

と、兵藤さんが言った。や、やっぱりもう僕の席はどこにもないの！ 不安が的中して頭が真っ白になってしまった僕に兵藤さんは笑いながら、

「お前、掲示板ちゃんと見たか？ 辞令が降りてんだよ、配置換え。わかったらさっさと見て、新しい部署に出社しろ。早く行かないと、大目玉くらうぞ」

と言った。は、配置換え？ はあ、辞めなくて済んだのは良かったけど、それでも窓際行きかあ。僕はのろのろと掲示板を見に行つて、

そこにかかれてある辞令に……

マジでひっくり返った。そこには、

宮本美久

上記の者平成 年 月 日付けで秘書課勤務とする。

以上

と書かれてあったからだ。秘書課あ？ この僕が？？ 何かの間違いでしょ！

だけど、いつまでも呆けてはいられないし、僕はとりあえず今度は秘書課のドアを叩いた。

「どうぞ」

と言われて中にはいると、そこにはなんと先輩がいた。

「先輩！」

「遅いぞ宮本。社長より遅れてきたら洒落になんねえんだからな」先輩はそう言っ僕にデコピンを食らわせた。

「なんか悪い冗談なんですかね、秘書課なんて」

「ああ、そう思いたいよ。お前はなんかまだ良いぞ。俺なんか頃合い見て取締役会に出席のおまけ付きだぞ」

取締役会？ 完全に予想外のワード連発に頭がついていかない。

先輩はため息を落として、

「俺さ、お前が倒れた後薫にその……プロポーズしたんだわ。んで、退院した日に薫の親に挨拶に行つてさあ、そしたらこうなった」

と言った。まあ、夢の中でまで奥さんにするくらいだから、本気で惚れてることを自覚してちゃんと向き合っただろうけど、それがどうして取締役会やら僕まで秘書課勤務になるんだらう。

「へっ？」

「薫、この会社の会長の孫。正真正銘のお姫様」

「げつ。でも、それじゃなんで僕まで秘書課なんですか」

「あれ、気づいてねえのか？ 薫とあの子、英梨紗はこっちの世界でも、姉と妹なんだよ。お前、あの子口説いただろ。薫と俺が結婚するって言ったら、あの子もおまえと結婚するんだって駄々こねてさ、ほんじゃま様子見ってことで社長のそばに置くって事になったわけ」

「はあ」

その言葉に今度は僕からため息が出た。

「ま、英語も呪文も使いこなす『語学マスター』なんだから、案外おまえって、向いてんじゃねえの、この仕事」

向いてる向いてないは解ないけど、エリサちゃんと再会したとき、運命を感じた僕の予感当たっていたのだろうな。それが良い運命なのかどうかは別として……

谷山先輩とエリサちゃんは本当は姉妹ではなく、会長の長女の娘の谷山先輩と、最初の奥さんが亡くなった後、30歳年下の奥さんと再婚した会長の娘のエリサちゃんは実は姪と叔母の関係であることが分かるのは、また後日の話。

道の先には……Happy endが転がっていた。なーんてねっ！！

I The End I

道の先には……（後書き）

以上をもちまして、本編終了となります。

あとは、あの性格の悪い魔法使いの視点のみ。本編だけではちょっと不完全燃焼だったところも、これで完璧に分かる……はず。

よろしかったら引き続きお付き合いのほどを。

アンデッドマン？ 登場

僕たちが現実に戻ってきてたった一ツ気にかかっていたのは、僕たちが居なくなつた後のフローリア姫とエリーサちゃんのこと。そのことをおそろるおそろる先輩に聞くと、先輩は、

「お前知らねえんだつたな。あの後、なかなかケツサクだつたぞ」と言つて、僕がこつちの世界に戻つてからのことを話し始めた。

* - * - * - * - *

【ねえ、ビク。目を覚まして。あたし、ビクのお嫁さんになるから、約束するから】

エリーサちゃんが大哭きで僕の身体を揺すぶるのを、みんながもらい泣きしていたときのことだった。僕がいきなりぱちつと目を開いて、

【本当に？ 本当に今度は逃げないで私の妻になってくださいますか？】

と言つと、すつと立ち上がつて優雅にお辞儀したのだそうだ。

【× ！ マミー、あ、包帯してないからマミーじゃないわ、グールー！】

エリーサちゃんはそれを見て、恐怖にひきつった顔をしておりつたけの言葉で僕をアンデッド宣言。

【ひどいな、私はまだ腐つてはいませんよ】

【もうすぐ、腐るわ】

死体だもの、とエリーサちゃんは小さな声でそれに付け加えた。

【それは困つたな。私はまだ、あと100年は腐らないつもりなんですが】

それに対して僕は、いたずらっぽい笑みを浮かべてそう返す。

【マシュー、腐らねえぞ。第一死んでない、こいつ宮本じゃねえんだから】

【さすがは鮎川さんですね。では、ちょっと失礼します】

何かを気づいた先輩に僕はそう言っていると、王様の前にひれ伏し、

【王よ、ビクトール・スルタン・セルディオ、ただいま戻りました】
と言った。

【うむ、よくぞ戻った。で、コートアルは無事なのか】

【ビク、ビクトールって？】

エリーサちゃんが僕と言うか、僕もどきのセルディオさんのファストネームに妙な反応する。あれっ、セルディオさんの口振りではエリーサちゃんはセルディオさんのプロポーズを振り切って逃げ出したみたいなのに、どうして彼のファストネームを知らないんだろう。

【エリーサ様、王にご報告申し上げたら、いくらでもご質問にお答えしますからね、少々お待ちください】

セルディオさんはエリーサちゃんに向かって、人差し指を口に当てながらそう言っていると、王様にこれまでの顛末を話し始めた。

失策

【まずは、殿下の安否についてですが、殿下は確かに生きておられます】

セルディオさんの王子の生存宣言に、王様以下城のみんなから安堵のため息が漏れる。

【生きてはおられますが、今とても動かせる状態ではなく、とある場所でご静養いただいております】

【それはトレントの森か。しかし、そなたたちの搜索に当たった者たちが、トレントの森のそなたの屋敷にも行ったが、誰もおらなんだと聞いておるが】

【はい、ご静養いただいているのはトレントの森ではございません。それどころか、このグランディールでもガツシユタルトでもありません。

それは、この鮎川様の世界である、“ニホン”と言う所でございます】

謁見の間にざわめきが起こる。

* - * - * - * - * - *

殿下が何者かに命を狙われているということは、私もよく理解をしております。何しろ、普段トレントの森に引きこもって研究三昧の私にその任の白羽の矢が立ったのはまさに、そやつの攻撃から魔法面で殿下をお守りするという意味合いでしたから。

恙つつがな無くガツシユタルトでの婚儀を終えた私たちは、姫様と別行動を取りました。敢えて敵方に連絡させる隙を作り、私たちは姫様の下を離れました。

そして、私たちは二人だけでトレントの森を突っ切る道を選択したのです。よしんば敵に襲われたとしても、一個小隊程もある姫様の花嫁道中よりは身動きもとれるし、被害も少なくて済む。なににより姫様に被害が及ぶことがない。

それに、トレントの森は私の庭とも言うべき場所です。敵方は私と同じように動き回ることはいけません。あまり凶暴な魔物も棲息してはおりませんので、私たちは姫様よりかなり先に城にたどり着き、姫様をお出迎えできると算段していたくらいです。

しかし、敵方は私たちのそんな行動を予想してたかのように、森に最適の刺客　魔物使いを送り込んできたのでした。

何とかその魔物使いを返り討ちにしたものの、数多くの魔物たちによって私たちは満身創痍、特に殿下は一刻も早く治癒しないことには、お命も危ない状態。しかし、ここは辺境の森で、私より他に治癒できる者はなく、如何に私の魔力が高いといっても、一人で治癒術を繰り出すのには限界がありました。

私はとんでもない間違いを起こしてしまったのかと、頭を抱えましました。

しかし、窮すれば通ずと言うのでしょうか、一旦は肩を落とした私は、とある場所のことを思い出していました。

（あの場所ならば、そして彼らならば……上手くいくかもしれない）
そして私は、その禁断の呪文の扉を開いたのです。

失策（後書き）

いきなり、セルディオ語りにスイッチしました。彼、美久より性格暗いみたいで、いきなり語り口が硬くなっていました。

次回、そんなセルディオの王子救命大作戦です。

並行世界

この世界には私たちの住むこのオラトリオの大地とは別に、いくつかの大地があるのです。その世界 - 仮に並行世界 - と申し上げておきますが、その並行世界には私たちとそっくりな人々が違った生活を送っています。

実は私は１１歳の頃、偶然二ホンに飛ばされたことをきっかけに、その二ホンのことを研究し、二ホンが魔法を介さずに病や怪我を治してしまう治癒技術を持っていることや、私の映し身の美久に私が殿下に仕えるようになった同じ時期に殿下にそっくりな男、鮎川幸太郎氏と職場で出会ったことを知っていました。

最初、私はこんな強引な方法を探らず、ただ出かけて行って、幸太郎氏に殿下との交替をお願いするつもりでいました。

しかし、界渡りの呪文を唱えて私が二ホンに現れたとき、彼らは道に飛び出してきた少女を避けて彼らの乗っている自動車という大きな鉄の塊を急旋回させてまさに道の端にぶつかろうとしていたのです。

私が殿下に仕える時期に美久が幸太郎氏と出会ったように、この並行世界では、環境の違いで出来事は違っていますが、こちらが危険になればあちらでも似たような事が起こるようでした。私は、とつさに時間を止める魔法をかけました。

私はどうしたものかと思いました。このまま時を進めても彼らは無機質な道具にぶつかっていくだけで、彼らもまた治癒が必要になるのは目に見えています。

とりかえばや物語

私はまず、彼らの乗っている自動車のレプリカを作りました。内部などは全く分らないので適当ですが、結果壊してしまうので、何ら問題はないと思いました。そこに彼らが持っていた火の属性をもつ魔道具（美久はそれをチャカマンと呼んでいましたが）を少量もらい受け、その上で、彼らを自動車ごとグランデールへと送りました。

場所の特定まではする余裕はなかったのですが、結果街道筋近くにたどり着いたようです。ただ、時間を止めた反動なのか、私たちが襲われてから約一月も経ってはいましたが。

一方、私はそのままトレントの森に戻って殿下をニホンにお連れし、レプリカを障壁にぶち当てた後、魔道具に炎系の魔法をぶち当て、大破させました。

そして私は、殿下とともにその大破した張りぼての中に倒れ込み、時を戻したのです。私自身も無傷ではありませんでしたし、高度な魔法を連発した衰弱も相まって、ほっとした途端私も一旦は意識を手放してしまいました。

* - * - * - * - *

【すっかりしまあ、よくそんなんで……お前が王子は無事だって言うからには、ちゃんと王子は俺として病院で治療受けてんだろ？ 日本本警察はいつたい何やってんだって感じだな】

【ええ、しかし幾分衝突と言うには不可解な傷が多々あるにしても、私たちはあなたの方の身分証明書を持参していますし、生存している間は治癒師の領分ですから、警備隊はそこまで関われないようです

し」

【まあな。医者が必死こいて助けようとしてる時に、警察が茶々入れても医者が怒鳴ってそれで終わりだろうけどよ。それでもなんぼなんでも、王子目が覚めたら全部ちゃんばれだろうが】

私の説明に、幸太郎氏は半ば呆れながらそう返しました。

【ええ、ですから殿下にはこちらにお連れする目途が経つまで眠りの魔法をかけてあります】

【は、至れり尽くせりなこと。ドッペルゲンガーなのに、宮本とはえらい違いだな】

幸太郎氏は、手を肩の所くらいまで挙げてつぶやくようにそう言いました。

二人の共通点 by 幸太郎

【王子の容態も日に日に良くなり、後数日もすればこちらにお連れしても大丈夫かと存じます】

【解った。セルディオ、そなたの今度のコータルの救護、まことに苦勞であつた】

【いえ、それが私の任でありますれば、この命に代えましてでも】俺は、そう言つて王様に頭を下げる事件の立役者の顔を見た。結局こいつは王子だけじゃなく、俺たちの命も救つてくれた訳か。

王様への報告が終了した後、俺は一番気になっていることを聞いた。

【で、宮本はどうなつてんの。あいつ、切られたけど】

【あ、急所は外れていたはずですし、帰したところが治癒専門の場所ですから、治癒師が迅速に対応してくだされば、何の問題もないでしょう】

それに対して、クリソツ魔法使いはそう笑顔で答えた。まあどうでもいいが、さつきからこいつ、宮本に結構冷たいのな。ホントならお前が切られてたかも知んないのによ。するとこいつは、

【美久には悪いことをしたと思っていますよ。ただ、私ならばむざむざとあのように切られたりしないと思います】

俺の頭の中の声が聞こえたかのように、そう付け加えた。その表情は依然笑顔のまま。顔はそっくりなのに、あの天然ボケとは違って性格悪っ！ お前口だけじゃなくってホントに悪いと思つてんのかよ。

そうやって改めてこいつの顔をよくよく見てみると、同じ顔なんだけど持っている雰囲気は全然違う。片や入社したてで怒鳴られまくっているペーペーのサラリーマンと、片や希代の魔術師と呼ばれた男。ま、同じ雰囲気を持つてる方が不思議か。こいつら、顔以外

に共通点なんかないかもな。あ、けど……

【あのさ、ちょっと気になったんだけど、そもそもお前が11の時日本にすっ飛ばされた理由って何？】

【な、何でもよろしいではないですか！】

俺がそう聞くと、それまで余裕こいていた魔術師は明らかに不機嫌になった。

【もしかして、気に入った女に同性呼ばわりされて、ブチ切れた？
お前女顔だし、ファーストネームのビクトールをビクトリアに間違われてとか】

これって、モロ宮本がマシユーと最初に会ったときのシチュエーションだけだな。そしたら、あいつは真っ赤な顔をして、

【そ、そんなことある訳ないじゃないですか！！】

とあからさまに取り乱して怒った。おいおい、凶星ってか。ま、宮本にはこいつみたいに魔力はないだろうから、飛びようなかったただけけどさ、まるで一緒じゃん。『子！』って女名で呼んだとたんに怪力になる、ものすごく昔に流行った刑事ドラマみてえ。

バカウケしまくる俺を、女顔の魔術師はものすごい形相で睨んだ。
なまじ、女顔だけに、怖えーっ（爆）

【それにしても、本当に二ホンの治癒術はすごいです。あの規則正しく薬湯が体に送られてくる管！誰もいないときに起き出して何度細部まで調べる誘惑に駆られことか！！】

しばらく不機嫌全開だった奴が、次に言ってきたのがそれだった。それからしばらく奴の日本の医療器具褒めちぎりトークが続いた。
ん？これもどっかで覚えがあるような……

【なんか、リルムの町のビクを見てみたい】
とそのときばそつと、マシユー改めエリーサがそう言った。そうか、どっかで見たことがあると思ったら、リルムの町の胡散臭い商人の品物を見せてもらったときの宮本の顔だ！！ R P Gと医療器具の

違いこそあれ、それはまさしくオタクの証明。

やっぱり、こいつは真正正銘、宮本のドッペルゲンガーだと俺は思った。

ハッピーエンド？ by 幸太郎

【さーあて、殿下をお戻ししたらグランディールまで責任を持つてお送りさせていただきますからね、エリーサ様。ところで鮎川様、ニホンではあの自動車なるモノは壊れている訳ですから、頂いても差し支えありませんよね】

自分の都合の悪いことから目を背けさせたいのか、女顔の魔法使いは元非力な大男にそう言った。今は、ちびっ子に戻ってるからあれだが、はじめの状態なら絶対にポジション逆だろ。

【ああ、今更あのポンコツが道端に現れでもしたら、それこそミステリーだからな。一応、助けてもらった礼代わりにも持つてけ】俺は、それに対して頷きながらそう言った。壊れたはずのポンコツがいきなりゾンビみたく現れても、俺、説明なんてできっこねえし。

【ありがとうございます】

【なんなら、あのポンコツの後ろに缶空……そんなもんこの世界にないか。ああ、リルムの町のあのゲテモノプリンに入れもんがあった……あれでも、つり下げて走るか？】

それならいっそのことハネムーン仕様にでもすりゃいいいんだと思つてそう言つと、あいつは首を傾げながらむっとした表情で、

【は？ それは魔除けでございますか？ そのようなものなどなくとも、十分私がエリーサ様をお守りできますが】

と言った。

【魔除け？ んな訳ないだろ。ま、こいつは俺のもんだから手を出すなつて意味つてっちゃそうだろうな】

【じゃあ、何のために】

【こつちじゃさ、結婚式が終わつた後、式場から出る新郎新婦がどてっ腹にさ、『Just Married』とか書いた車で走んだけど、後ろのバンパーにあーいうのをつり下げんだ】

とはいえ、俺もそれは外国映画でしか見たことないけどな。

【そうなのですか、それは素敵です！　まるで私たちを祝福する鐘を鳴らしながら走るようではありませんか！！】

けど、それを聞いたロリコン魔法使いはにわかに色めき立つ。ま、本来もそーいう意味合いだったけか。にしてもお前、どーでもいいけど、この世界には存在しない車が鳴り物入りで走れば、とんでもなく目立ちすぎるぞ。それでいいのか、おい。確かに本物の魔物は寄ってこないだろうが、人も逃げるぞ、たぶん。

【ヤダ、あたしセルディオ様と一緒にには帰らない】
ほら、まず嫁が逃げた。

【どうしてですか！　エリーサ様ははつきり私と結婚するって言ってくださったじゃないですか】

【あれは、ビクに言ったんだもん、セルディオ様にじゃないわ】

【ビクって……彼の名前は美久、私の名はビクトーリオ。私の方が本当のビクじゃないですか】

【でも、どうして？　あたしがお父様からきいたセルディオ様のお名前はスルタン・セルディオだけだったわ】

【そ、それは……】

【どうせ、その顔でビクトーリオって名乗ったら『女みたい』って言われるのがいやだったただけだろ。お前ドンだけ、顔と名前にトラウマもってんだ】

【悪いですか？　ですが、あなたのように体格にも名前にも恵まれた方に私の気持ち解るものですか】

すると、コンプレックスの塊魔法使いは、そう言って逆ギレした。

あ、女顔・女っぽい名前に加えてチビもその要素だった訳ね。そう言やあ、宮本もそれ、気にしてたな。

【お前、そんなこと気にすんなよ。お前にはそれにあまりある位の魔力があるんだから。お前日本に居ながら、リルムの町とかで、俺たち助けたりしてくれてたんだろ】

【いいえ。私はもう一度殿下とあなた方を戻さないといけませんから。体力を回復するべく極力静養に努めておりましたよ】

【じゃあ、あれはマシュー、いやエリーサか？】

【ううん、あたしじゃない。あたしはマシューの体になってるだけで精一杯で、余分な魔法なんて使えなかったもん。別人になるのって、すごく大変なのよ】

【んじゃ、一体誰が】

【あれは真正正銘、美久が一人でやったんですよ。使ったことのない魔法をぼんぼん連発するからすぐ体力切れ起こしてましたけれど。鮎川様、美久に魔法を使いたいのなら、もっと体を鍛えなさいと言っておいてくださいな。いかに魔力があっても、それに見合う体力がなければ、最悪命を落としますよって】

は？ あれは宮本がやったって？ だるまさんがころんだも、ガソリンも？？ もし魔女発言の後、あいつが電池切れしてなかったらと思うと、俺は血の気が全部引いちゃう気がした。

もしあの、ゲーオタにそんな芸当ができると分かってみろ、嬉しいがつて何が起こるか分かん。

（言わない、絶対に言うもんか！！）

俺はそう堅く心に誓った。

そして数日後、無事日本に戻った俺は、宮本が（こっちでは）初対面の英梨紗にいきなり口説いたと知った。あっちの世界じゃともなく、この日本じゃ犯罪だぞ、おい。

俺には若干1名（あっちとこっちで2名か）悲劇のヒロインが生まれたような気がするんだが……

ま、それでもとりあえずハッピーエンドつつうことで。

ー小さなお姫様は小さな魔法使いといつまでも幸せに暮らしましたとさー

ん???

あとがきに代えて

以上で、「道の先には……」完結とさせていただきます。

このたびの3月11日の未曾有の大災害の中、このようなお気楽な異世界ファンタジーを書き続けることは、被災された方に失礼だとお叱りを受けるかもしれないと思い、一時は執筆しても公開は自粛しようと思ったりもしました。

ですが、本当はこの作品は昨年11月末までに完成しておかねばならぬものでした。（仲間内のイベントのため）

それより前の10月中に、友人に見せると約束していたものでした。

それが、9月に父が亡くなり、自分の中の勢いがなくなっただけで、い不得手な異世界ファンタジーより「エロ空（切り取られた青空シリーズのことをブログでそう呼んでいます）」や「バニボーイ」など自分が書きやすいものを優先して後回しにしてみました。

で、年末個人的にそのことを激しく後悔させる出来事が起き、私自身「明日の自分は自分にも分らないのだから、できることは今しておかねば」という気持ちで今回リアルタイムで公開に踏み切りました。

このおばさんから妄想を取ったら何にも残らないからです。今できることはこれしかなかった。ごめんなさい。

もしよろしければ、このバカっぽい話で一時だけ大変なことを忘れて元気になってくださればと思います。笑ってください。そんな気持ちで今日エンドマークをつけました。

なお、このお話を大好きな大好きな友人、祈君（仮名）に捧げます。

役者が揃った？

やがて、長い昏睡状態がとけたことになっている俺と、逆にぶつ倒れた宮本とで、やってきた医者やら看護師やは騒然となった。

倒れている宮本はもちろんのこと、俺の状態まで検査される。ビクトールは、

『たぶん、身体は調べられると思いますので、形だけ付けておきますね』

と、傷（本人がいないので、よく保って一週間くらいだろうと言っていたが）を魔法で作り出した。こんなもんが作れんなら、張りぼてじゃなくて本物の車も作れそうなもんだ。あんなポンコツよりもっとマシな奴をさ。ま、全く同じものしか作れないかもしれない俺はオラトリオだっけ？ あの世界にあのポンコツと同じ車がぞろぞろと並んでいる姿を想像して、笑うのを堪えたら、痛みを堪えたのと間違われて、

「痛みますか？」

と看護師に言われたんで、

「あ、ちよつと」

と痛がるフリをしなきゃならなかった。ビクトールにあつちに飛ばされてなきゃ、生きてないのかもしれないけど、何だかな。

そして、いつの間にか完治してる俺と、病院で寝てるだけなのにあり得ないほど疲労してる宮本に医者は首をひねりまくっていた。

理由を知っていた俺は内心ビクビクもんだったが、日本の医療機関にその真相が分かる訳じゃない。結局その晩熱を出した宮本は、どこかが炎症を起こしているのだろうということで、抗生物質を点滴されている。

本当ならガザの実があれば一番いいんだろうが、よもや俺は宮本がこっちに帰って来てまで大魔法を使うなんて思わなかったから、エリーサに残ってんならくれとも言わなかったしな。

翌日、三時の面会時間を待ちかねたようにエリーサがやってきた。いや、正確に言えば絵梨紗。二人は俺が隣にいることなんてものともせず、

「ビク、大丈夫？ お姉ちゃまにビクがお熱出したって聞いて、あたし心配で」

「大丈夫、心配しなくていいよ。ちよつとね……慣れないことしただけだから」

それに対して、宮本はさすがに魔法を使ったともいえず、そう答える。

「ホントに？」

「うん、ホントに大丈夫。それに、エリサちゃんがきてくれたから、すごく元気出ちゃった。ありがと」

ってな具合に、いちやついてる。

ま、俺と宮本と薫のドツペルがいたんだから、エリーサのドツペル？（絵梨紗のドツペルがエリーサが正解か、まあどっちでもいいが）もいても別におかしくないが、こいつらいつの間にかこんなラブモードに発展してんだ？ 俺なんか薫にキスして殴られて、そこから何も話進んでねえのに……

- なんか先越された気分だ。

ええーっ、こっちも!?

宮本と絵梨紗とのいちゃいちゃが見てられなくなって、俺が病室を出たら、そこに薫が来ていた。

「目が覚めたからって、とつとほつつき歩いて大丈夫なの?」

薫は口を歪めてそう言った。

「ああ、医者が首を捻るくらい完全元通りだぜ」

ホントのことを言えば、最初から怪我なんかしてねえんだけど。それを説明できないし、説明する気もねえけど。

「また、いい加減なことを言う。ちゃんと寝てないと、宮本君みたくぶり返すわよ」

というと、薫はやれやれといった表情でそう返す。

「いい加減じゃないさ。薫、今あの灼熱地獄に戻れなんて言うなよ。自分の病室なのにしたたまれないっいたらありやしねえ」

「ああ、宮本君と絵梨紗のこと? 確かにあれはね。ホント、いつの間にあんなに仲良くなったんだか」

どうせあの単純な宮本のことだ。オラトリオで惚れた女のドoppelに、運命でも感じるのかと思って迫ったんだろ。それに、今んとこ10歳の絵梨紗は宮本よりチビだからあいつのコンプレックスは刺激されないだろうしな。

「薫、小学生は夏休みだからともかく、お前仕事は良いのか?」

そのとき、俺は今日が平日だってことに気づいて、薫がなぜ今ここにいるんだろうと思った。

「うん? 今日は有給……ってか、もう私職場に戻れないかも」

それに対して薫は口ごもりながらそう答えた。

それにしても辞めるっぽい発言なんて聞き捨てならない。「何でだ」

「うん、ちよつとね」

びっくりして聞き返した俺に、薫の口は重い。

「俺のせいかな?」

「違うよ、鮎川のせいじゃない！」

「じゃあ、何だよ」

「言わなきゃダメかな」

「言わなきゃ解んねえだろ。それに俺に言えないっつーことは、直接じゃなくても俺らの事故が関わってるって思っただけじゃないんだろ」

事故の一言に、薫の頬がぴくつと動く。

「じゃあ、結局、俺のせいじゃねえか」

「違うよー!!」

それでも、違うと言い張る薫は、泣きそうになっていた。お前、何隠してんだ？

「じゃあ何だつてんだよー!!」

俺はだんだんいらいらしてきて、そう怒鳴った。

「鮎川、声デカい」

薫はいきなり急に声のトーンを落として小声でそう言った。ハツとしてあたりを見ると、声を荒げて言い合いをしていた俺たちはいつの間にか他の患者や面会者に遠巻きに見られている。

「お前が、ちゃんと理由を言わないからだろ」

だから、俺も内緒話みたいに、薫にそう耳元で囁いた。

「バレたの」

すると、薫はぼそつとそう言った。

「誰に？ 何が？」

主語も述語もかつ飛ばしてしゃべんなつてんだ。何が何だかちつとも解んねえと思っていると、薫は意を決したようにその理由を口にした。

「会社に、私が」

「会社に、お前が？」

「ひらきまく 櫛原宗十郎の孫だつてことがバレちゃったの」

櫛原宗十郎ひらきまくつたら、ウチの会社の会長の名前じゃん。

「へえ、お前、会長の孫だ……ええーっ、か、会長の孫!!」

「だから鮎川、声デカいって……」

思わず俺が挙げてしまった素っ頓狂な声に、薫はこめかみに手を当て、口をへの字に曲げてそう言っただけ息をついた。

ええーっ、あつちの本物の姫だが、こつちも姫級かよ。俺の方は向こうは王子でも、こつちは完璧フツのリーマンなのになさ。

あの日

「ちょ、ちょう、薫、外行こう、外」

俺はそう言って強引に薫を病院の中庭みたいなところに連れ出した。

「そう、私は櫛原宗十郎の長女の娘、ホントは身内の会社になんて勤めたくなかったんだけど、許してくれなかったのよ。いくら武たけ（社長の名前だ）叔父様に子供がいなかったからって、私にあそこで婿見繕おうなんて、前時代すぎよ。そんなの絵梨紗がいるじゃないって思ったし、この前デビくんも生まれたから、やっと解放されたと思っただのに」

観念して薫は事情を説明し始めた。とはいえ、いまいち話が見えないが、薫は社内のだれかと結婚して、跡継ぎって言われてた。でも社長んとこに待望の（デビくんっつくくらいだから男だろ）跡取りが生まれて、すべて丸く収まったと、そんなとこだな。

「私は長女の娘だから櫛原くしはらじゃないし、武叔父様に『私が絶対に櫛原家の縁者じゃだつてことをバラさない』ってことを約束させて会社に入っただのよ」

じゃないと、思いつきり仕事できないじゃない？ と薫は続けた。確かに使う側としちゃ使いにくいだろうな。

「で、何でバレたんだ？」

「うん……それなんだけどさ、あの日絵梨紗と一緒に私もいたのよ」あの日と言われて、俺はゴクリとつばを飲み込んだ。って言うと、俺たちが事故った日のことか。

「出かけたのが久しぶりだったんで、絵梨紗が妙にはしゃいじゃって……道の向こうにほしかったものを見つけて、思わず飛び出しちゃって……そこに来たのが」

「俺らの乗ってた車って訳か」

俺の言葉に首だけで頷いた薫は、

「間一髪のタイミングで絵梨紗を交わした車は、ガードレールに吸い込まれるようにぶつかって火を噴いたの。私、慌てて車の中をのぞき込んでびっくりしたわ。乗ってたのが鮎川と宮本君だったから」
薫はとっちらかりながらも何とか119番に連絡し、やがて救急隊員が来て、俺たちを車から引きずり出した。そしてその途端、車は再度爆発し、木っ端微塵になったという。

「後少し救出が遅れてたらと思うと……」

薫はそのときのことを思い出して震えながらそう言ったが、大方それはビクトールが車の張りぼてをごまかすために魔法で吹っ飛ばしたんだろう。満身創痍とか言う割に、えらく派手な演出じゃねえか。あいつ、どんだけ魔力があるんだか。

一方、衝撃的な事故を目撃してしまった薫は、ショックでぶっ倒れ、一緒に病院に運ばれたらしい。俺たちが全然知らない奴らならただ事故を目撃したで済んだんだが、事故の当事者が俺たちだったため、当事者が一本の線でつながって、薫が会長の孫だということが一気に社内に広がったみたいだ。

それから、上司は薫の顔を伺いながら仕事を持ってくるし、女たちからは今まで気楽にグチってきた会社への不満やら悪口やらを薫が会社にチクっている様に思われて、シカトを食らうようになった。確かに、薫は会社の悪口は言わなかったさ。けど、こいつは誰の悪口だって言ってやしねえぞ。

「ゴメンな、俺らのせいで」

「ううん、鮎川たちのせいじゃないよ。鮎川は絵梨紗を助けてくれたんだし」

「なあ、薫……会社行きにくいんだったら、辞めて俺んとこくるか」俺は、手に汗をびっしょりかきながら、薫にそう言った。地球とオラトリオがパラレルワールドってんなら、オラトリオで王子と姫が結婚するんなら、俺たちも結婚するのが流れてもんだろ。

「俺んところって、鮎川も一緒の会社でしょうが、何変なこと言ってるのよ」

だけど、薫は俺の言葉をプロポーズだと思わなかったらしく、ゲラゲラと笑いやがる。

「違う違う」

違うよ、鈍感女めが。

「何が違うのよ」

「だから、鮎川薫になれってんだよ」

回りくどく言って解んねんならストレートに言ってやる。

お前、俺にキスするぐらい好きなんだろ？　だが、それに対して薫は、

「イヤだ！」

と、間髪入れずに即答しやがった。なんだ、一発玉砕かよ。

何でだ？　オラトリオはパラレルワールドじゃねえのか！？

ここはいつちょ、踏ん張ってみますか

「じゃあ、何で俺にキスなんかしたのかよ。宮本のバカ話にホイホイ乗せられる様な歳じゃねえだろ、薫」

24歳でおとぎ話のお姫様を地でいくとしたらイタすぎだろ。

「うっ、そんなの当たり前じゃん。でも今はヤダ。今辞めたら逃げてたって思われる。鮎川だって、きっと会長の孫って分かったから迫ったって言われるよ」

今辞めたら、今までこいつが頑張ってきたことなんてすっぱり忘れて、『それ見たことか、やっぱりお嬢様だ』とか言う奴が必ず現れるか。俺も逆玉狙いだって言われるだろうな。

「俺は、そんなもん何とも思わねえよ」

「周りが一夜にして変わっちゃっても？」

「仕事が変わる訳じゃねえし、全員が敵になる訳でもないだろ。そんなもん、仕事で跳ね返してやるさ。お前も、負けたくねえんなら辞めないで一緒にいればいいさ。けどさあ」

「けど？」

「俺と一緒に闘おうや。1人で抱え込むのお前の悪い癖だぞ」

俺は薫の今にも泣き出しそうなほっぺたに手を当てて、そう言った。どんな奴が相手でも、怯まずつつこんで行くところがお前の良いところだけだな。切り込み隊長にも、疲れたら帰る場所があってもいいんじゃないか。

「鮎川あ、それってかつこ良すぎだよ」

薫は、そう言っただけで口をとんがらせて鼻水をすすった。

「そうそう、俺ってホントカッコいいだろ」

「あんた、自分が言う？」

あきれた、と薫。

「おお、言っぞ」

俺は胸を張ってそう答えた。こんなの、自分が言わなきゃ、誰が言

うんだ？ 他人にこんなこと言われたら、どんな裏があるのかと思
って逆に気色悪いだろうが。

「薫、お前いつ目が覚めるか分かんねえ俺をずっと見てくれてたん
だってな」

それから俺はマジな顔になって薫にそう言った。

「うん……」

薫は照れながら頷いた。

「もし俺が、この先ずっと寝たまんまだったとしても、そうしてく
れたか？」

「たぶん、ね」

俺の頭ん中には、昨日の夜の宮本の説教じみたうわごとだか報告だ
か判んねえ、俺が寝てる間の薫の話が渦巻いていた。さっきはそっ
こーでふられたけど、ここはいつちょ踏ん張ってみますか。

「俺、起きちまったけど、これからもずっと俺の傍にいてくれねえ
かな。ってか、夢の中でもお前は俺の嫁だったし、なんか他の奴考
えられねーんだよな、だからさ」

俺は、そう言っていると、異世界よろしく臣下の礼をとって、

「谷山薫さん、俺と結婚してください」

と一昔前の合コン番組みたく右手を差し出した。

薫は、ぼろぼろ泣きながら黙って俺のその手を握った。

ここはいつちょ、踏ん張ってみますか（後書き）

何だか、完全にラブコメになってます。ファンタジー要素皆無。

でも、この2人をまとめないと、先のファンタジーに進まないんです（涙）

もう少し、ガマンしてくださいね。

退院

元々怪我なんかしてなかったから、検査したってボロなんて出なくて、とつとと病院から解放されることになり、俺はちよつとビビりながら、会計に行った。何気に豪華なあおの二人部屋に50日あまり、カードの限度額超えなきゃ良いけどな。

しかし、俺たちの支払いはもう済んでいると言う。

「ええっ、済んだってどういうことだよ」

「支払いの方は全部櫛原さんの方に回すようにここに書かれています」

びつくりした俺に、会計の女は事務的にそう答えた。俺は後ろにいた薫を振り返ると、

「武叔父様が」

と言った。

「社長が？」

「絵梨紗の……そう、絵梨紗の命の恩人なんだからって払わせるなつて」

と、薫が答えた。だが、それはなんだか奥歯にものが挟まったような言い方だった。

「そりゃ、確かに助けたことには違いないんだろうけどさ、一つ間違や轢いてたかも知れないし、たまたま運が良かっただけだ。それにそこまでしてもらう筋合いはないと思うけどな。だけど、突っぱねて金額聞くにもあの部屋じゃなあ。ごくふつうの大部屋にしろいてくれりゃ良いのに」

「う、うん、そうだね。じゃないと気、遣うよね」

俺の言葉頷く薫の返事は相変わらず歯切れが悪い。

「礼を言わなきゃと思うんだが、こんな個人的な事会社で言うわけにもいかないんだけどよ、電話で済ますのも失礼だし、お前5分でもいいから時間取ってもらえるように頼んでくれねえか」

「うっん、お礼なんて良いよ。叔父様がしたくてしてることなんからさ」

「そんな訳にはいかねえだろ」

「気、気にしないで。あ、そうだ、鮎川明日ウチにくるでしょ？その時顔出し手もらうように言っとくよ」

「げっ、社長呼ぶってか？」

薫と一緒に闘うと言ってプロポーズした手前、俺が次に出社する前にとつとと薫の親に『結婚を前提にお付き合い』の挨拶をしようと言うことになったのだ。まあ、一緒に聞いて認知してもらってる方が風当たりは弱いかもしれないが、父親だけじゃなくて、叔父さんまでに値踏みされるんかよ。頭痛え……

「うん、武叔父様には早めに会っておいた方が、いいと思うのよ。そうよ、その方がダメージが少ないわ」

その後、薫がつぶやくようにそう言ったのが聞こえた。

それにしても、ダメージってなんだ？ 受けるのは社長？ それとも俺？？ 俺は、何だか分からないプレッシャーやら不安をひしひしと感じ始めていた。

熱烈歓迎？ 1

翌日、俺は薫んちに行った。ナビが示すのは、超下級の高級住宅街。都内に住んでも一回も行ったことがないところだ。

そして、俺は薫んちの前で盛大にため息を吐いた。何が、叔父様の家より小じんまりしてるだよ。白亜の豪邸じゃんかよ。じゃあ、社長の家はどんなだったんだ！

それもそのはず、薫の父親の谷山紀文は画家で、一枚書きゃ、ん千万だつー話だ。うええ、ますます俺、場違いじゃん。一回振られた時点ですんなり諦めとくべきだったか。

ま、いつまでもビビってる訳にも行かないんで、とりあえずインターフォンを押す。はい、という返事の後薫が玄関のドアを開いた途端……

家の奥の方から巨大な物体が俺に向かって突進してきた。

「うわっ」

体当たりしてきたそれを、俺は転びそうになりながらも何とか受け止めた。

「げっ」

動く毛玉、いや犬、確かボルゾイってやつだ。そいつは、俺の肩をがっしり掴むと、俺の口元を……

ペロペロと舐めだした。そのままディープキスされそうな勢いだ。よく見ると笑顔っぽいし（犬の感情なんて判んねえけど）尻尾振ってやがる。肩掴まれて首元にこられたときには、殺られるって本気で思ったぜ。一応、ここん家の家族を分捕ってくアウェイな訳だし、獣は人間よりそういうことに数段敏感らしいからな。

「ミランダ、こらっ止めなさい！ Sit!!」

薫にそう怒鳴られて、巨大な毛玉もとい、ミランダは渋々と薫の前にちんと座った。しかし、熱烈歓迎の意志は示したいのか、はあはあ言いながら尻尾だけはまだ振っている。

そこに薫の母親らしき女性が玄関に現れた。薫の外人度をさらに上げた感じで、小紋をを小ぎれいに着こなした姿は、どっかの旅館の名物女将っぽい。彼女は、

「あらあ、ミランダちゃんも女の子ねえ、イケメンはわかるのね」と言っミランダの頭を撫でた。

「顔じゃないわよ、鮎川あんたサラミ食べたでしょ」

「ああ、正確に言えば、サラミの乗ったピザをな」

50日も留守にしているんだ、冷蔵庫にあったもんは調味料をのぞけば全滅、かろうじてフリーザーに残ってた冷凍ピザだけしか食うもんがなかったんだよ。昨日帰りがけにすっかりと買うのを忘れたんだ。でも、何でそれがサラミだって判るんだ？ 薫は

「ママ、彼女は鮎川の胃の中のものに反応してるだけよ。ミランダ、いくら好きだってあんたサラミに反応しすぎ」

「モテたんじゃなくて残念だったわね。この子サラミに目がないのよ」

と言った。バーカ、犬にモテたって嬉しかねえよ。サラミに惚れてくれて結構だ。

まあ、そのバカ犬のおかげで幾分緊張感が取れて、俺は通されたそれこそそこだけで俺のアパートの部屋の何倍あるんだっていうリビングで薫の父親を待った。

「やあ、お待たせ。君が鮎川君？」

そして現れた薫の父親は、一人娘がかつさらわれるのだというのに、さっきのバカ犬も顔負けの満面の笑顔だ。

「初めまして、鮎川幸太郎です。」

俺は一旦座っていたソファから立ち上がって深々とお辞儀をする。

「谷山紀文です。退院おめでとう」

「ありがとうございます」

俺は、礼を言った後、咳払いをして、いきなり本題をきりだした。

「今日はですね、お嬢さんと結婚を前提におつ……」

しかし、紀文氏は俺の口上が終わらない内に、

「そんな堅いことは抜き抜き。鮎川君薫と結婚したいんでしょ。どうぞどうぞ、こんな面倒臭いので良かったら、是非」

と、さっさと俺たちの結婚を承諾してしまっただ。それにしてもノリ軽っ！ しかもトドメに、

「いやあ、君がずっと眠ったままだったらどうしようかと思ってたんだよ。それでも生きてるんだから、そちらのご両親に承諾もらって病床で式だけ挙げようかとか」

とまで言う。こっちが言い出す前に親公認なのも何だかなんだが、意識のない奴と結婚させようだなんて、どんだけ薫を追い出したいんだか。ホントに血つながってんのか？ 母親の外人的要素の方が際だって、いまいち判んねえぞ。

「パパ！！」

さすがにその発言にブチ切れて薫が思いつ切り父親を睨む。

「じよ、冗談だよ、薫。さすがに眠ったままの人間を後継者にするなんてお義父さんが許さないさ。でもね、私は嬉しいんだよ。大事な娘を絵描きになぞやるんじゃないかって、そりゃ肩身の狭い思いをしてきたんだから」

まあな、父親としちやいくら金取れるってたって、絵描きなんて次売れるか売れねえか分かんねえヤクザな商売認められねえよな、当の会長は結構でけえ会社のTOPな訳だし。解るよ、何か一カ所聞き捨てならねえ事聞いた気もするけど、取りあえず薫の親の反対はないってことだな。

・ピンポーン・

その時、インターフォンがなったかと思うと、だだだだっとな廊下を走る音がして、

「間に合った？ 僕間に合った？？」

と飛び込んできたのは、我が社の社長、櫛原武氏。しばらくして、もそもそつと絵梨紗も入ってきた。

じゃあ、ここから挨拶第二ラウンド突入ってか？

熱烈歓迎！ 2

「間に合った？ 僕間に合った？？」 紀文ちゃんきぶん」

と薫の父親に聞く社長。それに対して、当の紀文ちゃんは、野球のアウトサインをしながら、

「うーん、ギリギリアウトってとこかな」

と笑顔で言う。

「じゃあ、日取りとかも決まっちゃった？ いつ、いつ？」

日取りって結婚式の日取りか？ つか、なんだこのぶつ飛び具合は。社長せつかち過ぎねえか？ 俺は今日、薫と付き合う宣言しに来ただけだぞ。そう思ってる薫が、

「武叔父様、飛びすぎ。まだ、そこまで行ってない」

と言つて社長を睨む。おお、会社では絶対にあり得ねえな。

「じゃあ、僕のサポートの件は？」

「まだ！」

「じゃあ、取締役会の件は？」

「それもまだ！！」

「じゃあ、全然間に合ってるんじゃない、僕」

矢継ぎ早に俺の解らないことを質問した挙げ句、そんな話はしてねえことを知ると、社長はホツとむねをなでおろしていた。

「そういうのは、ウチには関係ないからね、タケちゃん」

「ひどいな、櫟原くろはらには大事な問題なんだよ」

そして、紀文ちゃんのその言い分に、社長改めタケちゃんはむくれながらそう返す。タケちゃん、普段とぜんぜんキャラ違うくないですか。その日本人離れた顔で小首を傾げると愛くるしいっちゃやうだけど、歳考えるとカテゴリー：かわいそうな子だよなあ。

「あ、社長。入院中はいろいろありがとうございました。ホントあんなすごい部屋にずっといさせてもらって恐縮です」

俺は、そんなタケちゃんの変わりつぷりに面食らいながらも、忙し

い中折角来てもらったんだからと、お礼の挨拶をする。

「いーのいーの、気にしないで。可愛いベスの命の恩人に窮屈な思いをさせたら、僕がパパに叱られるもん。それにさ、未来の社長の部屋としてはチープな方だよ」

ベス・エリサベツ・エリーサ・絵梨紗か。けど、未来の社長ってなんだ??

「俺、話が見えないんですけど」

「えっフロリーから聞いてないの? フロリーの旦那様には漏れなく櫛原がついてくるって話。」

とは言ってもさ、ぜんぜん櫛原に関係ない子が来ちゃったかどうかって思ってたんだけど。でね一応、調べさせてもらったよ、鮎川幸太郎君。で、合格! 文句なしだよ。フロリーちゃん、グッジョブ。ううん、見る目あるよ」

社長は今にもとろけ出しそうな満面の笑みだ。それで、フロリアでフロリーか……イヤイヤ、問題はそこじゃないつ、未来の社長だ。聞いてない、聞いてないぞそんな話!!

「社長! どうして俺が社長やんなきやなんなんですか!!」

「じゃないと、僕が辞められないもん」

俺の問いかけに、社長がウルウルの瞳でそう答える。

「社長ってまだ40代でしょ」

「うん、48。今年49になるよ」

だから、アラフィフ男が小首を傾げてしゃべるんじゃない!

「まだ、引退するような歳じゃないじゃないですか!」

思わずそう叫んだ俺に、タケちゃんは徐に一冊の本を取りだした。

熱烈歓迎！ 2（後書き）

うつつ、まだ終わらない。濃すぎる薫の身内たちに、作者まで圧倒されてます。

社長改めタケちゃんが会社を辞めたがる理由は次回。

熱烈歓迎！？ 3

タケちゃん（もう、社長と呼ぶ気がしねえ）が差し出したその本は最近話題の市原健いちハラタケルの恋愛小説。作者の経歴おろか性別さえも（ただ、名前からして男性だっと思うが、何年か前に本 大賞を取った作者は男っぽい名前だけど、女だったりしたしな）不明な謎の作家の作品だ。タケちゃんはその本の名前の部分を指さして、

「これ、僕」

と言った。2歳児みたく2語文じゃ、何言ってるのか解んねえ。

「へっ？」

「一応音だけは本名なんだよ。だけど、誰も僕だっけ気づいてくれないから、寂しいんだよね」

タケちゃんがそう言っただけ息を吐く。

「市原いちハラ櫟原れきげん、ぜんぜん違うじゃないですか」

どこが一緒だ。

「あのね、櫟の木はいちいの木とも呼ばれていてね、みんなが読み間違えるから社名はくぬぎはらにしちゃったんだけどね、元々の読みはいちはら」

それに、櫟って画数多いから面倒だし、本名で書くのもね、とタケちゃんは続けた。

「僕の書いた文章に紀文きぶんちゃんが絵をかいてさ、一緒にやろうっていったのに……紀文ちゃんたら、一人で絵を描いて勝手に有名になっちゃうんだもんなあ」

タケちゃんが文章を書いて紀文ちゃんが挿し絵か。それとも二人で漫画家にでもなろうとしていたんだろうか。

「タケちゃんには、会社があるだろ。タケちゃんまで引つ張ったら俺、お義父さんに殺されるよ」

まあな、嫁にやってその上跡取りを別の仕事に持ってかれたら……思いっきり立場悪くなるよな。

「紀文ちゃんも描きながら会社手伝ってくれたらいいじゃない」

「片手間でできるこっちゃないだろ。会社潰して良いんだったら手伝うけど？」

タケちゃんの言い分に紀文ちゃんはしれつとそう返す。

「ふん、紀文ちゃんは僕よりエミナちゃんを取ったんだ」

普通そうだろ、嫁より嫁の弟取ってどうする、という紀文ちゃんにタケちゃんは口をへの字に曲げて黙り込む。なんつーか、まるでガキの会話だよ。

「ま、そう言うことだから、タケちゃんのこと手伝ってやってくれないかな。君にも譲れない夢があるのなら別だが」

そんなタケちゃんを生温かい目で見ながら紀文ちゃんが父親の顔に戻って俺に言う。

「俺にそんなご大層な夢なんかありませんよ。社長なんてガラじゃないですけど、サポートってことなら構わないですよ」

「やったあ、ありがとう！！」

取りあえず承諾した俺に、タケちゃん破顔で俺の手を握りブンブン振り回した。うー、なんだかなあ。早い遅いに関係なく、俺ダメージ大きいかも。

「それじゃあ、早速僕の見習いってことで、秘書課に異動かけとくから。今まで君がしていた仕事、入院中に全部ほかの社員に振り分けられてるからね。そのまま異動できる。ほんとラッキーだよ」

「後は、結婚式だね。櫛原の社長の結婚式として恥ずかしくないものにしなきゃね」

タケちゃんは、会社から足抜けができると決まったからか、上機嫌でそう言った。この分だとあつと言う間に会社投げてこれれそうだな。安請け合いて良かったのかな、俺。そう思っていると、今まで黙っていた絵梨紗が、

「お姉ちゃまは結婚式かあ、いいなあ」

と盛大にため息をつきながらそう言った。けど、続けて言った、

「あたしも、ビクと結婚したいな」
という言葉にその場にいた全員の動きが止まった。

繰り上げ当選？

「ベス、ビクって誰？」

タケちゃんが聞き捨てならないと絵梨紗にそう聞く。それに対して、

「ああ、本名宮本美久、みやもとよしひさ彼女の命の恩人その2ですよ」

俺が代わってそう答えた。

「じゃあ、幸太郎君と一緒に乗ってたっていう？　ビクって言うから、ベスの学校の友達かと思っちゃった。日本人でしょ、何でビク？」

学校の友達って言うから聞いてみると、絵梨紗はアメリカンスクールに通っているらしい。

「ええ、ベタベタのネイティブ日本人ですよ。よしひさってのは、美しいに久しいって書くんですよ。つい最近ちよつと外人と知り合いになって、そいつがよしひさって発音できなくてヨッシャにしか聞こえないから、それなら俺が音読みでビクって呼べば良いってそいつに教えたんです」

正確に言えば、外人じゃなくて、異世界人だけだな。そう言えば、ビクって呼ぶ元になったマシュー改めエリーサは、宮本との別れ際、泣きながらよしひさと発音しようと懸命に頑張っていたっけ。そんなことを思い出していると、タケちゃんは俺をリビングの隅に連れて行くと、小声で、

「ねえ、宮本君の方はベスの事どう思ってるの？　ベスの独りよがりとかじゃない？」

と聞いた。絵梨紗はまだ恋に恋する年頃、命の恩人に優しくされて、その気になってるようなことを心配しているのだろう。

「いいえ、残念でしょうけど、しっかり両想いですよ」

寧ろ、宮本の方がお宅の姪御さんに夢中です。

「ふーん、そうか……ベス、ホントにビクくんのお嫁さんになりたいの？」

「うん、なりたい!」

なれるの!? とその一言に身を乗り出す絵梨紗。

「でもね、ベスが結婚できる歳になるまでまだいぶあるし、それまでに気持ちが変わるかもしれないからさ、一応仮押さえてことで、宮本くんも一緒に秘書課に異動させるよ。このままうまく行くようなら、君の補佐をしてもらう。その方が君も気分が楽でしょ? でね、最初は君が僕のところにきてもらうつもりだったけど、絵梨紗の彼氏をパパにつけるのはちょっとさすがにアレだから、君がパパの方に回ってくれる?

思ったより、僕早く辞められそうだね、君は痛い思いをしただろうけど、僕としてはホントに良かったよ」

タケちゃんは嬉しそうにそう言っていると、まだ仕事があるとさっさと帰って行った。まったく、自分が言いたいことだけ言って行っちゃったぜ。

その後……

タケちゃんはそれから半年も経たない内に青木賞にノミネートされてしまった。受賞後呆気なく素性をカミングアウト。社内は蜂の巣を突いたような大騒ぎとなる。それで、タケちゃんが未だ独身であることが発覚。

「じゃあ、デビくんは一体誰の子なんだ?」

と聞いた俺に、

「あれ? 言ってなかったっけ?」

と、薫。そこで俺たちは、デビくんこと本名いちひであ櫟原英雄（英名デビッド）は会長の30歳年下の再婚相手、クラウドアさんとの間にできた、タケちゃんにとっては義弟だった。ちなみに絵梨紗は英雄の姉。つまり、タケちゃんの義妹。

「じゃあ、絵梨紗は義理の叔母? ってことは、あの二人がくっつきゃ宮本は俺の義理の叔父になっちゃうってか!？」

それを聞いたとき、俺がそんな雄叫びを上げてしまったことは言うまでもない。

繰り上げ当選？（後書き）

以上で、番外幸太郎編、一段落です。

次回よりオラトリオ組の話に戻ります。わーい、やっとファンタジーだよ。

てな訳で、次は「希代の魔術師」の方でお会いしましょう。

綺麗なお嬢さんは好きですか？（前書き）

本編から、一年後位。新章の少し後くらいのお話です。

綺麗なお嬢さんは好きですか？

今日は久しぶりのお休みで、絵梨紗ちゃんとデート。

待ち合わせに現れた絵梨紗ちゃんとは小花柄のチュニツクに白いレースのミニ丈のティアドレススカートに、編み上げサンダル。まるで絵本から出てきたみたい。僕は鼻血が出そうになって、思わず鼻を押さえた。

行き先はビルの森の中にある水族館。海の生き物には本当に癒される。特に、勇壮に勢いよく泳ぐマグロの大群は本当に……旨そう。そう思ったら無性におなかが空いてきた。それもそのはず、そろそろお昼だ。

マグロを見た後だったんで僕の口はどっちかと言えばお寿司を要求していたんだけど、とりあえず絵梨紗ちゃんの意向を聞いてみる。「何か食べたいもの、ある？」

すると、

「うーん、ケバブ食べてみたい。確かこの辺に美味しい店があるって聞いたんだ」

という答えが返ってきた。ケバブというのはトルコ料理。平たく言えば焼き肉みたいなものだ。まだまだ小学生の絵梨紗ちゃんは、ご両親か谷山先輩としかこの街にきたことがなく、歩きながら頼めるようなその店のケバブは、お行儀が悪いと食べさせてもらえなかったのだという。

その教育方針をあっさり曲げて一緒に買い食いしても良いものなのかと思わなくもなかったけど、僕の賤しい口はケバブと聞いただけで口の中に肉汁を待つ始末だったので、あっさりとその誘惑に負けて彼女の言うケバブのお店に向かい、ドネルケバブを一つずつ買い、食べながら歩いた。

半分以上くらい食べただろうか、その時僕は、
「ヨシ、久しぶり」

と呼び止められた。振り返るとそこには中学時代の同級生の佐々木がいた。

「久しぶり、元気だった？」

「おう、まあまあな。なんかもぐりこんで会社員やってるよ。ヨシは」

「うん、僕も似たようなもん」

と僕たちはお決まりの挨拶を交わす。すると、佐々木は絵梨紗ちゃんに眼をやって、

「ところで、横にいるのは、妹……じゃないよな。おまえんち男ばつかだったもんな。カノジヨ？」

と言った。僕は男ばかりの3人兄弟の末っ子だ。佐々木はそれを知っている。

「うん、ああ」

と、それに僕は適当に相槌を打つ。すると、僕を横目で見ていた絵梨紗ちゃんが、

「はじめまして、宮本美久の婚約者の櫛原いちばら絵梨紗えりさです。宮本がいつもお世話になってます」

と言って、佐々木に頭を下げる。見るとちょっぴりふくれっ面だ。恋人として紹介してもらえなかったのが不満らしい。

「こ、婚約者あー！」

一方、それを聞いた佐々木は信じられないというのがありありと判る顔をしている。

「うん、一応」

別に隠したい訳じゃないんだけどね、やっぱり婚約者って響きは照れくさいから。僕がそう思いながら頭を掻いていると、佐々木は俺の腕をとって強引に5、6メートル向こうに引っ張っていくと、

「お、お前、婚約者って、あの子いくつだ」

とひそひそ声で聞く。

「うん？ 12」

この間誕生日がきたから、12歳になったはずだ。

「12!？」

絵梨紗ちゃんの歳を聞いて佐々木がまた素っ頓狂な声をあげる。

「お前それ、犯罪だろ」

「人聞きの悪いこと言わないでよ、アブナイことなんかしてないから、犯罪じゃないよ」

佐々木の言いぐさに、僕は不満がましくそう答える。

「でも、婚約者なんだろ」

「結婚してるわけじゃないし」

「結婚できないの間違いだろ」

佐々木はそう言っただけ息をついた後、ニヤリと笑うと、

「それにしてもヨシがロリだったなんてな」と言った。

「な、何だよ、それ。そんなんじゃないよ」

「じゃあ、政略結婚か？」

「そんな政略立てるほどの金持ちじゃないよ」

「だろ？ 何にしたって、自分の半分の歳の娘と結婚しようなんて考える時点でロリ決定だろうが」

「あ、これにはさ、いろいろと深い訳があって……」

絵梨紗ちゃんはエリーサちゃん、エリーサちゃんは最初マシユで、僕は彼女が大男だったときから好きだから、決してロリコンなんかじゃないと心の中では言いつつ、でもそんな夢の話をするわけにもいかず、口ごもった。僕の答えに佐々木は、

「ま、な。小学生ならお前より背が高いなんてことないもんな、でもあの子ハーフっぱいじゃん。その内逆転するんじゃない？」

と返す。うつつ、内心気にし始めてることをさらっと言っんじゃない！ そうさ、愛情は身長じゃない、身長じゃない……と思いたい。「ねえ、ビクいつまでお話してるの！」

そのうち、男たちのひそひそ話に痺れを切らせた絵梨紗ちゃんが仁王立ちで怒っている。

「あ、悪い。引き留めちゃったみたいだな。それにしても『ビク』」

なんて呼ばれてるわけ？ ヨシ」

すっかり今から尻に敷かれてんじやんと、佐々木は吹き出した後、

「俺はやっぱ、きれいなおねーさんの方が良いな。カノジヨにおねーさんとかいないの」

「いるよ」

「おつ、その子いくつ」

「25」

「俺らより年上？ いやあ、歳離れてんだな。けど、年上もそそれるねえ、是非紹介してよ」

佐々木はにやにやしながら、僕にそう言う。

そう、絵梨紗ちゃんには確かにお姉さんがいる。僕、ウソは言っていない。

だけど、その人僕の先輩の奥さんなんですけど。先輩に殺されてもいいんなら紹介くらいはしてあげるけどね。

（先輩今、超デレモードだからね、何されても責任持てないよ。それでも良いんだったらね）

僕は心の中で佐々木にそう言って、口角をあげた。

綺麗なお嬢さんは好きですか？（後書き）

タケちゃんがほとんど作家業にいそしむ中、きりきり舞いしている美久と絵梨紗の水族館デートでした。何か、美久食い気で動いてましたけど……

で、このお話はここで閉じようと思います。新章は別枠でR - 15（ってほどにはならないかも知れませんが、保険です。その方が思いつきはじけられますから）フラグを立てることにしました。

幸太郎が宗旨替えして超デレモードになっている理由がそこで明らかにされる……はず。

よろしければお付き合いください。

天使様との出会い

「さ、最悪だわ……」

私は、某高級ホテルの廊下で動けなくなっていた。着物を着ていたせいで、ホテルの毛足の長い絨毯に足を取られて、私は豪快に転んでしまったのだ。こっそり出ようと人気の少ない駐車場に向かっていたので、誰にも見られなかったのが幸いだけど。

考えたらママ、朝から挙動不審だったのよね。

「引き出しの奥からママの若い時の着物が出てきたのよ、着てみる？」

つて、鼻先に突き出された。呉服屋の娘だったママはたくさん着物を持っていて、確かにそれはママの若い頃のものだったけど、持っているだけにちゃんとカテゴライズされていて、思い出したように出てきた代物じゃない。

先生の先生がお見えになるから、迂闊な格好はできないのでママも着物で行くっていうし、私も呉服屋の孫娘、基本的に着物は嫌じゃない。

ただ、たかがカルチャースクールの発表展示会がこんな有名ホテルで行われる訳ないってことにもっと早く気づくべきだったわ。

そう、用意されていたのは、ママのカルチャースクールの発表展示会じゃなくて、私のお見合いだった。向かおうとしているラウンジに展示物が一つもなく、ちょっと頭の薄くなった男性が座っているのを見てことを察して激怒した私に、ママはしれっと、

「だって、36にもなるとお話を持ってきてくれること自体が稀なのよ。それに更紗ちゃん、最初からお見合いだなんて言ったらにべもなく断るでしょ」

と言った。だからって、だまし討ちはどうかと思う。

それで仕方なく私は席についたんだけど、この相手の男性がまた、

くくてしててどうも煮えきらないのよね。話を聞いていてイライラしちゃう。

で、私はトイレに行くフリをしてその場を抜け出してそのまま逃走を図ろうとしていたのに……マズった。

「お嬢さん、大丈夫ですか」

その時、頭の上で声がした。

「はい、Yes」

そこにいたのは、スーツを着た外人男性。下から見上げているので、豪華なホテルの照明に照らされて、まるで天使様みたいだ。あわて英語で話そうとするけど、言葉が出てこない。

「えっ、僕ちゃんと日本語で話しましたよね。心配しないで、僕半分は日本人ですから」

すると、天使様は困ったような顔でそう言った。は、ハーフなんだ。顔から火が出そう。

「あ、すいません」

「いいえ、最近でこそあまりなくなりましたが、結構よくそういう反応はされてるので、慣れてますよ」

天使様はそう言いながら、私に手を貸してくれた。

「イタッ」

だけど、立とうとした私は、左足首に激痛を感じた。

「ああ、足捻っちゃったみたいですね」

天使様はそのまま屈んで私の足袋を脱がせると左足を見た。あちゃ

ー、どうしよう、やっちゃったわ。でも、

「どうしよう、早く逃げなきゃいけないのに」

思わず口を出た（最近思ってることをついつい口に出しちゃうのよね、歳かしら）言葉に天使様は、

「えっ、君も逃げなきゃいけないの？」

驚いてそう言った。でも、「も」って何？

その時、

「タケちゃん、タケちゃん！」

と焦ったような男性の声がした。

「や、ヤバい。見つかる」

天使様は舌打ちしながら小声でそう言つと、

「君も逃げなきゃいけないんですよね」

と言いながら、軽々と私を抱き上げ、

「じゃあ、このまま一緒に逃げますか」

と、駐車場に向かってスタスタ歩きだした。

天使様との出会い（後書き）

はい、「赤パニ」で最後に美久が言っていた武の小ネタ入ります。

武が逃げている理由は……もう、お解りですね。

尚、これはファンタジーではございません。

ま、50歳と36歳の恋愛はある意味ファンタジーなのかも知れませんが。

こんなのでよかったですらお付き合いください。

拉致られた？

「あ、あの……下ろしてください」

確かに一刻も早くホテルを出たかったのは事実だけど、お姫様だっことはちょっと勘弁してほしい。しかも、天使のような容貌をしていたとしても、彼は全く見ず知らずの男性だ。『天使の皮を被った悪魔』かもしれないもの。それに対して天使様は、まったく歩く速度を落とさないで、

「なぜですか？」

と聞く。

「お嬢さんは逃げなきゃならないんですよ。僕も逃げなきゃならない。利害は一致してます」

と何とも優雅な微笑みを浮かべながら駐車場を目指す。

そして、3ナンバーの国産車の前で一旦私を下ろすと、ドアを開け、助手席のシートを可能な限り後ろに下げて再び私を抱えあげた。よく考えたら、コレ、相当ヤバいんじゃない？ 私は今更ながらに逃げ出そうともがいた。

「どこに連れていくんですか！」

「暴れないでください、落ちたらもつと怪我しますよ。」

そうですね、どこに行きます？

とりあえず病院に行きましょう。どこに行くかはその時決めましょうか」

天使様は暴れる私を再度がっちりと抱え込むとそう言った。

「ただ捻っただけだから、病院なんて良いですよ」

病院？ 大袈裟な。こんなの、湿布貼って大人しくしてればいいのよ。

「ダメです！ 今見ましたけど、お嬢さんの足、既に腫れてきてますよ。」

それに、捻挫をバカにしちゃいけない。骨折と違って歩けるからって無理に歩いたら、骨と筋の間に隙間ができるんです。そうになったら、もう元には戻らない」

それに対して、天使様は即答でだめ出しをした。

「隙間ができたらどうだって言うんです」

そんなの別に外から見えないし。私がそう言うって天使様は、

「普通にいるなら何にも問題はないですよ、でも長時間歩いたり、立ちっぱなしで作業すると痛んできます。」

五体満足に生んでもらった身体でしょう？　なら、大切に使いましょう」

なんて説教を垂れながら有無を言わせず、私を助手席に押し込んで自分も乗り込むと、すぐに発進した。これじゃ、拉致じゃない。

でも、天使様はそこから何分も行かないコンビニに車を停めると、喉でも乾いたのだろうか、

「ちょっと待っててくださいね」

と言って一人で車を降りてしまった。

このとき確かに、国産車の助手席では左足に力が入らないと難しいとは言え、どうしてもと思えば私は逃げられたはずだ。

でも、結局私は待った。どうせ逃げたところでこの足だ、すぐに追いつかれてしまうだろうし、私にはこの天使様がなんだか悪い人にはどうしても思えなくて。

しばらくして戻ってきた天使様の手には小さなビニール袋が二つ握られていた。一つは私の予想通り飲み物で、

「コーヒー大丈夫？」

と言われて頷いた私に手渡されたのは、甘いカフェオレだった。

「あ、ブラックとかの方が良かった？　僕、いつもこういうのしか飲めなくて、つい同じもの買っちゃったんだけど」

と言う彼が持っているのも、同じものだった。

「いえ、コーヒーなら何でも飲みますよ」

カロリーが気になるからいつもはブラックだけど、甘い方が本当は好き。

そしてもう一つには、サンダルが入っていた。

「病院でテーピングしてもらって、このサンダルでなら松葉杖ついて歩けるでしょ」

「あ、ありがとうございます」

「それから、何か服を買いに行きましょう」

「へっ」

だけど、何故に服が要る？ 私が天使様の言葉に首を傾げると、

「帯をしていると、椅子の背に身体を預けられないでしょ。そして足、きつくないですか」

と逆に質問してきた。

「いいえ、普段からよく着物は着ますから」

「そうですか、でもその着物はちよつと……」

この着物の何がいけないのだろう。それに対して天使様は、

「えっ、僕たち一緒に逃げるんですよ。だったら、その着物は目立つし、もっと逃げやすい格好をした方が」

と、真顔で言う。

逃げやすい格好って……そりゃ、確かに逃げなきゃって言ったのは私だけど、それはお見合い場所からであって、別に国外逃亡とかするつもりはさらさらないんだけど。

それにしても、天使様は何で逃げようとしてるんだろう……そう考えたとき、私はある重要なことに気づいた。

……私、天使様の名前も知らないんだってことに。

お名前は？

「あの……今更なんですが、あなたのお名前は……」

私がそう聞くと、

「あ、ああ、すいません。僕名前も言ってなかったんですね。それは警戒されても仕方ないな。」

僕は……た、いえ、マイケル。そうマイケルです」

天使様改めマイケルさんは、真っ赤な顔になってそう答えた。警戒していたこと、気づかれてたか。けれど、名前のところで若干口ごもったのが気になる。それで、マイケルさんが私に、

「あなたの名前も教えてくださいませんか」

聞き返したとき、私の本名は更紗さらやなんだけど、

「私ですか。さらです」

と、答えた。実際、私の学生時代の友達なんかはさらちゃんって呼ばれているし、コレくらいなら偽名にはならないよね。それにしてもぴったりだな。マイケルって、大天使ミカエルの英語読みでしょ。「さらさんか、かわいい名前だ。そのね、最近ではミシエルと呼ばれることも多いんだ。新しい義母いははがフランス語圏で育ったんで、マイケルとは呼んでくれなくて。義妹や義弟はそれに倣うしね。だから、マイケルでもミシエルでもどちらでも良いですよ」

と、マイケルさんは私が訝あやっているのを察したのか、そう付け加えた。それにしても新しい義母いははって……口調は全然寂しそうじゃないんだけど、そんなハードな話を見ず知らの私が聞いてちゃっていいのかな。それで、

「あなたはどちらで呼ばれたいですか」

私は少し考えてそう聞いた。

「うーん、どっちでも良いけど。さらちゃんが呼びやすい方で」

するとマイケルさんはそう即答する。本当のお母様との思い出とかあるかなと思ったんだけど、その口振りを聞くと、ホントにどう

でもいいみたいだ。

にしても、いきなりさらちゃんって呼ぶ？ 確かに、5つ？ 7つかな、くらいは年上みたいだけど。

そうこうしている内に車は近くの救急病院に着いた。休みの今日は救急外来から入る。でも、せっかくサンダルまで買ったというのに、私は相変わらずお姫様だっこのままだ。

「サンダルも履いているんだし、もう下ります」

と言っても、ダメだの一点張り。案の定、待合いの椅子に着くまでに、ナースの人から、

「事故ですか？ 歩けないんでしたら車いすをお持ちしますよ」

と言われてしまう。それで、

「い、いえちよつと捻っただけですから。歩けます」

そう返して、再度着地しようとするけど、マイケルさんはそれをがっつちりとホールドして、

「何度言ったら解るんですか、捻挫の方が実は骨折より質が悪いんですよ。すいません、僕は一向構わないんですが、この人が歩きたがるので、お願いします」

と、勝手にナースさんをお願いしてしまって、ナースさんはクスッと笑って車いすを取りに行ってしまった。

そして、すぐにやってきた車いすに乗せられる。何だか格好だけは大きがしてるみたいで恥ずかしい。

中に入ると、冷却シートをおでこに張り付けてくったりしている小さい子とか、いかにも辛そうなお年寄りとかがいて、なんか場違いな感じがする。マイケルさんは待合いの椅子の横に車いすを停めて、

「さらちゃん、保険証持つてる？ あつたら、受付に出してくるよ」と言っただので、持っていたバッグをさぐった。今日は着物だから財布ぐらいしか持っていないけど、保険証は、カード化されてから財

布の中に入っている。車に乗れない私には、これが身分証明書のメインだし、どうせ今日は休日料金だけど、それでも保険証を出さないよりはマシ。私は保険証を取り出して、マイケルさんに手渡した。でも、受け取った彼は、ちらつとそれを眺めると、

「へえ、月島……あれ、コレでさらって読むの？」

と聞く。

あ、あああつ！　しまったあ！！

……保険証って、ばっちり本名が書いてあるんだつた……

私のついた軽い嘘は、こうして一時間も経たない内にバレてしまったのだつた。

お名前は？（後書き）

実年齢50歳のタケちゃんもとい、マイケル君ですが、ムダにバイタリティーのある彼は、更紗ちゃんに40代前半に見られているようです。

究極の選択

「いえ、更紗さらです」

私は蚊の鳴くような声でそう答えた。

「へえ、そう」

とだけ言うマイケルさんの視線がイタい。

「マイケルさんこそ、本名なんですか？」

私はそれに負けまいと、マイケルさんを睨みながらそう返した。

「ぼ、僕はもちろん本名だよ」

それに対して若干噛みながらマイケルさんが言う。

「じゃあ、名字は？」

「櫟原いちばら。櫟くもみの木に原はらつばの原でいちばらって読むんだ」

「ホントですか」

「正真正銘、マイケル・櫟原だよ、君と違って」

そして、念を押す私にマイケルさんは少しふくれっ面でそう答えた。けど、

「何か証明できるものは？」

と尚も私が食い下がると、

「証明できるものって……」

と、明らかに難色を示している。怪しい……私と違ってマイケルさんの場合、絶対に携帯しているはずの身分証明書があるはず。

「免許証、見せてください」

「それは……」

案の定、マイケルさんはしどろもどろになる。

「見せられないんですか？」

「良いです。見せますよ、見せれば良いんですね」

それでも私が詰め寄ると、マイケルさんは観念したようにため息をつき、ちよっぴり逆ギレしながら私に免許証をみせた。そこには、櫟原武と書かれていた。やっぱりマイケルは本名じゃなかったのね。

だけど、予想外に日本人っぽい名前だ。

「やっぱり、マイケルさんも本名じゃないじゃないですか」

と、私が口をとがらせて抗議すると、

「ちゃんと本名だよ。母がイギリス人だから、英名も持ってるんだ」

と言い訳する。

「だからって、何で日本名を隠すんですか？ 『いちはらたけし』って（名字がちよつと難読だけど）普通じゃないですか」

そうよ、何で隠す必要があるんだろ。

「たけし……そうだね、そうだよ。僕、何を怖がってたんだろうな。うん、更紗ちゃんの言う通りだよ」

私がそう言つと、マイケルさんはそう言つて笑った。明らかにホッとした様子だ。私、何か彼を安心させるようなこと、言つたかな。

「月島さん、月島更紗さん、診察室にお越しください」

そのとき、診察室から声がかかった。マイケルさんは当然のように私の車いすを押して診察室に向かう。そして私が、

「いいですよ、車いすも借りてもらったんだし、私一人で大丈夫です」

と言つても、

「慣れないとまっすぐには行かないでしょ。それに今、僕にはすることないし」

と言つてその手を離さず、お医者様の前まで押していった。

「月島さん、かなり強く捻ってるね。今日は救急でサポーターとか用意できないから、しっかりテーピングしておくけど、必ず明日整形に行つてね」

そこにいたのは、私ぐらいかそれより少し若い位の男の先生。先生は、クスクス笑いながら私に、

「それにしても、とんだデートだったね」

と言つた。で、デートですとお！

「いえ、デートなんかじゃありません」

あわてて否定した私に、先生はなおも、

「違うの？ お姫様だっこされてきたって聞いたし、二人ともおしやれしてるから。じゃあ、転んだのがホテルだって言うから、お見合い？」

と続ける。お見合いと言われて、私の頭の中に、あの『髪の毛風前の灯火』さんが浮かぶ。

「お見合いなんかじゃありません！！ あたっ！」

私は、その発言に、思わず立ち上がって抗議したとたん、足に激痛が走って車いすに逆戻り。

「失礼じゃないですか、ここは他人のプライバシーにまで関わるところなんですか」

なんなら法的処置も辞さない、マイケルさんもえらい剣幕で怒る。

「いや……お二人を見ててほほえましいカップルだなと思ったから言っただけで。そうじゃないんだったら謝ります」

すると、先生は相変わらずへらつと笑いながらそう答えた。おまえ、口では謝ってるけど反省してないだろう。

だからといって、休日の混んだ病院でこれ以上ゴネるのもなんだし、私は頭だけ軽く下げて、隣の処置室で足にミイラのようなテーピングをされて、かいほうされた。でも……

「あの……できたら松……もごもご」

テーピングを受けながら、松葉杖を借りようとした私に、マイケルさんは私の口に手を当ててそれを制した。そして、耳元で囁くように、

「ここで借りたら、また返しに来ないといけないよ。いいの？」

と言った。あのへらこん医師が整形医かどうかはわからないけど、顔なんか合わせなくつても、電車の沿線が違うからかなり遠回りしないといけないし、できれば来たくない。私は頭を振った。それを見てマイケルさんはクスッと笑う。

ん？ 何でそこで笑う?? 私、なんか大事なことを忘れてるよう

な……

あああーっ、松葉杖を頼まないってことは、またあの『お姫様だっこ』をされて帰るってことなの！？

イヤだあ！ 返しに来るのもイヤだけど、お姫様だっこはもつとイヤ。だけどまてよ、もう既にやられてるんだから、今更もついいか……いやいや、やっぱり恥ずかしいし。

さあ、どうする？ 私。

究極の選択（後書き）

タケちゃんが名前を言わなかったのは、音だけだと、櫛原武が作家市原健につながるのを怖れてでした。

なので、更紗ちゃんが『たけし』と読み間違えてホッとした訳ですね。

青木賞受賞時は、タケちゃんが元櫛原の社長であることをワイドショーなんかでさんざんやってたんですが、もうそれからずいぶん経っていますし、仕事をしている更紗ちゃんはあるまりそういうものを見ませんので知らなかったのです。

紳士の国の血？

プルプル震えながら首を振る私に、ナースさんが、

「あら、痛かった？」

と聞く。

「あ、いえ」

痛くはないです。あ、ある意味痛いかも……心が。それで、

「そうですね、テーピングもしたんだし、肩、貸してくださいれば」

私がそう言つと、マイケルさんは、

「ムリ」

と秒殺した。

「何ですか」

そんなに私をお姫様だっこしたいんですか、マイケルさん。だけど、マイケルさんは私の質問には答えず、

「じゃあ、聞くけど更紗ちゃん、何cm？」

と、いきなり私の身長を聞いた。

「ひやく、157cm」

本当は156.2cmだけど。マイケルさんは、やっぱりそれくらい？と言った。

「僕、178cmあるんだよね。肩を貸すのってある程度同じぐらい身長ないと、高い方がきついんだよね」

その差21cm。私がマイケルさんの肩に手を回すとなると、マイケルさんはずっと中腰で歩くことになる。それは確かにハードかも。マイケルさんは、

「それに行きほど大変じゃないと思うよ」

と私に言つた後、ナースさんに向かって、

「あ、後で返しに来るんで、この車いす車まで押していつて良いですか」

と聞いた。おおーっ、その手があったか。もちろんそれは快諾され、

ちよつと一安心。

処置室を出てしばらくすると、会計に名前を呼ばれた。するとマイケルさんは、

「ちよつと待つてて、僕が払ってくるから」

と、当の本人の私をおいて一人でさつさと会計に行く。私は慌てて慣れない車いすを漕ぎながら後を追った。

「マイケルさん、私が払いますから」

別にマイケルさんが私を怪我させた訳でもないのに払ってもらう筋合いなんて全然ないから。なのに、マイケルさんは、

「いや、病院に連れてきたのは僕だしね。ここは僕が払うよ」

と、まるで当たり前のようにお金を出そうとする。さすが、紳士の国の血を引いてる、フェミニストって奴ですか。私が、

「この怪我は私の不注意で、マイケルさんには何にも関係ないですから」

と言つても、

「何で？ 一緒にいる女性にお金なんて出させたりできないよ」

と、まったく払う姿勢を辞さない。何度か押し問答の末、自由に身動きできない私が押し負けた。

駐車場まで車いすを押しながら上機嫌のマイケルさん。今日会ったばかりの他人の治療費払って、何がそんなに嬉しい。

私を乗せた後、玄関先に待機していたナースさんに車いすを返して、マイケルさんはどこに行くとも言わずに走り出した。

キ、キャラ違うんですけど……

マイケルさんは信号待ちの間に素早くインカムを取り出すと、どこかに電話をかけた。スマホは乗った直後に専用のポートに差し込んである。たぶん、普段からこんな風に電話することが多いのだろう。

「……ああ、櫛原だが。今からそちらに向かうんで、駐車場に車をすを用意してもらいたい。連れが怪我をしているんで。じゃあ、15分後ぐらいにそちらに着くのでよろしく」

それにしても、いったいどこに行くつもりなのだろうか。でも私は、電話のマイケルさんの口調が思いの外高圧的なのにびっくりして、それを聞くことができず、マイケルさんも何もしゃべらない。電話のためのか、カーオーディオのポリウムを切ってある静かな車内には微妙な空気だけが流れていた。

そしてついたのは都内の有名デパート。駐車場に着くと、デパートの偉いさんらしき人が、車いすを持って待ち構えていた。

「櫛原様、いらっしゃいませ。お待ちしておりました。こちらのお嬢様をお乗せすればよろしいでしょうか」

デパートの人はマイケルさんににこやかに挨拶をすると、素早く助手席に回り込んでそのドアを開けたけど、

「いや、彼女は私が乗せる。それよりも彼女が動きやすい服を見繕ってもらいたいのだが」

「かしこまりました」

マイケルさんはこちらに回り込み、私を抱き上げると、デパートの人が持ってきた車いすに私を座らせた。デパートの人は、部下の人らしき男の人に、

「和光さんを外商に」

と指示を出した。すぐさま部下の人が和光さん呼びに走って行く。そして、

「すみません、櫛原様ご自身のお買い物だと思いましたので、中村を来させたんですか」

と恐縮しながら頭を下げた。

「いや、女性の買い物だと言わなかった私が悪い」

「とんでもございません。お電話を頂いたとき、まずこちらがお伺いすべきでした」

大体、デパートの人って低姿勢だけど、この人の姿勢は更に低いような気がする。それだけマイケルさんが普段このデパートで買い物しているのだから解る。でも、相変わらずマイケルさんの口調は高圧的で、私には話しかけてもくれない。どうしちゃったんだろ。

いつもとは違うエレベーターで最上階に上がると、そこは応接室のようなところだった。これが噂の外商部って奴なのね。私には一生縁のないところだと思っていた。

デパートの人が両開きのドアを開けると、そこには、既に和光と書かれた名札をした女性が衣類ハンガーに服をいっぱい吊り下げて待機していた。そして、

「初めまして、和光と申します」

と完璧な角度でお辞儀をした後、

「お御足のことを考えますと、ストッキングを穿くことも難しいと思います、パンツスーツを中心にご用意させていただきました。トップスは7号でボトムスは9号でよろしいでしょうか？ それでしたらこれなどがでしょうか？」

とたくさん吊ってある中から、ワインレッドのものを取り出す。たぶん私が今着ているエンジに小花柄の着物を見てのチョイスだろう。でもこれは、ママから『見合い』の為に着せられたただけなんだけど、それに気づいているのかどうかは別として、和光さんはさらに私が目で追っている場所を素早く見て取って、

「それからこちらなどもよろしいかと」

と、目線の先にあったスカイブルーのものも取り出した。

それにしても、体型がわかりにくい着物を着て車いすに座ったま

まの私を見て、どうして即座にサイズが判る？

「それでいいのか」

とマイケルさんが聞く。まあ、男の人は女の人の服になんか興味ないもんね。私はそれには答えず、

「うーん……」

と言いながらプライスタグを探す。見た目からして、私が普段バーゲンのワゴンで漁っているような奴の3倍？ 5倍？？ もっとかなと思いつつ。

だけど、残念ながらタグは外してあるのか、はたまた最初からこんなとくに用意するものにはついていないのか見つからなかった。しつこくプライスカードを探し続ける私に、

「決まらないなら、両方買えばいい」

マイケルさんはこともなげにそう言った。折角私はどちらが安いかで品定めをしてるっていうのに、あなたはその努力をムダにするって言うんですか？

大体、私はちゃんと着物を着ているんです。新たに洋服を買ってもらう必要性を感じません。しかも、こんなフランスだかイタリアだかわからない高級ブランドの服、買ってもらう謂われはありません。

だけど、私は声高にそのことを言うことができなかった。ここにいるマイケルさんは、何だかさつきとは別人かと思うくらいに顔つきまで違っているし、なんだかんだと言ってもここまで来てしまった手前、私がギャーギャー騒いだらマイケルさんに恥をかかせてしまうような気がしたからだ。

結局、

「お嬢様はお色が白いですから、この方がお顔映りがよろしいか」という和光さんのトークに押し負けて、エンジ色に決定。男性陣にはしばしご退出願って、私はそのパンツスーツに着替えた。

ただ、その時、ぜんぜんそれまで話題にもしていなかったファンデーション（ブラ・キャミソール）までコーディネートして差し出

されたのには、驚きを通り越して寒気すら感じた。さすがデパートの外商員、怖そるべし。

もちろん、そのサイズがブラに至るまでジャストフィットだったのは言うまでもない。

キ、キャラ違うんですけど……（後書き）

病院を出た途端、人が変わってしまったような武君。

さて、その真意は？

実は国際級の犯罪者？

「ありがとうございます！！」

最初に應對してくれた人はもちろん、和光さん、中村さん、果ては呉服部門の人まで深々とお辞儀する中、マイケルさんの車は駐車を滑るように走り出した。そして、そこを出てしばらく一般道を走った後、はぁーっと大きく息を吐いた。そして、

「素敵だ。本当によく似合っている」

と目を細めながら言うてから、ぷつと吹き出した。それ見て、私は、
「ウソつき」

と言うてマイケルさんを睨んだ。

どうせ本当は全然似合っていないって思ってるんでしょ。解つてますよ、チビ（それでも同世代の中では、そんなに低くないのよ）で童顔の私には、こんな大人のパンツスーツなんて似合いませんよーだ。するとマイケルさんは慌てて、

「ウソじゃないさ。もちろん、今まで着てた着物も本当によく似合っていたけど、何て言うのかな……落ち着きすぎてるって言うのかな」

と取り繕う。でも、それって暗に私が童顔だつてことを肯定しただけ。フオローに全然なつてません！ 私の表情が硬いまま返事もしないので、マイケルさんは、

「ごめんごめん、笑ったちゃったのは更紗ちゃんのせいじゃないから。僕、実はあそこ苦手なんだよね、ほんとデパートって疲れる。」

でも、女性用の服を売つてるとこなんて他には知らないしさ」
と言いつつ始める。

「苦手なら行かなきゃよかったじゃないですか。婦人服を売つてるところなんて、デパートじゃなくても、それこそ上野にだって、浅草にだって、巣鴨にだってありますよ」

それにデパートにだって、あんな外商みたいなどこじゃなきゃ、も

つと買いやすいですよ。でも、マイケルさんは、私の台詞の若干の棘にも全く気づかず、

「そりやあるだろうけど、僕、女性の服なんて買ったことないもんでも、更紗ちゃんってすごいよね。あの着物、収納用の紙だけもらって、たつたと自分で畳んじやうし」

と、暢気に私のヨイシヨを始める。

たとうがみ
「畳紙です。畳む紙って書いて畳紙」

マイケルさんみたく、半分イギリスの血は入ってませんからね。100% ネイティブ日本人だし、呉服屋の孫娘をなめんなよ、小学生の時の浴衣から畳み方はママからしごかれてるんだから。

『きちんと畳んでおかないと、着物の価値が下がる』

って、そりやもう煩いのよ。マイケルさんは、それを聞くと、

「へえ、畳紙っていうの。畳う紙、で畳紙。たとうしとは言わない。あ、そうか、『し』って音読みだから……」

あ、じゃあ、こんな展開なんか面白いよね」

と、ぶつぶつと訳の分からないことを言い出し、

「ねえ、更紗ちゃんこれからカラオケ行かない？ ネットカフェのペアシートじゃ、更紗ちゃんはやることないだろうし、変にパソ使うと足つくかもしれないもんね」

と私をカラオケに誘った。そう言えば、マイケルさんは何かから逃げてたんだっけ。

でも、ネットカフェのパソで足がつくって何。実は国際級の犯罪者か。あ、だからデパートで普通に買い物できなかった？ いやいや、国際級の犯罪者は外商のコネとか持ってないでしょ。

私がそれに返事しないと、しばらくしてマイケルさんはある有名なカラオケボックスのチェーン店に車を停めてダッシュボードを開けると、

「更紗ちゃん、これ持ってきてくれる？」

と携帯ゲーム機のようなもの（だけど、ケースがそれっぽくなくかつた）を取り出して私の膝に乗せた。そして、もうそれがお決まり事

のように私をお姫様だっこすると、そのカラオケボックスの中に入
っていった。

実は国際級の犯罪者？（後書き）

武君……うん、年齢詐称という意味では犯罪かもですが、国際級ではありません。

ちなみに彼が更紗ちゃんに渡したのは、私も使っている『アレ』です。

不思議なカラオケボックスの使い方

マイケルさんはとりあえず私をその辺の待合い用のいすに座らせ、手続きをした。ちゃんとカードを出しているところを見ると、ここ（あるいは系列店）の常連らしい。確かに、声は高めだけど、悪くはない。だったら歌うのは……洋楽なのだろうか。だとしたら、私はやっぱり退屈で寝てしまいそうだ。

それで案内されたのは、入り口手前から三つ目のごく普通の部屋。
「VIPルームじゃないんですね」
と言う私に、

「VIPルームが良かった？ 二人ならここだって充分広いし、あつちのソファは柔らかいから、足、きついかもしれないよ」
と言うマイケルさん。さりげなく足を気遣ってくれるのは嬉しかったけど、VIPルーム利用したこと、やっぱりあるんかいっ！ と、関西のお笑い芸人さんみたいなツツコミを心の中に入れる。

マイケルさんは、私からさっきの携帯ゲームもどきを受け取ると、
「更紗ちゃん、何でも良いから歌って。あ、おながが空いてるんだったら、好きなもの注文してくれて良いよ。僕用にカフェオレも注文してくれると嬉しいな」

と言って、携帯ゲームもどきのケースを開く。中身は、キーボードが折りたたみになっている極小サイズの、パソコンだ。マイケルさんは起動するとすぐ、

「これ、フラアさんの回だ」

と満面の笑みで訳の解らないことをつぶやいて一心不乱にパソコンのキーをたたき始める。私はリモコンでとりあえずマイケルさんのカフェオレと、自分の分のミルクティーを注文するが、そこで動きが止まる、何を歌っていいのかわからない。それを見て、

「あれ、更紗ちゃん歌わないの？ カラオケしない人だったのかな」

だったら、ネツカフェとあまり変わらなかったかなと、マイケルさんが申し訳なさそうに言う。

「い、いえ。そんなことないですよ」

むしろ、学生時代の女友達とは今でもよく行くほうだ。ただ、今はもう大抵子持ちになって、子連れでくる彼女らとは……いやそうじやなくても、昔から歌うのはコアなアニソン。とてもマイケルさんが知ってるとは思えない。私がいもじしていると、マイケルさんは、

「いつも歌ってる曲でいいんだよ。普段はさ、一人でそのまま流してBGM代わりにして書くんだけどさ、折角歌える人がいてくれるんだもの。僕、更紗ちゃんの歌、聞いてみたいな」

小首を傾げてさらっとんでもないお願いをする。仕事の書類だか何だか知らないですけど、マイケルさん、会員証まで作ってそんな寂しい使い方してるんですか？ それに頼むから、その破壊力満点の笑顔は止めなさい、破壊的な笑顔は……って、一体マイケルさんに何を破壊されるんだ？ 私は、

「あ、いえ、その……」

と、意味のない言葉を繰り返すしかなかった。すると、マイケルさんは（自分がそのハードルを上げてるとはついぞ気づかず）軽くため息をはくと、

「ま、いつか。じゃあ僕が好きな曲をBGMで何曲か入れとくから、その間に決めとして」

と言って、選曲用のタッチパネルをとって、IDとパスワードを入れた。BGMで歌っていないとか言うけど、相当使い慣れているぞ、こいつ。

そして、私は彼が入力を終えて表示された曲名を見てまたびつくり。

「えっ、『月夜の伝説』……」

思わず曲名を口に出してしまったほどだ。そ、それって、もしかして、いや、もしかなくてもあの大ヒットアニメ、「ビューティー

戦士ムーンライトレディ」の。しかも、第二作目の劇場版エンディングテーマじゃないの！　どこからこんなマニアックな選曲が。…いや、私も大好きで絶対に一回は歌う曲だったりするんだけどね。よもや、天使顔のハーフ男性から出てくるラインナップとは思わないじゃない。

「更紗ちゃん、知ってるのこの曲！　じゃあ、歌って歌って！　やった、この曲歌っているの聞くのは、CD以外では初めてだよ！！」なお悪いことには、マイケルさんの耳は私が曲名に反応したことをすっかり捉えていて、喜々として私に歌うことを強請る。その様はまるで幼稚園児が先生に絵本を読めと言ってるかのよう。どうしようかな……

ええい、歌っちゃえ！　もう、足挫いた時点で、一番格好悪いとこ見せちゃってるんだもん。それに、この曲なら歌詞のテロップを見なくても歌えるし。私はマイクをひつつかんで、早速流れてきたスローバラードを歌った。

歌い終わった後、マイケルさんはすごい勢いで拍手をした。

「更紗ちゃん、上手いよ。CDみたいだった。僕、もっと聞きたいな」

と真っ赤な顔でまくし立てた言葉も、齒の浮くような台詞なのに、マイケルさんが子犬のような瞳で言うので悪い気はしない。何を歌おうかと思っていると、

「ねえねえ、じゃあ、この曲は知ってる？」

と、マイケルさんがまた履歴から一曲入れた。それは『GOLD』と言う曲で、某公共放送の魔法少女アニメの、3番目のオープニングテーマだ。私は返事の代わりに、マイクを握った。

それから2曲ほどはマイケルさんが入れたけど、後は私がタッチパネルを取り上げて自分で入れて歌いまくった。マイケルさんは、「うわっ、『雲へ……』！　それ、『マリオの白い雲』の主題歌だよ。更紗ちゃんもマニアックだね。『子供名作劇場』で、唯一原

作を読んだことがなかったし、設定何気に暗かったじゃん」

など、その一曲一曲すべてに反応した。けど、どっちがマニアックなのよ、その言葉そのまま返すよ。（作者注：五十歩百歩だと思えますけどね）

マイケルさんは、私の歌にそうやってコメントを差し挟みながら、滑らかにキーボードを操っていく。

そして……

「終わったあゝ、更紗ちゃんありがとう。助かった。おかげでものすごくさくさくつと書けたよ」

と言いながらマイケルさんが大きく伸びをしたのは、三杯目の飲み物のウーロン茶も飲み終わって、そろそろ本格的に声が枯れるかもという2時間半後のことだった。

マイケルさんは軽く欠伸をして、プチサイズのパソコンの電源スイッチに手をかける。私は何となく覗き込んだディスプレイに現れた終了画面に目を瞠った。

「じ、自動戦士バンタム!？」

それは、私でも知っている往年のアニメ、「自動戦士バンタム」の一コマだった。その後、設定資料めいたモノが一瞬映って電源が切れる。徐にマイケルさんがパソコンのふたを閉めると、そこには「バンタム」のロゴがしっかりと入っていた。ひえーっ、「バンタム」仕様のパソコンなんて始めて見た。

「バンタム知ってるの？ オンエアされた頃はまだ生まれてなかったんじゃない」

すると、マイケルさんが驚いてそう聞く。

「リアルでは見てないですけど、何度も再放送してますから」

そうよ、こんな国民的なアニメ、知らない方がおかしい。（作者注：それは更紗ちゃんもアニオタだからだと思いますけど）

「僕、ロボットアニメとか基本的にあまり好きじゃないんだけど、これは別。ものすごく人間がちゃんとかかれてたから」

マイケルさんは照れながらそう言った。そして、少し間を空けて、

「……大好きなんだ」

と言った。私の胸はそれだけで跳ね上がった。絶対にそれは、私じやなくて「バンタム」のことなんだけれど。

今日のお見合い……マイケルさんだったら良かったのにな。そして、私もあんな風に逃げ出したりしなかったのに。

「ま、ここにいても何だし、食事に行こうか。更紗ちゃん飲み物ばっかで何も食べてないから」

と言うマイケルさんに従って、と言うか依然歩かせてもらえない私にはそこに選択肢はなく、マイケルさんは私にまた「バンタム」パソコンを渡すと、私をお姫様だっこしてカラオケルームを出た。

だけど、その足がエントランスにたどり着く直前で止まる。

「あーあ、見つかつちゃった……」

と小声で囁くように言うマイケルさんの目線の先には、彼のことを睨む、年は25？ 30？ 判らないけど、彼よりまだ背の高いイケメン男性がいた。私はそのイケメン男性の、

「親父、そう毎回毎回逃げてんじゃないやねえ。こっちは折角のたまの休みなんだぞ」

という台詞に固まった。

あ……こんなに大きなお子さんがいるんだ。

そりゃそうだよな。こんなに素敵な人なんだから……

不思議なカラオケボックスの使い方（後書き）

ここでのアニメタイトルと、曲名はそのまま出せないなので伏せ字にせず、実在のモノをもじっております。

さて、皆さんは元のアニメが何だか分かりますか？（そんなもんどうでも良いって？）

でも、「自動戦士バンタム」って弱そう

ちなみに私が持っている『アレ』もガ○ダム仕様です。この原稿も『ソレ』で書きました。（ははは）

マイケルさんの家族

逃げ回っていたマイケルさんを捜していたのは、彼の息子さんだった。マイケルさんはプリプリ怒っている息子さんに、

「だって、じつとしてても展開が浮かばなかったんだもん」

と、小さな子のように、口をとがらせて答える。息子さんは、

「おまけに他人様怪我させてあちこち連れ歩くんざ、どういう了見なんだよ。すいません、義父^{ちち}がご迷惑をおかけしまして。あ、俺はこのボンクラ親父の息子で、幸太郎と申します」

と、マイケルさんにだっこされたままの私にそう言っただけ。

「違うよ、幸太郎君」

「何が違うよ」

「違います！ マイケルさんは私が足を挫いて動けなくなっているのを助けてくださって、親切に病院に連れて行ってくださっただけです」

マイケルさんに怪我をさせられたなんてとんでもない！ これは、

正真正銘私が一人で転んだんだもん、情けないけど。

「ま、病院は良いとして、そのあとデパートで服買って、ここに来る必要があるか？ おかげで、あのデパートならここだって渡りを付けられたんだけどさ」

「あ、デパートでバレたんだ。しまった、なら更紗ちゃんの言うように巣鴨に行けば良かった」

「へっ、巣鴨？」

デパートで足がついたと聞いて、マイケルさんはそう言って、舌打ちする。でも、巣鴨と言うと幸太郎さんは驚いた顔をした。

いや、私は別に巣鴨に行きたかった訳じゃない。もっと庶民的なところでお買い物できないかって言っただけだ。

巣鴨に素敵なお店がまったくないとは言わない。だけど、ジモティーじゃない私やマイケルさんにそれを見つけれられるかどうかかわ

らないじゃない。

「あそこから一番近いなじみのボックスしたら、ここだろ？ 女連れならどつかにしけこんだのかもと思ったけど、店長から連れの女性が怪我してるって聞いてたから、親父の性格じゃそりやないなっと思っただけ」

続いて幸太郎さんはマイケルさんをここで見つけた根拠を説明する。あの人、偉そうなと思ってたけど、やっぱり店長だったのね。それにしてもしけこむって……か、顔が熱い。

「お持ち帰りだなんて、僕はそんなことしないよ。幸太郎君とは違うんだから」

マイケルさんもムキになって反論する。だけど、

「ひつでえ、人が血眼になって探してたってのにその言種はねえだろ。んなこと言っただったら、奏禁止令発動するぞ」

マイケルさんは幸太郎さんの言う、「奏禁止令」を聞くとぴしっと固まってしまった。そして、

「えーっ、かなちゃん禁止令は勘弁して。かなちゃんあのかわいほっぺをぶにぶにするのが今の僕の生き甲斐なのに。はい、ごめんなさい、僕が悪かったです」

と、ペコペコ謝りだす。それを見た幸太郎さんは

「解りや、良い。解りや」

と、したり顔でそう言って笑った。

だけど、そんな微笑ましい親子（ちよつと立場が逆転してる感はないんだけど）の会話に、私の心は冷えていった。

会話の内容から察するに、幸太郎さんの言う「奏ちゃん」は彼のお子さん。つまり、マイケルさんにはお孫さんにあたるのだろう。

そして極めつけに、

「なあ、これからしばらくためないでくれよな。来月は結婚式なんだぜ。父親不在の結婚式なんてしやれになんねえ。」

それにしても、女もってどうしてああ、結婚式でもりあがるかねえ。英雄や奏の服にまで大騒ぎだしさ、お袋なんて、当日の薫の支

度ができないってぶーたれてやんの。新郎の母親が新婦の支度ができなくてえの」

と、幸太郎さんの口から、彼の母親（つまりマイケルさんの奥さん）の話が出てきて、

「そりゃ鮎さんはプロだからね。櫟原くめはらが絡ひんでなきゃ、もう少し彼女の自由にさせてあげるんだろうけど」

マイケルさんは済まなそうに幸太郎さんにそう返す。その口振りでマイケルさんが奥さんのことを愛されているのがしつかりわかってしまう。幸せな幸せな家族の情景。そこに私が入る隙は一ミリもない。

そうだよね……一人寂しくカラオケをBGM代わりにしながら仕事してるからと言っても、だからってそれが独身の証明にはならないのだから。

……って、私何を期待していたんだろう。マイケルさんは今日会ったばかりの人、名前以外お互い何も知らないのに。

マイケルさんの家族（後書き）

幸太郎登場で、更紗ちゃんは一気に誤解の嵐。一気に屋上まで上つてしまいそんな勢いです。

マイケルさんの仕事

「つと、こんなとこでムダ話してる間にちゃっちゃと書いてもらわなきゃな。えーつと……ところであなた、何てお名前でしたっけ」
ちよつと脱線しかかっていた話を元に戻すように、軽くため息をはいて、幸太郎さんがこう言った。

「月島……月島更紗です」

やだ、幸太郎さんにだけ挨拶させといて、自己紹介がまだだったわ。
「じゃあ、月島さん。まだお時間大丈夫ですか？ 大丈夫だったら、俺の方の車に乗って欲しいんですが、親父の人質として」

人質って、何？ その物騒な言い方。さっきから幸太郎さんが『書け、書け』と言うところを見ると、マイケルさんは作家さんか何かなのかな。

「私は……帰ります。家族が心配するんで」

それに、今日あったばかりの私になんて、人質効果なんてありませんよ。

「ねえ、更紗ちゃん、逃げてるって言ったよね。家に帰って大丈夫なの？」

そしたら、マイケルさんが、そう言っただけ私を心配してくれた。

「ええ、マ……母とケンカしただけですから」

そう言いながらママの顔を思い浮かべる。うう、怒ってんだろうなママ。帰りたくないと言えは帰りたくないよお。でも、ママが騙してお見合いなんかするのが悪いんだからね。

「えっ、お母様とケンカしたけだったの？ じゃあ、急に更紗ちゃんが消えて、お母様心配してるかな。ホントいきなり連れ出しちゃってごめん、元のホテルまで送るよ」

でも、私がママとケンカしたただけだと聞くと、マイケルさんは蒼くなつて、土下座しそうな勢いで謝る。マイケルさんが悪いんじゃないよ。逃げたいって言ったのは私だもの。

「そうだよ、バカ親父。下手すりゃ誘拐だぞ。心配するな、月島さんは俺が送っていく。だから、親父はさっさと続きを書く!」

「ヤダ! 更紗ちゃんは僕が送って行く。更紗ちゃんのお母様に僕がちゃんと謝らなきゃ」

「何だだこねてんだよ、会社俺に投げてまでやりたかった仕事だろっ!」

私を送ると譲らないマイケルさんに、幸太郎さんはぴしっとそう言った。それにしても会社を投げてって……マイケルさんやっぱ社長さんだったんだ。それも結構大きい会社じゃないだろうか。だったらあの店長の態度も解る。

「ちよつと待つてよ。原稿ならちゃんとできてるよ。さっき、ここで書き終えたから。」

更紗ちゃん、幸太郎君にそのバンタム渡して」

私はそう言われてあわててバンタムを幸太郎さんに渡した。私は行きと同じように既に待合い用の椅子に座っていたんだけど、バンタムは握ったままだった。幸太郎さんはそれを受け取るとホッとした表情になって、

「それを先に言えつて。で、どうすりゃいい?」
とマイケルさんに聞いた。

「マイクロSDだとどっか行っちゃいやしいし、何が入ってるか書きにくいんで、普段はUSBメモリーに焼きなおして渡してるんだけど……」

とUSBメモリーをポケットから取り出す。

「さっき書いたからまだ、最終話は入れてないんだ」

「最終話を一旦ドキュメントにぶっ込んで、ここに落としいいんだろ?」

「うん、でもパソコン持つて歩いてないよ」

「俺の車に乗ってるよ。OKわかった。んじゃ、親父は親御さんに搜索願いを出されない内に早く行ってこい」

すべての段取りを聞き終わると、幸太郎さんはそう言って、親指を

前に立てて笑った。

「うん、ありがとう。じゃあ、お願いね」

「じゃあ月島さん。俺はこれで。親父を頼みます」

幸太郎さんはそう言っていると、感涙もので抱きつかんばかりのマイケルさんをあつさり振り払って、とつとカラオケボックスを出て行った。

でも、幸太郎さんが最後に言った『頼みます』ってなんだろう。

幸太郎さんみたいな立派な息子さんもいて、（たぶん）すてきな奥さんもいるのに、何を私に『頼む』必要があるの？

マイケルさんの仕事（後書き）

はい、武君の仕事がバレました。だけど、家族のことはまだ絶賛誤解中。

ホントは月島家まで着く予定でしたが、時間切れ（リアルの）で次回に続く……

傷付いた瞳

「じゃあ、送っていくよ。あのホテルでいい？」

幸太郎さんの『頼みます』発言に、戸惑いMAXになっていた間に、マイケルさんはカラオケの支払いを終え、私を再び抱き上げた。「いえ、もうさすがにもうあそこにはいないと思います」

それに対して私は首を振ってそう答えた。ホテルのラウンジになんてそう長い時間いられる訳がない。

「とにかく、どこにいるか電話してみたら？」

と言ってくれるマイケルさんに、私は、

「今日は携帯を置いてきたんです」と答えた。

実は着物用のバッグは小さいし、旦那持ち子供持ちの友達たちが休みの日に連絡なんてしてくることなんてないから、携帯置いてきたのよね。

「じゃあ、僕のでかければいいよ。きっと心配されてるから。それで怪我をしたことをまず話せば、少しは怒られるのもマシかもしれない」

いきなり現れるよりずっといいよ、とマイケルさん。

「でも、携帯はメモリーに頼ってるから番号なんて覚えてないです」

「じゃあ、自宅にかけて。そこにいらっしゃらなかったらホテルに戻ろう」

それで私は、おそろおそろ自宅に電話した。そしたら、いつもはなかなかでないのに、電話はたった3回でつながった。

「はい、月島です」

ママの声が少しうわずっている。きっと知らない電話番号だからだ。いつもなら知らない（しかも携帯の）番号の電話には、ママは怖がって一回目から出ないのだ。

「……私……」

「更紗ちゃん？ 更紗ちゃんなの！？ あなた、無事なの。どこにいるの」

ママは私だと判ると、矢継ぎ早にそう畳みかけた。その口調は怒っていない。心底心配してるって感じた。

「私ね、ホテルで足挫いちゃって」

「ホテル足を挫いた？ でも、ママホテル中探したのよ」

「うん、それで偶然通りかかった友達が、病院に連れっててくれたの」

とても見えず知らずの人とは言えなかった。

「じゃあ、今は病院？ どこなの、正巳^{まさみ}が来てるから迎えに行かせるわ」

げっ、正巳が来てるって？ 正巳というのは私の二つ下の弟で、一年半前、姉の私より先に結婚した。

それに、あいつは絶対に私を姉だと思ってない。いつも『更紗』って呼び捨てだし。

「ううん、その人がついでに家まで送ってくださるって。もう、車にも乗ってるの」

ああ、マイケルさんの車で送ってもらえて良かった。じゃなきゃ、今日も私を見つけた途端、指さしてさんざんにバカにされるに決まってるわ。

「そう、ならここで待ってればいいのね。もう、本当にドジなんだから」

そう言うママの声ちょっと涙声で、私はがんがんな怒られるよりぐっときちやった。

「今日は、……ごめんね。あと、大変だったでしょ」

おかげで、素直にママに謝れた。そしたらママは、

「良いわよ。ママが更紗ちゃんに内緒であんなお話進めたんだし、あなたが怒るの無理ないわ。」

それに渋井さん、バツイチだったのよ。子供までいるって言うんだ

もの。きっとバレなきゃずっと隠し通すつもりだったんだわ。

騙されたと思つて、ママもテーブル叩いて帰ってきちゃったわよ。ホント、更紗ちゃんが逃げ出してくれて正解」

と、あの後の顛末を語りだす。

えっ、あの人バツイチだったの？ ふーん。私はそれを聞かされてもべつに衝撃は受けなかった。まああの人なら奥さんも逃げたすだろうなあなんて、妙に納得しちゃったし。おかげで、怒られずに済んだのだから、むしろラッキーかもしれないと思つたくらいだ。

「混んでなければあと15分くらいでつくから」

私はそう言つて電話をきつた。

「どう、お母様怒つてなかった？」

「ええ、とつても心配してました。電話ありがとうございます。かけてよかったです」

「だろ？」

そう言いながらマイケルさんは、今スマホに入れた電話番号を今度はナビに入れて我が家を検索する。出てきたデータを見てマイケルさんは、

「良かった、この辺なら分かるよ。着いたら声もかけないで病院に連れていったこと、一緒に謝つてあげるね」

と言つた。

「こちらの方がお世話になったのに、そこまでしてもらつたら悪いです」

結局、病院から服にカラオケ代まで全部出してもらつちやつたもんね。すると、マイケルさんは、

「だって、僕また一緒にカラオケ行つてほしいから。更紗ちゃんのお母様に嫌われたらもう行くなつていわれちゃうでしょ。じゃあ、これ僕の携帯番号。家に帰ったら、更紗ちゃんの携帯から電話して僕が数字で入力するとどうしてか番号間違っちゃうんだよね。だから、更紗ちゃんがかけてくれたらそれ、登録するから」

ニコニコとそう言った。でも小学生じゃあるまいし、ママに言われたからってカラオケに行けなくなる歳でもないんですけど。

そうね、お子さんはもちろん、お孫さんまでいるマイケルさんにとつては、私なんて小さな子供とそんなに変わらないのかもしれない。だから奥さんがいても簡単に誘えるんだ。

急に黙ってしまった私に、

「どうしたの、長い時間振り回して足痛くなっちゃった？」

と心配げにのぞき込むマイケルさん。私は黙って頭を振った。

妙な沈黙が流れる中、マイケルさんの車はウチの家にとどり着いた。あ、家の前に誰がいる。玄関先に仁王立ちしているのは……うわっ、正巳だ。なんでママじゃないのよ。

正巳は、車から降りると当然のように助手席を開けて私を抱き上げたマイケルさんを睨み上げると、

「あんた誰？ 一体、更紗のなんなのさ」

言って、私を強引にマイケルさんから取り上げた。

「ま、正巳！ 何すんのよ！！」

正巳危ないよ！ 私、物じゃないんだよ、生身の人間なんだからね。落とされたらさらに怪我するじゃないのさ！！ マイケルさんは、

いちらはたける

「櫛原武と申します。今日はお声もかけずに更紗さんを連れ回したりして、すいませんでした」

その言葉にそう言って、正巳に深々と頭を下げた。その時、

「まあまあ、今日はどうもありがとうございます。どうぞ上がってお茶でも飲んでください」

遅ればせながらママが慌てて走り込んできた。ママを見るとマイケルさんは、

「いえ、車ですし、これから仕事先に顔を出さないといけませんので今日はこれで失礼します」

と言うと、また深々と頭を下げて助手席のドアを閉めた。そして、

車に乗る直前、

「更紗ちゃん、今日はありがとう。ホントに楽しかったよ。

あ、それからさっき渡したメモだけど、やっぱり捨てておいてくれる？ それじゃあ」

と言ったのだが、その表情は泣きそうなとても傷ついた顔をしていた。さっき渡したメモって電話番号のことだね。どうしていきなり捨ててって……ビックリして返す言葉も出せないまま、マイケルさんの車はあっという間に走り去ってしまっていた。

傷付いた瞳（後書き）

更紗ちゃんに続いて、正巳君も武君も誤解の嵐。誤解スパイラルになっております。

次回、更に思ってもいなかったことが更紗ちゃんを襲います。

男が女に服を贈る理由（前書き）

ああつ、切れない……

男が女に服を贈る理由

「更紗、重っ。いつまでも抱きついてないで下りろよ」

「言われなくても、下りるわよ。あ、ママ手を貸して」

マイケルさんが走り去ったとたんそう言う正巳を睨みながら、私はママに手を貸してもらってやっと地に足をつけ、二人に支えながら家に入った。とりあえず一番座りやすい椅子のあるダイニング向かいながら、

「正巳、マイケルさんに何であんな失礼なこと言うのよ」

と正巳に文句を言う。あんたは私のなんだって言うんだ、弟でしよ
うが。いまさらあんたに敬ってもらおうなんて思っていないけど、せめて人のことを持ち物みたいに扱うなって言うの。

「更紗こそどういいうつもりなんだよ。あんなやつがいるんだったら
なんて見合いなんてしたんだ」

そしたら正巳はそう反論した。

「それはママが勝手ににセツティングしたんだから。私のせいじゃないわよ。それに、マイケルさんとはそんな関係じゃないわ」

それに対して、私はむくれながらそう答え、

「そうなのよね、更紗ちゃんに内緒でお話進めちゃったのよ」

とママがちゃんとフォローを入れてくれたけど、それでも正巳は納得しない。

「マイケル？俺には武^{たける}って言ってたぞ」

あ、そうか。マイケルさんは日本名を名乗ったんだっけ。

「マイケルさんのママはイギリス人だもん。英名も持ってたの」

私はそう説明する。知ってるのはとりあえずそれだけだけど、それだけでもマイケルさんと私が以前から知り合いっぱく聞こえるから不思議。それを聞いた正巳は、

「へえへえそうですか。けどな、あいつさっき着いたとき、更紗を待ってた俺をものすごい眼でにらんでたぞ。あれは完全に飢えた雄

の眼だね。更紗は天然だから気づいてないだけさ」

と面倒臭そうに言う。でも、飢えた雄の目って、何。それはあなたの目が腐ってんでしようが。

「そんなことないって」

そうよ、マイケルさんにはちゃんとすてきな家族がいるもん、悲しいけど。その時、改めて私を見たママがいきなり素っ頓狂な声を上げた。

「あら、更紗ちゃん、着物はどうしたの？」

「えっ、着物？ あ、マイケルさんの車の中だ。病院の後、着替えたの。足が不自由だと着物じゃつらいだろうって……」

それを聞いた正巳の目が怪しく光る。

「あいつが買ったのか」

と言われて、ちよつと悪寒が走った。

「う、うん……」

私は、ぎくしゃくつと頷く。

「ほらみる、あいつ更紗落とす気満々じゃん」

それを聞くと、正巳はにやつと笑ってそう言った。

「どうしてよ」

「男が女に服を贈るのは脱がすのが目的だってのは、心理学では常識だろ」

「そんなの統計上の問題でしょ。すべての人に当てはまるって訳じゃないわ」

「いや、俺なら間違いなくそれ目的だぞ。それに、この服どうみてもブランドの一点物じゃないか」

う、鋭い。まさしくブランドの一点物ではあるんだけどね。男のあんたが、なんでそれを知ってんのよ。

そうか、あんたは会社のかわいい部下の退路を用意周到に絶って困い込むようにゲットした腹黒上司だもんね。それくらいはリサーチしてあるってことか。けど、それがすべての男の常識だとは思わないだね。マイケルさんはお店を知らないからの外商買いなんだか

ら。

「ねえ、更紗ちゃんそれで着物はちゃんと畳んであるの?」

そこでママが私たちの会話にそう割って入る。

「デパートでちゃんと畳紙もらって、畳んであるわよ」

私がそう言つとママは、

「それなら良いわ」

とホツと胸をなで下ろす。どうしても良いけど、拘るところ???

「ったく、更紗の貞操の危機だつてのに、何をのんきなことを……」

と正巳も頭を抱えている。

「貞操の危機も何も、それでまとまってくれるのなら、いいんじゃない。相手の男性が救世主に見えるってもんだわ」

それに対して、ママはしゃらつとそう言った。天使顔だけに救世主
つて……何気に酷くない?

「ま、とにかくご飯にしましょ。更紗ちゃん、マイケルさんには連絡着くんでしょ。着物のこと、食べたら電話しておきなさいよ。正巳くんも食べるでしょ?」

と言つと、正巳は、

「いや、俺は美奈子がちゃんと用意してるだろうし帰るよ。」

あー、一日ムダに振り回されたぜ」

と言つてとつと愛妻の待つ自宅へと帰っていった。おお、おお帰れ帰れ、幸せ者めが!

この後パパが仕事（パパの仕事はカレンダーに関係ないシフト制）から帰ってきた。ママはこのお見合いをパパにも言つてなかったらしく、（パパに言つたら絶対に反対するだろうから）パパには私がお出かけた先で怪我をしたことにした。たぶん、ことの顛末を正直に話せば、きっと正巳と同じかそれ以上の反応をするだろうから、私にとつてもその方が都合が良かったし。

そして、この日、この足で二階に上がっても下りるのが大変だろ

うということ、私はリビングのソファ―ベッドで寝ることになった。

夜中、慣れない空間で眠れない私は、マイケルさんの携帯番号を見つめながらため息をついていた。確かに着物は返してもらわなきゃいけないんだけど。でも、

『渡した紙、捨ててください』

という言葉と、あの傷付いた様な瞳を思い出すと、私はその夜、マイケルさんに電話をかける勇気はついぞ持てなかった。

……そしてその翌日……

「おい更紗、起きろ！」

私は朝6時、と叫ぶ正巳の電話に叩き起こされた。

「何なのよ、正巳」

「おまえ今、リビングだよな。今すぐテレビつけろ、4チャンネルだ」

まあ、準備に時間がかかるけど、今日は病院に行ってから出勤するつもりだったから、もう少し寝ているつもりだったのに。そう思いながらとりあえずママが枕元に置いてくれていたテレビのリモコンのボタンを押す。

私は、そこに映し出されたテレビのエンタメコーナーの話題に思わず息を呑んで固まった。

何故かと言うと、

『あのイケメン青木賞作家、市原健の熱愛発覚。怪我をした彼女を実家まで優しくエスコート』

という見出しの下、エンタメボードに、家の前で私をお姫様だっこしたマイケルさんの写真が掲載されたスポーツ紙が張り付けてあったからだ。

男が女に服を贈る理由（後書き）

更紗を襲つさらなる試練は最後の『ワイドショー』攻撃でした。

まあね、病院 デパート カラオケボックス 自宅と、結構派手に『イベント』ありましたからね、そりゃスポーツ紙に撮られてもしようがないでしょう。

武君も遅咲きですから、自分が有名人だという自覚がなかったりしますしね。

では、次回。

熱愛報道（前書き）

ああ、進まないっ

熱愛報道

私は目の前のテレビで自分が取り上げられていることが信じられなかった。確かにマイケルさんも幸太郎さんも原稿がどうか言っていたから、マイケルさんは作家なのだろうと思っではいたけど、青木賞を受賞しているような有名な作家さんだとは思っていなかったから。

私のことももう調べられているらしく、『お相手は36歳。着物の似合う一般女性』というテロップが差し込まれている。ま、ウチの前で撮られているんだから、近所に聞き込みすれば、生まれたときから住んでいる私の情報なんて簡単に手に入るだろうけれど。『ったく、芸能人なんだったらあんな派手なことすんじゃないってんだ』

と、まだ切つてなかった電話の向こう側で正巳が舌打ちする。私はそれに、

「正巳、それを言うなら文化人だよ。それに、普段テレビになんか出てないから、自分がそんな風に取り上げられると思ってなかったのよ」

と一応フォローを入れる。マイケルさんもたぶん、自分がこんな風にワイドショーを賑わせるとは思っていなかったに違いない。

そして、続々入ってくるマイケルさんの情報に、私は驚くばかりだった。

何より一番驚いたのはマイケルさんが独身で、一度も結婚したことがないと報道されていたことだった。じゃあ、幸太郎さんやアユさんの存在は？ 隠し子というには、幸太郎さんは堂々と親父呼ばわりしていた。

程なくして起きてきたパパがいつものように食事を済ませ、仕事にでかける。あ、ママは低血圧で朝起きられない人なので、夜の間には用意してあったものを勝手に食べている。いつもなら私がご飯ぐ

らいついであげるのだが、今日はそれができない。

そして、ごくふつうに出ていったパパが、10分ぐらいした頃、ムツとした声で携帯から電話をかけてきた。パパは、出たのが私だと判ると、

「お前、作家の市原健とつきあっているのか」
いち原たける

と言った。でも、パパがワイドショーを見たときにはもうそのコーナーじゃなかったのに、何でそれを知ってるの？

「今、家を出たとたんにリポーターって奴だと思うが、『いつ知り合ったのか』とか『結婚はあるのか』だとか、しつこく聞かれたぞ。それで、今駅について新聞を見た。」

昨日はママと出かけたんじゃないかったのか」

げっ、さっきのテロップを見る限り、私の素性もリポーターにはバレているのはわかっていたけど、まさか家まで張ってたのか。

「いえ……あの……その、ママとちゃんと出かけたよ。それでさ、怪我したときにね、動けなくなってる私をマ……その人が親切に病院に運んでくださったただけなんだ。ただ、それだけ。私も今テレビ見てビックリしたところ」

私はマイケルさんと言いそうになるのをすんでの所で堪えてそう説明する。アブナイアブナイ……今親しげにマイケルさんなんて呼んだら逆効果だ。

「そうか、それならいいが、パパは15も年上の男なんぞ、いくら賞を取った作家でも反対だぞ」

パパは案の定、不機嫌な口調でそう言っただけで電話を切った。

そうなのだ。42〜3歳だと思っていたマイケルさんの歳は、実際は51歳だという。

でも考えてみればそうだろう。私が思っていた40代前半だと、幸太郎さんの正確な歳はわかんないけど、とんでもなく若いときの子供になってしまうもの。

それにしても困った。家を張っているととなると迂闊に出られない。

たとえタクシーで病院に行くにしても、だからこそ目立ってしまう。顔にばかしが入ったって、近所の人にはきつとちょんばれだ。

仕方ない、今日は休もう。どうせ動かさない方が足のためにも良いのだから。ただ、何日も休めないだろうしな……

そんなことを考えていると、まだ電話が鳴った。ディスプレイを見ると……良かった、正巳だ。

「もしもし正巳？」

「更紗、家張られてるんだって？」

正巳も出勤途中なのだろう、がやがやと外の音が聞こえる。

「うん、そうみたい。どうして知ってんの？」

「父さんがこつちに電話してきた」

「パパが？　なんで」

パパ、私だけじゃなくて、正巳にも電話してたの？

「市原健つてどんな奴かって聞かれただけさ。んなこと聞かれたって俺も知らないって答えるしかないけどさ」

それを言うなら、正巳どこるか私だってそつだ。もちろん正巳には内緒だけど。

「けど、このままじゃさ、病院どこるか仕事にも行けないだろ。連絡先教えろ、俺がガツンと文句言つてやるから」

続けて正巳はそう言つたが、私は、

「いいよ、別に……」

と答えた。別にマイケルさんが悪い訳じゃないから。そしたら正巳が、

「更紗、着物のことは連絡したか？」
と聞いた。

「ううん……まだ」

「ちょうどいい、怪我が治つて更紗が行くとしても、あいつが持つてくるとしても騒ぎになるだろ。だからそれも含めて俺が電話して取りに行つてやるから。ほら」

確かにもう目をつけられているのだから、私たちのうちのどちらか

でも動けばまた撮られてしまう確率が高い。度々報道されれば、マイケルさんとアユさんの中にヒビを入れてしまいかもしれない。私が原因でそんなことになってほしくない。私は、

「解った、えつとね、090の……………」

と、マイケルさんのスマホの番号を正巳に告げた。

熱愛報道（後書き）

あーあ、更紗ちゃん正巳君に連絡投げちゃいました。自分で連絡すれば誤解は解けたかも知れないのにねえ。

てな訳で、彼らの誤解スパイラルはまだ続くのでした。

ただ、助けられただけの……

正巳との電話を切ってから今度は私の会社に電話を入れた。

私が勤めるのは、作業ロボットを作っている会社。作業ロボットという大手の企業が独自に作っているように思われるだろうが、実は割と小さな会社が手作業でということも多い。相手のニーズをいかに形にできるか。それは施設の規模ではなく、開発者の発想能力に負うところが多いからだ。

工業高校の機械科を出た私は、そんなオーダーメイドな物づくりに惚れ込んでこの会社に入った。

だけど、だからと言ってロボットアニメはあまり見ない。小さい頃はともかく、少し大きくなってからは特に。何故かというメインを張るロボットたちは結局がとこ兵器として扱われていることがほとんどだからだ。

ロボットは人を幸せにするものじゃなくっちゃ。誰かが不幸になるような使い方は『彼ら』とってもかわいそうだと思う。

そして、その台詞も実は社長吉田直也の受け売りだ。彼は私の遅ればせながらの初恋の相手。だけど、12歳も年上の社長に私が淡い思いを抱いたときには、既に奥様の由佳さんとの結婚が決まっていて、私はいきなり失恋してしまったのだけだ。

「はい、吉田工作所です」

由佳さんがハキハキと明るい声で電話に出た。

「あ、由佳さん、月島です」

それに引き替え私の声はどよんとしている。足が痛いせいもあるけど、それだけじゃない。正直どう言って休もうか悩んでいる。納期の差し迫った仕事があって、本当なら休んでいる暇などないのだ。

「あ、あのね……昨日、足怪我しちゃって……いま動けないんです。今日……休ませてもらえませんか」

続いて、びくびくとそう切り出した私に、

「足怪我して動けないって、入院しちゃったの？」

由佳さんは驚いてそう聞き返してきた。

「い、いえ入院はしてないんですけど。昨日日曜日だったでしょ、まだ松葉杖がないんですよ。こんな足じゃ運転できないですし、ウチの母は免許持ってなくて」

と、私が由佳さんに事情を説明していると、

「月島、怪我したって？」

電話の声が急に社長に変わって、

「月島、今すぐ着替えて出られるように準備しておけ」

社長がそう言った。

「へっ？」

「俺が迎えに行つてやる」

えっ、わざわざ？

「良いですよ。ミユートの納期もすぐでしょ？ 私にかまけてる間に動作確認しておいてください」

「だからだろうが。こいつは月島の女性的な発想のおかげでモノにした奴だ。月島が動作確認しないで、誰がやる」

確かにこの仕事は私が女としていつも疑問に思っていたことをふと口に出したことで一気に形になった『子』だ。

「でも……」

「お前、怪我したといってホントはサボりたいのか」

口ごもる私に社長がちよつと怒った様子でそう言う。

「違いますよお。ただ、家の前今……」

だけど、そこで私ははたと困った。マスコミが家に来てますとストリートに言つても、私は一般人。鼻で笑われそうだ。

「月島の家の前がどうだってんだ」

その時私は川崎ブルージョーンズの大ファンである社長が愛読しているスポーツ紙が今回熱愛報道を取り上げた「毎朝スポーツ」だということを思い出した。

「社長、今日のスポーツ新聞見てください」

「なんだ、藪から棒に」

「三面開いてください」

バサバサと耳元で新聞をめくる音がする。

「ん？ 釣りがどうかしたか。まさか、その下のエロい小説じゃないだろうな」

釣り？ ああ、社長本当に3面目を開いちゃったのか。しかもエロい小説って……そんなもん見せて何を説明するって言うんですか。

「違います！ 裏の方、芸能欄ですよ」

「おお、ならそれを早く言え。なんだ、Tetraの武道館コンサートか？ 違う？ ああ、青木賞作家の熱愛報道って奴か。それがなんだ」

「そのお姫様だっこされているのが私です」

「これが、月島？ 確かに言われれば似てないこともないな」

私は、怪我をして動けなくなっているところを助けられて家まで送り届けてもらったただけなのにスポーツ紙にとられたと、この写真の状況を掻い摘んで説明した。

「じゃあ、まだ表にリポーターがいるってんだな」

「はい」

「由佳、俺は月島を病院に連れていくから」

「外にはリポーターが張ってるんですよ」

それを聞いて私が慌ててそういうと、

「張ってるからってどうだってんだ。それは月島のせいじゃないだろ」

と、社長が言った。そりゃそうですけど。

「あっちも仕事だろうが、こっちも仕事だ。堂々と出てくりゃいいんだ。ただ、月島単独で行動するのは大変だろう。だから、今日は俺が行ってやる」

そう言われればそうだ。何も、私が逃げ隠れする必要はないのだ。私は本当に怪我したところを助けられたそれに過ぎないのだから。

私は少ししてからやってきた社長の車で家を出て病院に行き、松葉杖を借りて会社に出勤した。

病院に行っていた分、段取りがくるっていつもより遅くなったお昼休みにつけたテレビのワイドショーで、マイケルさんが緊急会見を行っていた。私との関係を取りざたされて、

「彼女が怪我をされたところを偶然通りかかり、車で来ていたので病院に連れて行って自宅まで送っただけ。恋人とかそういうものではないです」

マイケルさんは関係各所にファックスを送って済む内容を、みんなの前に出て拳を握りしめて力説していた。でも、

「本当に彼女とは何の関係もないんです。ですから、くれぐれも彼女の所には取材をしたりしないでください」

そう土下座せんばかりに頭を下げるマイケルさんの姿を見て、奥さんに誤解されて大変だったのかもしれないと思った私は、これで良かったと思いつつ何となくもやもやしていた。

その効果があつたのかどうかは知らないが、雨が降ってきたこともあり、帰りは後輩の庄司君が贈ってくれたのだが、行きにはいた報道陣がもう見あたらなくなっていた。

そして、帰宅後、正巳から

「俺がガツンと言ってやったから。なかなかまともな会見してやがったじゃん。これで更紗も安心だろ」

と、言われたけど、それを聞いても私のもやもやはとれなかった。

訪問者

そうして、翌日は全くいつも通り（怪我しているから全くとはいえないのかもしれないけど）の朝だった。でも、私にはそれがなんだか寂しかった。別に芸能人のように追いかけられたいわけじゃない。ただ、それが二度とマイケルさんと会えないんだなと改めて実感しただけだ。

「月島さん、今朝も芸能レポーターいたんですか？」

朝から無言で仕事を続ける私に、まだ見習い中の智くんがそう言った。

「ううん、どうして」

「だって、月島さんいつもなら誰が聞いてるわけでもないのに、作業工程を説明しながら、ニコニコして仕事してるから。」

それが今日はため息ばかりだし、なんか顔も変です」

「昨日櫛原さんが会見開いてくれたから、今朝は誰もいなかったよ」智くんの答えに、私はムリに笑顔を作って答えた。確かに、大好きな仕事だから社長にも『お前、作業してるときは気持ち悪いぐらい笑顔だな』と言われたこともあるし、段取りを口に出しながらやる方が作業効率上がるのよね。にしても、『顔が変』って……何気に酷い。

「お前な、先輩に言っただけで良いことと悪いことがあるだろ」

その言葉に庄司さんがさかさずツツコミをいれる。でも、智くんは、悪びれる様子もなく、

「じゃあ、顔が怖いって言えばいいんですか？」

と庄司さんに返している。さすが平成生まれと言っのか何というのか。

「お前な、機械いじるのより先に日本語もつと勉強しろ」
という庄司さんに智くんは

「へいへい」

と言いながら表の方に逃げて、ちよろつとドアから首だけ出している。その様子がまるで叱られた犬みたいで、私は声を出して笑ってしまった。庄司さんもそれを見て、

「しょうがねえなあ、あいつは。まあ、更紗ちゃんを笑顔にしたんだから、由としてやつか」

そう言つて苦笑している。

「あ、どうも」

そんな智くんがドアに手をかけたまま頭を下げて、

「社長、お客さんです」

と、大きな声で社長を呼んだ。でも、

「すいません、月島さんという方がここにお勤めだと思うんですが」という声が外から聞こえて、私を含めた作業場にいる全員の顔がこわばった。

「あんたマスコミの人？ だったら今すぐ帰んな！ こういうのをプライバシーの侵害って言うんだろ」

智くんも一旦は中へと導いた手を一杯に広げて私をガードしつつ、中の面々にそう尋ねる。その場にいた全員がその言葉に頷いた。

「違います。私は月島さんにこれをお届けに上がっただけですから」とすると、その人はそう返した。

「何だ？ それ」

智くんが胡散臭そうに荷物を見つめる。座っている私にはドアの外側にいるその人は全く見えない。でも、智くんの様子からして、宅配の業者さんではなさそうだ。

「一昨日、お預かりしたものですので、月島さんにお渡しいただければそれで」

続いてその人はそう言った。一昨日と言えばあのお見合いの日だ。まさか、マイケルさんが着物を返しに来た？ 智くんが受け取るのを戸惑っていると、その人はその荷物を智くんの鼻先ににゅつとつ

きでした。

「うへっ」

と智くんが後ずさりする。その勢いに任せて作業場に入ってきたのは……マイケルさんではなく、幸太郎さんだった。しかも、入ってきた幸太郎さんといきなり目が合ってしまった。

「幸太郎さん……」

「あ、月島さん。そこですか。昨日弟さんからお電話いただいて、取りに来られるってことでしたけど、何か双方に誤解があるみたいなんで、お話がてら私が伺いました。今お時間頂戴できますか」
幸太郎さんは、あのときとは打って変わってすごく丁寧な言葉遣いだった。そう言えば、幸太郎さんって、マイケルさんの後を継いで社長してるんだっけ。

「誤解……ですか？」

双方に誤解ということとは、私にもマイケルさん達にも誤解があるということだ。一体、何を誤解してると言うんだろっ。

「ええ、すいませんお仕事申し訳ありませんが、月島さんをしばらくお借りします」

幸太郎さんは肯きながらそう言うと、奥にいる社長の所まで行き、

「私、こういう者です」

と言って、社長に名刺を差し出した。すごい、ちゃんと社長のところに行っちゃった。庄司さんの方が年上に見えるから（実は社長の方が2つ上だけ）、初めてきた人はみんな庄司さんの所にいつちゃうのに。社長が幸太郎さんの名刺を読み上げる。

「株式会社くわんせい櫛原 代表取締役社長 櫛原幸太郎……ちょっと待て！

いちらはってことは、市原健の関係者か」

「はい、息子です」

社長に聞かれて、幸太郎さんは迷いもなくそう答えた。

「息子？ 確か、市原健は結婚してないんじゃないのか」

テレビ報道とは違くと、その発言に社長がそう言って幸太郎さんに食ってかかる。

「ええ、義父は独身です。実は義理仲なんですよ。会社を継ぐために、姪の婿である私が養子に入ったんです。義父は一度も結婚したことがありません」

それに対して、幸太郎さんは笑顔そうで答えた。えつ、幸太郎さんとマイケルさんって本当の親子じゃないの？ しかも、結婚したこともないって……　じゃあ、アユさんは？　私の頭の中は疑問符で一杯になった。

「やっぱりご存じなかったようですね。来て良かった」
その様子を見て、幸太郎さんはそう言って微笑んだ。

幸太郎さんから着物を受け取る。その時、幸太郎さんのポケットで携帯が鳴った。その着信音はなんと「月夜の伝説」！　幸太郎さんは、

「あ、親父ですよ。何なら直接本人から聞きます？」

と言いながら携帯を取り出した。だけど、

「はい、幸太郎。何だ薫？　お前何で親父の携帯で電話してんだよえつ？　親父が！　うん、ああ、ああ、泣くな。それで……どこに？　うん、解った。すぐ行く」

笑顔で電話を取った幸太郎さんの表情が見る見る曇っていく。そして、電話を切った幸太郎さんは、涙目でため息を吐くと、

「月島さん、一緒に来てくれませんか」

と言った。薫さんというのは今の話から考えると、幸太郎さんの奥様ではないだろうか。マイケルさんの携帯で奥様からの電話。すごくイヤな予感がする。続けて幸太郎さんは、

「親父が倒れました。原因はまだ聞いてませんが、危篤状態だそうです」

と震える声で絞り出すようにそう告げた。私は自分の予感が当たってしまったことに、目まいがした。

マイケルさんの生い立ち（前編）

危篤状態って、マイケルさんが死んじゃうかもしれないの？ 私
はキユツと胸が締め付けられたようになって、体から力が抜ける。
ああ、立ってなくて良かった。

「すいません、少しお話をさせて頂いただけのつもりでしたが、
月島さんをこのままお連れしてもよろしいでしょうか。もしかした
らしばらくかかるかもしれないですが」

幸太郎さんがそう言って社長に頭を下げる。でも、しばらくかかる
って……そうよね、症状が落ち着くまでは時間がかかるはずだわ。
決して幸太郎さんがお葬式まで想定しているわけじゃないよね。

「ああ、ウチの方は構いません」

それに対して社長はそう即答した。

「で、でもそれじゃミュートスの納期が」

「ミュートスのは月島がメイン張ってるだけであって、お前一人で
やってる訳じゃない」

そりゃそうだけど……

「あ、あの、差し出がましいようですが、ミュートスというと、ミ
ュートス工業のことですか？」

それを聞いた幸太郎さんが社長にそう聞く。

「ええ、ミュートス工業ですが、それが何か」

それに対して、社長がうなづきながらそう言っと、

「それでしたら、あちらの専務は私の舎弟（ゴホン）……いや、旧
知の仲ですので、少しくらいなら納期の融通はつけさせます、もと
いお願いできます」

幸太郎さんは、そう言って、ミュートスに口添えする（というには
ちよつと相応しくない単語が若干混じっていたような気もするけど）
とまで言ってくれた。それを聞いた社長は、

「いや、そこまでお気遣い頂かなくても」

と、幸太郎さんに言った後、私に向かって、

「月島、行つて来い。行かなければ、持ち直してもそうじゃなくてもきつと後悔するぞ。」

それにな、上の空での仕事は事故の元だ。ウチみたいな小さな会社は、ムダな金も人も置いとける余裕はないんだからな」

と言った。確かにそうかもしれない。今の私の精神状態ではきつと今日は仕事にならないだろう。行つて、その目でマイケルさんの無事を確認しなきゃ。

「は、はい……行つてきます」

私はそう言つて、深々と頭を下げる幸太郎さんに続いて会社を出た。

駐車場に着くと、幸太郎さんは黒のボックスタイプの車の助手席のドアを開けて、

「その足では乗りにくいかもしれませんが、後ろでもやはり同じだと思うので」

と言った。そう言われて後ろの座席を見ると、運転席の後ろにはチャイルドシートが装着されている。小さな布のおもちやも置かれていた。幸太郎さんは私を支えて車に乗せると、自分も乗り込んで走り出した。

途端に、カーオーディオから童謡が流れる。

「奏のCDが入れっぱなしだった」

幸太郎さんは慌ててボリウムをゼロにした。

「別に良いですよ」

「そうですか？」

「気分が和みます」

私がそう言つと、幸太郎さんはまたボリウムをさつきより少し落としたくらいにまで戻した。

「親父はね、小さい頃いじめられっこだったんですよ」

それから幸太郎さんは、ぼつぼつとマイケルさんのことを話し始め

た。

「喘息持ちだった親父は小さくてひよろっひよろで、そばかすだらけね、目だけが光ってるような子供だったんですよ。

『お前の顔は日本人離れしてるんじゃないかって、人間離れしている』よくそう言われていたそうです。

気弱な親父は、3つ年上の姉、嫁の母親の絵美奈と、後に嫁の父親になる幼なじみの紀文^{のりふみ}以外とは口も利けないようなそんな子だったそうです。

そんな親父は現実ではない世界、本やアニメなどに逃げ場を求めました」

マイケルさんがいじめられっこだったなんて信じられないな。でも、昔はハーフということだけでいじめられることもあったみたいだし、ただ、本やアニメが好きなことは別に悪いことじゃないんじゃない？ 逃げるって、何かやな言い方だな。そう思ったけど、私は口を差し挟まずに幸太郎さんの話の続きを聞いた。

「思春期を迎えてみるみるその容姿が整っても、親父の心は小さいいじめられっこのままだったんです。

ちょうどそのころ、タイミング良くというのか悪くというのか、祖父の事業が成功し、櫛原は飛躍的な成長を遂げました。甘いマスクと、大会社の御曹司というステータス。

幼い頃とは打って変わってモテるようになった事に一番ついて行けなかったのは、当の親父自身でした」

マイケルさんの生い立ち（前編）（後書き）

今回と次回でマイケルさんが結婚しなかった理由（できなかった理由とも言っ？）をお送りします。

ミューツス工業というのは「赤パニ」で出てきた彰教の会社。『のりちゃん』舎弟扱いされちゃってます。

それに、幸太郎の車も……ふふふ、こいつ企んです。

マイケルさんの生い立ち（後編）（前書き）

生い立ちというより、青春時代かな。

マイケルさんの生い立ち（後編）

「大体、そういうのは本当に親父の外見だとか地位だとかに惹かれている者が大半でしたから、親父も適当にあしらっていたのですが、一人だけ、華子さんという女性だけは違っていました。

ちょうど生みの母を失ったばかりの親父の心をすっかり支えてくれる優しい女性で、親父は真剣に結婚を考えていたようです。

しかし、妻の死をきっかけに一層仕事人間と化してしまった祖父は次々に事業を拡げ、二人は会うこともままならぬようになっていきました」

やっぱり、そんな人いたんだ。そうよね、外見だけを見る人ばかりじゃないもの。そうは思っても、私は胸の奥の方がちょっぴり痛かった。

「そして、ある日突然、華子さんは別れを切り出しました。

『もう待つだけの日々はいやだ。自分だけを見てくれる人の所にいく』

と。もちろん、親父だって止めました。

『もう少し待つてほしい。今の仕事が片づいたら父親に話すから』と。でも、華子さんから返ってきたのは、

『あんたその年で「ビューティー戦士ムーンレディ」だって？ キモいよ。あんたがお金持ちだと思って私、今まで何とか合わせてたけど、もう限界。オタクのお守りなんてもうコリゴリだわ』

という、今までの優しい彼女からは考えられない手のひらを返したような言葉でした」

「ひどいつ、その人マイケルさんのこと騙してたの！」

あきれた、お金目当てだなんて最低っ！

「その言葉に傷ついた親父は華子さんと別れ、祖父と共に仕事三昧の日々を送るようになったのです。

実はその頃、さる代議士のお嬢さんが親父を気に入り、華子さんに

身を引くように強要していたこと。華子さんもその方が親父のためになると自分から身を引いたことが判るのはずっと後の話です。

結局、親父はその代議士の娘との縁談もゲイだと偽のカミングアウトをして自分の殻に閉じこもってしまいましたが」

なんて、寂しい話なのかしら。それじゃあ、結婚もできないよね。

ん？ で、でもちよつと待って？ その話って……

「映画化された『コーラルブルー』」じゃないですか」

確かに原作はマイケルさんだけど、それ小説じゃないですか。

「ええ、親父（主人公の圭のように）は死んでないし、本当はゲイではなく、自分のオタク趣味を誇張して相手を引かせて破談に持ち込んだり、代議士ではなく、銀行の頭取のお孫さんだったり。人物が特定されないように巧く脚色されてますが、これ親父の実話から生まれた作品です。親父は華子さんに謝罪の意味も込めて、あの時彼女がどんな気持ちでいたのかを、彼女の気持ちになりきって書いたものなんですよ」

「華子さん、文句言ってこなかったですか」

自分がネタにされて。

「同じように、相手方の報復を心配してくれて、『ありがとう』言ってくれたそうですよ」

ホントに優しいいい人だったのね。

「それで元の鞘には収まらなかったんですか」

「事の真相を聞いたのが、華子さんの（もちろん別の男性との）結婚式ですからね。親父が『コーラルブルー』を発売したのがその18年後です」

そ、それじゃムリだね。

「その……それじゃ華子さんはともかく、頭取さんがなんか言っこないんですか？」

「あれから25年以上経つんです。頭取はもうとうに引退されておられるし、当のお嬢さんも別の方と結婚して久しいですし、自分だと特定される要素がなければ敢えて『藪から蛇』を突っつき出した

りしませんよ」

そんなものかしら。あれは自分のことなのよなんて、ミーハーに
える種のエピソードじゃないけどね。

「着きましたよ」

そうして、マイケルさんの昔話をしている間に、私たちはマイケ
ルさんが運ばれたという病院に着いた。無事でいてほしいな。私は
玄関の前でゴクリと唾を飲み込んだ。私の表情をまじまじと見た幸
太郎さんは、

「ああ、お連れして良かった。

すみません、怒らないでくださいね。

シャイで不器用な親父がああまでしてきっかけをつかもうとしたん
です。息子としては是が非でも今度は成就してやりたいと思うじゃ
ないですか。

過去のことは気になるかもしれませんが、生理的にいやじゃなけれ
ば、改めて月島さん、親父をお願いします」

と、さわやかな笑顔で意味不明なことを言って、病院の中に入って
いったので、私は首を傾げながら後に続いた。

マイケルさんの生い立ち（後編）（後書き）

韓流ドラマも真っ 青な純愛エピソード？ しかも実話ベースかよっ！

「実話をそれと見せずに書く」作家の皆様、そういう経験ありませんか？

『コレ、時効だよね』とか言いながら……

そうじゃなくても、この浅慮なたすくのこと、そこら中にたすくキヤラ充満してますが。

意趣返し

病院に入った幸太郎さんは受付にも寄らずまっすぐエレベーターホールに向かった。着いたエレベーターに乗った幸太郎さんは、迷わず7階を押す。あれっ、あの電話の口振りでは、あわてて奥さんが電話してきたっばかったんだけど、なんで部屋まで知ってるの？

「ふふふ、何で部屋まで知ってると思ったでしょ」
すると、幸太郎さんがそう言っていたずらっぽく笑った。で、でも何で私の考えてること分かるの？ 実は幸太郎さんってエスパー？ そう思った途端、幸太郎さんは私の顔を見て吹き出した。

「今、俺のことエスパーと思ったでしょ」

そして、また私の思っていたことを言い当てる。

「な、なんで分かるんですか」

「月島さんって分かりやすすぎです。ま、そこがあなたのいいところなんですけどね。」

でも、これは超能力でも魔法でもありません。言わばちょっとした手品かな」

「手品……ですか」

「コレですよ」

幸太郎さんはそう言って私に携帯を見せた。そして、メニューキーからアラーム画面を出す。そこには2番目のアラーム設定に、ウチにいた時間が表示されていた。あれっ、かかってきたんじゃなくてただのアラーム音だったんだ。

「じゃあ、マイケルさんが倒れたって言うのはウソだったんですか？」

それを見て私は、プリプリ怒りながらそう言った。内心ではウソで良かったって思ってたけど。でも、幸太郎さんは私に、

「いや、ウソではありません。ウソだったら病院なんて来る必要なんてないですよね」

と返した。

「本当……なんですか？」

「ええ、実際に倒れたのは昨日の夜ですが」

「じゃあ、何故こんな芝居みたいなのをしたんですか」

普通に昨日倒れたからきてくださいで良いじゃない。私がそう言つて怒ると、

「えっ、それはほんの意趣返しですよ。それと、再確認もあるかな」
幸太郎さんは、そう言つて笑顔で答えた。それにしても笑顔で『意趣返し』つて何？ く、黒い……黒すぎる。正巳も黒いけど、負けてない。幸太郎さんは、

「意趣返し？」

と聞き返した私の言葉には返事せず、

「さあ、着きました」

と言つて病室のドアを叩いて開いた。

冷蔵庫にクローゼットとソファア、窓際に置かれているベッドこそ病院仕様だけれど、それ以外は病室というよりどつかのワンルームマンションのような部屋。おそらくは特別室つてやつなのだろう。ソファアにはマイケルさんと同じ栗毛の髪の若い女性が憔悴した様子で座つていて、私たちが入ってきたのを見ると顔を上げて、
「パパ、遅いよ。たつた今……」

と言つて、うるうるの瞳を幸太郎さんを見てから、マイケルさんのベッドに目を移した。その仕草に私の脳は一瞬でフリーズした。

……えっ、たつた今つて何？ 幸太郎さん、笑つて『意趣返し』だつて。マイケルさん、ホントに死んじやつたの？ それつて、何かの悪い冗談だよ。ウソ、ウソだつて言つて！！

「ま……マイケルさん死んじやイヤあゝ！ お願ひ、もう一回目を開けて！ また、一緒にカラオケ行つて！！」

私は松葉杖を投げ捨てて、マイケルさんのベッド際に倒れ込むように縋りついて泣いた。

意趣返し（後書き）

更紗ちゃん、完全にとっちらかってしまっていて、何度書き直しても、ちゃんと語ってくれないので、もうそのまま放り出し。ま、この子は元々こつこつ子ですけど。

で、意地の悪い作者はここで次回へ。さて、武君は無事なのでしようか。（黒笑）

誤解スパイラル

私が、おぼつかない足でタツクルするようにマイケルさんにすがりつくと、

「ゲホン、ゴホン……」

と激しく咳き込む音がして、

「く、苦しい……」

という弱々しいうめき声が聞こえてきた。見るとマイケルさんは赤い顔で息も荒いけど、生きていた。

「マイケルさん……」

マイケルさんが生きている！ 私はただ、彼が生きていたことが嬉しくて、思わず自分から彼を抱きしめた。でも、マイケルさんは身を振つてもがき、その仕草でまた咳き込む。その様子を見た幸太郎さんが、

「重いですよ、月島さん」

と言つて、慌てて持ってきた折りたたみの椅子に私を座らせた。そして、『重い』というワードに私の顔がひきつったのを見て、

「すいません、決して月島さんが太つてるとかそういう事じゃないんですよ。元々気管が弱いし、肺炎で負担がかかっているから、今は着ている布団ですら重いと感じるようなんです」

と補足した。マイケルさん、肺炎だったのね。すごい病気とかじゃなくてホツとした。幸太郎さんは、私が体型を気にして顔に出したと思つたらしい。確かにボトムの方が大きい下半身デブだけど。実はそうではなく、私は私の気持ちが重いと言われてしまったのだと思つたのだ。

そして、座つて改めてまじまじ見たマイケルさんは何とも複雑な表情をしていた。

「更紗ちゃん、どうして来たの？」

どうせ、幸太郎君が大げさな事言っただけで連れて来たんだよね。ごめんね、昨日はちよつと酷かったけど、今日はもう大丈夫だから」

心配しないで早く帰つてと、マイケルさんはそう言うのと、また2、3回咳をして私から目を逸らした。

「迷惑ですか？ 私お見舞いに来てダメなんですか？」

私なんて、マイケルさんからすればがきんちよみたいなものだろうけど、私たち、お友達にもなれないの？ 悲しくて涙があふれてくる。ぐすつと鼻をすすった私に、

「な、泣かないで。迷惑だなんてとんでもない。……僕は嬉しいよ。でも、ここに来たことが分かったら、更紗ちゃんが旦那さんに怒られちゃうでしょ？ 電話で僕もう会いませんって彼に約束したものだから、僕に妙な期待を持たせないで」

と、私の涙に慌てた後、マイケルさんは沈痛な面もちでそう返した。妙な期待って……私もそういう期待してもいいのかな。ただ、さっきのマイケルさんの言葉の中に聞き捨てならないワードがあったんだけど。

「は？ 旦那さん??」

独身の私に旦那さんなんていない。誰と勘違いしてるんだろう。待てよ？ 今、電話って言ったよね……

「旦那さんって誰のですか？」

私は改めてマイケルさんにそう聞くと、

「もちろん、更紗ちゃんの旦那さんだよ。『俺の更紗に洋服なんて贈るな』って、すごい剣幕だった」

マイケルさんから予想通りの答えが返ってくる。間違いない、犯人は正巳だ。私は、

「それ、正巳って言う2つ下の弟です。あいつ、姉を姉だと思ってなくて、いつも呼び捨てだから。私は真正銘独身ですよ」

と言った。付け加えないけど、彼氏いない歴〃年齢だよ。

正巳め、絶対にわざとだわ。わざと弟だと名乗らずに電話したのに決まってる。こんなことなら自分で電話すれば良かった。

まったく、自分はさつさと嫁をもらっておきながら、人の恋路は邪魔するなんて、最っ低。腹黒だとは思ってたけど、『まっくろくろすけ』じゃん。しかも、かわいくないし。

すると、マイケルさんも私が独身だと分かってすごくホッとしたよな泣きそうな表情になった。

「更紗ちゃん、独身だったの？ 彼、玄関先まで迎えに来てたし、すごい目で僕のことをにらんだから、てっきりそうだと思ってた」あのとき、マイケルさんから私をひったくったしね。だから、電話番号も捨ててって言ったのか。私の中で一つ一つの誤解が解けていく。

「でもね、最後に直接一言だけでもお詫びが言いたくて、僕、記者会見の後、こっそり電車で更紗ちゃんの家の前まで行ったんだ。だけど、いざ着いてみるとインターフォン押せなくて……ずっと、あの近くをうろろしてたんだ。

そしたら、夜、更紗ちゃんと旦那さんが仲良くお家に戻ってきたから……望みはないって解ってたけど、それを見たらなんか糸切れたみたいになって、後は、どこをどう歩いたか覚えてない。で、気がついたら、ここにいたんだ」

だから、私に夫はいませんって。それに、昨日は正巳にも会ってないんですけど。一体、誰のことを勘違いしてる？

あ、昨日は庄司さんに送ってもらったんだっけ。そう言えば庄司さんと正巳とは背格好が似ている。ぜんぜん別人だけど、夜の暗がりでは正巳も庄司さんも同じように映ったのかもしれない。

「俺が見つけたとき、親父は朦朧としてしきりに月島さんに謝ってました。

で、ピンとききました、弟さんのことだなんて。今後のこともあるから、月島さんの家族構成は調べてありましたし、俺にも実の姉貴がいますからね、気持ちは分かるんです。でも、これはおイタが過ぎます。俺が見つけるのがもう少し遅ければ、命に関わることだったんですから。

それで、そっちがそうくるなら絶対にくつつけてやるって思った。親父の気持ちは分かってましたから、あとは月島さんがどう思ってるか。それを確かめるために、今回こんな芝居を打ってみました。月島さんも、親父のこと……」

「パパ、それは武叔父様に任せたら。パパは武叔父様にちよつと過保護すぎるわ」

私の気持ちを確かめようとした幸太郎さんをそう言つて制した奥さんは、

「あ、自己紹介が遅れました。私、この櫛原の妻の薫です」と、立ち上がつて私に深々と頭を下げた。

「あ、月島更紗です」

私も慌てて立つて挨拶しようとしたら、薫さんにやりわり止められた。

「お怪我されてるんですからそのままどうぞ」

「あ、すいません」

「つてかさ、薫、おまえさっき俺に何言おうとしてた？」

そして、薫さんに『過保護』と言われた幸太郎さんは、ムツとしながら彼女にそう尋ねた。

「そうよ、パパ、何でもう少し早く帰つて来てくれなかったのよ。大変だったんだから」

それに対して、薫さんはため息混じりでそう答える。

「一体何があつたつてんだよ。親父、落ち着いてるじゃん」

「今は終わったからよ。さっきまで看護師6人がかりだったんだから」

私も手伝つたから7人よと薫さんが言う。7人がかりで一体何をしただつて言つんだろ。しばらく首を傾げた幸太郎さんは、答えに氣づいた途端もつと不機嫌な顔になって、

「親父、いい加減注射器に慣れるよ。ただの採血だろ」

ぼそつと、そう吐き捨てた。ち、注射器？ 採血？？

「だって、怖いんだもん」

幸太郎さんにそう言われて、マイケルさんはしゅんとなりながらそう答えた。

「だからって、全力で逃げないで欲しいわ」

薫さんが呆れ顔でそう言う。

「怖いんだもん！」

マイケルさんは涙目でもう一度そう言った。50歳を過ぎた大の人が注射器から逃げてる図って……でも、マイケルさんならなんとなくそれもアリかもしれないって思うから不思議だ。吹き出してげらげら笑いだした私に、

「あ、とんでもないこと聞かせちゃったかな」

と蒼くなる薫さん。マイケルさんも、

「そうだよ、フロリーちゃん。コレで更紗ちゃんに嫌われちゃったらどうしてくれるの」

と、真っ赤な顔で薫さんをたしなめる。

「嫌わない嫌わない。なんだかマイケルさんらしいですもん」

それに対して私がそう言うのと、マイケルさんの顔がぱあっと輝いた。だけど、

「月島さん、甘やかさない。そうだ、次の採血には月島さんもいてもらおう。そしたら、親父頑張れるよな」

間髪入れずそう言う幸太郎さん。マイケルさんは、

「うっ、それは……頑張ってみる」

口をへの字に曲げながら、渋々肯いた。相変わらず、この親子は逆転してるな。でも、本当に良い親子だ。ずっと、側で見たいと思う。

「そう言うわけで、月島さん、こんなヘタレな親父ですけど、面倒看てもらえないですかね」

私は相変わらず『過保護』な幸太郎さんの発言に笑顔で頷いた。

誤解スパイラル（後書き）

ホント『過保護』な幸太郎です。

でもなあ、こつでもしないと、武くんと更紗ちゃんじゃ一生くっつきませんか。

残り福

私が頷くのを見た途端、幸太郎さんは、

「月島さん、俺、仕事があるんで会社に戻ります。夕方、またここに迎えに来ますんで、それまではごゆっくりどうぞ。ほら、薰行くぞ」

と私に頭を下げ、ソファーに座っていた薰さんの手をとって外に向かう。いきなり帰ると言い出したことに首を傾げた薰さんも、少し考えてウンウンと首を縦に振ると、

「へっ、それなら私が送って……ああ、ええ。私も奏が心配なんで帰ります。じゃあ、叔父様頑張つてね」

と、マイケルさんにウインクを投げて幸太郎さんと一緒に病室を後にした。所謂、お見合いで言うところの「後はお若い方同士で」って奴だ。ただ、状況を考えてみても、みためでも私とマイケルさんの方が年上なだけだね。

「ごめんね、幸太郎君が勝手なこと言って。あれでもね、普段は会社の事を考えるいい社長さんなんだよ」

マイケルさんは幸太郎さんがいなくなつたとたん、そう言って私に謝った。幸太郎さんはたぶん、本当にマイケルさんに幸せになつてもらいたいだけだ。だけどこんな風に私に父親を売り込むことができるのは、義理仲だからかもしれない。

「更紗ちゃん、本当に結婚してないんだつたら、僕のお嫁さんになつてくれる？」

更紗ちゃんはまだ2回しか会ってないって言うかもしれないけど。そうやって、待ってたら別の誰かにとられちゃうかもしれないから。そうなつたら、僕今度こそ死んでしまふと思う」

それから、マイケルさんは改めて自分の口でプロポーズしてくれた。開発部門の女は私ただけけど、周りは妻帯者とうんと若い智く

んだけ。黙ってたって誰も寄ってこないですって。だけど、

「そんな私はもてないですよ」

と言っても、

「うっん、更紗ちゃんかわいいもん。僕、心配で」

とゆずらない。

「私の方がマイケルさんのお嫁さんになんかなっていいんですか」

マイケルさんなら、もつとすてきな人が選り取り見取りだと思うけど。

「もちろんだよ。受けてくれるの？」

「私でよければ」

マイケルさんは私の返事を聞いて、

「やったあ！！　じゃあ、一刻も早くここから抜け出さなきゃ」

と言って大喜び。すぐにでも点滴の管（これは意識を失っているときにつけたものなので、大丈夫だったと後から聞いた）を抜きそうな勢いだ。

「ダメですっ、ちゃんと体を治さないと。私はどこにも逃げませんから」

私は慌ててマイケルさんにそう返した。

「解ってるよ。そうじゃないと、弟さんとちゃんと闘えないもん。」

弟さん、絶対に阻止すると思うから。幸太郎君じゃないけど、僕にも解るんだよね。フロリーちゃんと幸太郎君のことは素直に認められたけど、ベス……あ、僕の母親の違う妹のことなんだけどね、ベスと美久君のことはなかなかね。

僕の場合は、年の離れた妹だからなんだと思ってたけど、お姉さんでもやっぱりそうなんだと思って。弟さんに親近感感じたくらいだから。

それに、できるだけ早くご両親には挨拶しておきたいし。病弱だと思われたくないからね、きっちり治すよ」

「いいですよ、正巳の肩なんか持たないでください。あの子のせいでマイケルさんがこんな大変な目に遭ってるんですから。あいつに

は私が文句なんか言わせません」

正巳には何も言わせない。言わせるもんですか。でもパパは……ちよつとヤバいかも。

それから、私たちはお互いの家族の話をした。

仕事一辺倒だったマイケルさんのお父さんが今の奥さんと知り合ったのが15年前、あちらはなんと、私たちの倍の31歳の年の差なんですって。だから、お義母さんと言っても、8歳も年下だとか。仕事人間だったはずのお父さんは、そのお義母さん……クラウディアさんと結婚した途端、マイケルさんに会社を任せて社長を辞任。一応会長として籍は置くものの、家庭第一のマイホームパパに。これにはマイケルさんも驚くやらあきれるやら。

それはともかく、そうやって新しい幸せを掴んだ父親を見て自分もやりたいことをやろうと思ったんだって。それで、マイケルさんは若いときのあの苦い思い出をベースに「コーラルブルー」を書いたという。あくまでも仕事の合間の楽しみだったそれは、それを見せた友人のライターさんが出版社に売り込み、編集者さんも気に入って、あれよあれよという間に本になり、ベストセラーとなり、ついには映画化までしてしまった。

そうなってしまうともう、社長業の合間に執筆というわけにも行かなくなり、ちょうどそのころまとまった姪の薫さんの（マイケルさんが薫さんのことをフロリーと呼んでいるのは、英名がフロリーアなんだって）結婚相手が櫛原の社員の幸太郎さんだったことから、彼を養子にして社長につけたということだった。

それにしても、お嫁さんかあ。なんか実感がわかない。別に結婚するのがイヤだったわけではなく、好きな仕事をして、時々友達と遊んでそれで十分満たされていたから、焦ってしようと思わなかったただけだ。

そして、夕方私を迎えに来てくれたのは、社長秘書の宮本美久さん。実はマイケルさんの妹さんの婚約者だ。

ちなみに、年の離れた妹のベスちゃん（日本名は絵梨紗というらしいが）は、13歳でその彼氏の美久君が25歳とこちらも一回り違う。

マイケルさんは、美久君のことをなかなか認められなかったって言ってたけど、そりゃそうだ。一回りの年の差より、中学生が婚約の方があり得ない。しかも、政略結婚とかではなく、彼が彼女の命の恩人だというロマンチックな理由だと言うからびっくり。彼の口からも、

「タケちゃん（会社を引退した後は、みんなにはそう呼ばせているらしい）には幸せになって欲しいんです」という言葉が聞かれた。本当にマイケルさんはみんなに愛されている。

何で今まで結婚しなかったんだろうと思う反面、今まで一人でいて、一人でいてくれてよかったと思った。

運命の齒車は……回り始めると早かった

家に戻ると正巳がなんとも言えない表情で出迎えてくれた。

「更紗、悪かったな」

と言うので、

「謝る人が違うよ」

と返す。

「その……あいつは？ 今日、行って来たんだろ」

続いてこわごわと言う感じで聞いてくる正巳。あの幸太郎さんのことだ、『意趣返し』と言っていたくらいだから、きつと正巳にも危篤状態で明日をも知れないように言っただけに違いない。私は、ちよつと意地悪な気分になって、

「うん、なんとか。でももう大丈夫みたいだよ」

と、さもマイケルさんが九死に一生を得たように正巳に言った。案の定、正巳はそれを聞いてホツとした顔になっている。

「俺さ……あの歳であのルックスだろ。今は独身でも、バツの一つや二つは付いてる。むしろ、バツを付けずに遊んでるとか。とにかく、絶対に更紗が騙されてると思ってたんだ。そんな奴にはちゃんと一発かましてやらないとなってるさ。」

あいつがそこまで真剣に更紗のこと考えてるとは思わなかったから、
「ゴメン」

そして素直に謝った正巳に、私は、

「いいよ。マイケルさんも弟だつて言ったら、正巳の気持ち解ってくれたよ。マイケルさんも、姪御さんの旦那さんはすんなり受け入れても、妹さんの婚約者はなかなか受け入れられなかったんだってそれに、『もう誰にも渡したくない』って言うてくれたから。正巳のおかげだよ」

と笑って答えた。

でも、その後、

「にしてもさ、どこで知り合って、何でこうなったんだよ。更紗とあいつって接点なさすぎじゃん」

と、正巳に言われて、私は一気に冷や汗をかいた。ホントはたった3日前、お見合いを逃げ出してコケていたところを助けられたんだけど、それを言ったらこの子また反対しかねない。なんか適当な理由ないかな。私は慌てて考えを巡らせ、

「あ、あの……そ、そう、私の会社の人の紹介。マイケルさん、その人の学校の先輩なんだ」

と庄司さんを思い浮かべながら口から出任せ。このあと、本当に高校の後輩だと判るんだけど、庄司さんとマイケルさんは5歳違い。当然接点など何もない。

「でね、櫛原先輩と月島は絶対に気が合うだろうからって」

そう言いながら私は携帯を取り出してメモディーを検索する。流れてきたその曲を聴いて、正巳は頷きながらも呆れていた。曲はもちろん、『月夜の伝説』

「もう俺、何も言わない。更紗、幸せになれよ」

正巳は、あつけないほどあっさり折れた。だけど、相変わらず上から目線なのは何故？ 私、姉なんですけど。そりゃ、先に結婚したけどさ。

正巳は言いたいことを言うたとさつさと帰っていった。

そして夜、社長から電話があつた。あんな早退の仕方をしたんだから、一言報告を入れなきゃと思っていた矢先だった。

「月島、おまえもう今週中は来なくて良いぞ。ミュートスの副社長からのお達しだ。それから、来週でできたら、智にできるだけ早く引き継ぎしろ。期限は1ヶ月だ」

「へっ、どうして？」

で、いきなり切り出された話には蒼くなる。

私、何か致命的なミスでも犯した？ すると社長は、

「どうしてだあ？ おまえ、市原健と結婚するんだろうが。ミュートスの副社長がな、『相談役が大変なときに、婚約者殿をウチの仕事に駆り出しているのは申し訳ない、看病に専念してくれ』だよ」と、ちよつとムツとした調子でそう言った。

「は、はあ」

私は返事するしかなかった。

この時まで知らなかったんだけど、マイケルさんは今も相談役と言う形で櫛原に一応籍があるらしい。確かに幸太郎さんはミュートスの副社長を舎弟だって言ったけど、本当に圧力？ かけちゃったんだ。

「んで、明日の朝も櫛原の秘書が迎えに行くらしいからその車に乗れとよ」

「それで……良いんですか？」

「良いも何もおめでたいことだろうが。」

そりゃ、月島は俺にとって妹みたいなものだ、いつまでもいて欲しいよ。けどよ、だからこそ幸せになってもらわなきゃな」

社長は私にそう言うて電話を切った。

でも、一ヶ月で引き継ぎ？ そこから結婚準備に入れというんだろつか。

確かに私はマイケルさんのプロポーズを受けたけど、私、パパやママには何も話してないわよ。ママは私を結婚させたかった張本人だから、相手が変わったところで一も二もなく大賛成だろうけど、問題はパパ。パパに言う前に仕事を辞める算段をしてたと分かったら……更に反対されそう。

生まれて36年、さび付いて動かない感のあった私の運命の歯車。マイケルさんという潤滑油を得て回り始めたそれは私が考えていたよりもずっと高速で、私自身が一番付いていけてないって感じ……

でも、こんなのは序の口で、私はこの先もっともつと櫛原家に振り回されることになるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1006r/>

道の先には.....

2011年12月19日13時46分発行